



狩人は都を駆ける

オープニング・ムーブ（第一手）

昨晩から降り続く雨は、夜が明け昼もだいぶまわった今でも止む気配は一向になく、時折耳をすませば、土砂降りともまではいかぬものかなりの量の雨音と、空一帯を覆う灰色の雲が完全に日光を遮断していて、この分だと夜半過ぎにならないと雨雲と雨足は通り過ぎてくれそうになかった。

そんな空を陰鬱そうに窓越しに眺めていた青年は、薄暗い部屋の中に居る誰かと言葉を交し合っていた。とはいえ、青年の方は窓の外を見やっただけで言葉交わす相手に顔を向けていない分、端から見たら何かに心奪われていると思えなくもない。もう一人の方はというと、そんなことに気にもせずただ自分の意見を言いまくっている。熱心に話すあまり、声高になっていることにも気付いていないようだった。

「.....危険すぎやしませんか？ いくらなんでも」

おかしすぎますよ、と言い終わるよりも先に、言葉向けられた相手——青年の方だ——が「そんなことはないよ」と短く言った。そしてようやく、窓の外に見飽きたのか部屋の方へと顔を向ける。灰色に染まっているとはいえ部屋よりもわずかにぼんやりと明るい窓からの光によって、青年の持つ金色の髪は柔らかい光を放ち、動くたびに透けるような淡い艶を持つ髪は、まるで女性のそれのよう、いや、それ以上の輝きを持っていた。熟練したドワーフ細工士とて、彼の持つ金の糸のような髪を作るのは無理に等しいだろう。

彼はゆっくりと全身を後ろに控えている者の方に向けると、いつの間にか閉じていた目をすっと開けた。端整のとれた顔に、碧がかかった青の瞳は、どこか悲しげな、儂げな色を漂わせつつも——意志の強さが瞳の中に表れていて、その瞳を覗いてみようとしなくても、彼が何を言うか位誰しも見当がついた。案の定、

「...私は行くよ、キャンベル。毎年行っている行事じゃないか、何故急に行くのを辞退しろ、と？」

分かりきっていたことではあったのだがな.....、と、キャンベルは——彼はケンタウロスの騎士だ——、内心舌打ちしながらも、青年の言葉が切れる前に自分の意見をかぶせるように言った。

「しかしメディオン様！ 今あなた様は帝国から亡命した身ですよ？ 亡命された王子にご招待の手紙が来ること自体間違っているとは思いませんか？ あの狡猾な、こんなこと言っでは失礼ですが...皇帝がメディオン様を呼ぶからして何かの陰謀が働いているとしか思えません！ どうかお考え直しを...」

メディオンと呼ばれた青年は苦笑すると、首を横に数回振っただけで何も答えず、まだ雨の降る外が見える窓の方に顔を向けてしまった。

——彼は、元デストニア帝国第三王位継承権を持つ王子だった。しかし、世襲制の高い帝国で彼が王位を継ぐはずもなく、ましてや平民出の第二婦人の子とあっては、気位の高い帝国内では獅子身中の虫、他ならなかった。

そんな彼が光の遠征軍として北世界に行き、ブルザムを倒してからはや半年が過ぎていた。共和国フラガルド次期領主シンビオスと共和国代表ベネトレイムの力を借りて王都アスピアに身を寄せて——一通の手紙が帝国からメディオン宛てに送られてきたのはつい3日前のこと。内容は毎年この時期にある『とある』祝賀祭だった。

メディオン自身、亡命前にも毎年この祝賀祭には出席していた。但し、これには一つの決まり事があり——彼がそれを守ろうと破ろうと——それでどんなに「手痛い」目に遭っても毎年必ず参加したのだから、どんな理由にせよ、彼が参加しないなどと言う訳がないとキャンベルとて分かってはいた。がしかし、自分の仕える者がみすみす死に急ぐ行為を黙ってみてる訳にはいかない。だからキャンベルは止めるのだ。無理と分かっている。

キャンベルはまたしても窓の方へ顔を向けてしまったメディオンがたとえ自分の話を聞いていなくたって構わなかった。危険だということを認識してくれれば——そして、願わくば、今回の参加を辞退しようと考えてくれればそれでよかったのだ。しかし、

「...考えすぎだよ、キャンベルは。——とにかく、この件については私は帝国に行くよ。キャンベルはいつも通りに王城まで同行してくれるだけでいい、シンビオス殿とベネトレイム殿には私から話しておくよ、...」

ここでメディオンは言葉を切ると、キャンベルに向かってちょっと困ったような笑顔を見せた。分かっているのだ、とこの時キャンベルは直感的にそう思った。

「...多分反対されると思うけどね。——あ、それから軍のみんなにはキャンベルから伝えてほしい。それでいいね？」

思い出したようにそう付け加えて、彼は勝手に話を進めようとする。慌てたキャンベルが「しかし！」と反論を試みようとしたが、メディオンに真正面から見据えられて言葉に詰まってしまう。抗うことのできない強い意志を秘めた瞳に

、彼は言葉を失ってしまった。

「キャンベル、話は以上だ。私の決心は変わらない」

石のような固い口調に、キャンベルはもはや何も言い返せず……一礼すると部屋を出て行ってしまった。

ドアの閉まる音の後聞こえてくるのは、いつまでたっても止む気配を見せない雨の音。

……表に出さなくても、心の中は雨のように泣き続けている、まるで彼のような……。

「…参りましたな、メディオン様があの様な瞳を私に向けられたのは——2度目ですか」

首を振り振りキャンベルは独りごちりながらも、内心不安だった。メディオンを信用していない訳ではないが、彼の言葉に負けてもし万が一の事態になってはメリンダ夫人に申し訳がたたない。かといって、本人が行くの一点張りなもんだから、中立の立場に立たされている彼にとっては頭の痛い問題だった。

……さすがはドミネート皇帝の血を引くお方だ。

先程正面から見据えられた時、さしもの自分でも言い返せなかったのは、一瞬、皇帝と会いまみえているのかと思う位の威厳に圧倒されてしまったと言っても過言ではなかった。緊張感が全身を捕らえ、反論しようとする事すら許されない、張り詰めた空気が王子から自分に注がれている場で我を通すことなどできるものか。

何があっても自分は王子の側を離れますまい。決まり事とはいえ事情が事情なのだから、王子と一緒に居たとしても大目に見てくれは……。

一瞬、キャンベルは歩く足を止め、考え込んだ。——やがて、

……いつも目につく場所で私が待機していればいいのだ。それなら大丈夫だろう。ちょっとくらい離れていた場所でも王子が目にも留まる場所に居る位なら決まり事を破るような行為ではないだろう。

キャンベルはそう思い直すと再び歩き始めた。だが、それで肩の荷が下りた訳でもない。もちろん分かっているつもりだが、そうでもしないと立場という重圧に押しつぶされそうだからだった。

パタン、と扉が閉まると、一瞬静寂が室内を包んだが、すぐにそれは雨が屋根を打つ音にとって変えられる。誰も居ない部屋をぐるり、と目で確認するように見回したメディオンは、退屈そうに再び窓に体ごと向けると、片手を使って出窓を半分開けた。

途端、激しく降る雨の音が彼の耳を刺激したが、彼は一向に構わない様子で外の景色を見やっていた。とはいえ、雨に塗りつぶされた外の景色は城壁すら見ることも出来ない位で、何を見て楽しんでるのか、彼を見た人は必ずそう思うだろう。

実際、メディオンとて楽しんで窓の外を眺めている訳ではなかった。

彼は物思いに耽っているのか、いささか虚ろな瞳で外をそれとはなしに眺めているようだった。時折、雨と共に吹く風が、微かに雨粒を運んできては彼の髪を濡らし、揺さぶった。

メディオンは溜め息をひとつこぼすと僅か首を横に振り、自分にしか聞こえない位の小さい声で窓の外に向かって——顔が窓に向いているだけだろうが——ぼつりと独り言を吐いた。

その言葉は降る雨の音でかき消され、流されていく。誰も聞いていない、但し自分だけが聞いているその“名”を、彼は飽きもせず言い続けていた。——その名を持つ者は二度と自分の前に姿を見せるはずがないと、認識しているにもかかわらず…。

彼の後ろで、机の上に開かれたままの封筒と、出したままの便箋が湿った風にふわり、と浮くように机から離れ、舞うように落ちていった。

その後、遅らばせながら細長い紙切れが一枚、やはり風にさらわれるようにして机上をすべり、先に落ちていた封筒と便箋の上に重なるように落ちていく。

メディオンはそんなことに気付いた様子もなく、同じ言葉を繰り返すばかり。

——その紙切れには、こう書かれてあった。

『帝国皇帝ドミネート誕生日記念式典・招待状』と。

おそらく——彼は気付いていないだろう。
名を呼ぶ者が近いうちに自分の前に現れることを。

「.....つくし！...何だよ、こんな上天気風邪ひいた訳でもあるまいし、.....誰かが噂してんのか？」

誰も居ないことは先刻承知だ、だからオレが独白してても聞く者など居る訳が無い。分かってはいることなのだが、噂をしている奴が近くにいるのかと、オレは上体だけを地面——というの気が引けるから、草原と言った方が適切かもしれない——から起こして首を左右に振って周り確かめた。が、やはり人が近くにいる様子もなく、周りは草原の草が、風によって揺れては互いにぶつかって出す微かな音しか聞こえず、不自然にそれを遮るような人の近づく足音など耳に入らない。

.....誰かに噂されるような理由などないけどな。

思い直して、上体を起こしていたオレはもう一度草むらに身を横たえると真上で光を浴びせている太陽に向かってぼやくように呟いた。こんな暖かい場所で風邪をひいた訳でもあるまいし.....。

場所、天候どれをとっても風邪をひく訳のない上天気の上の状況で、いきなりくしゃみをした理由なんて考えられることといったら、誰かが噂を——オレのことを、だ——しているとしか思いつかなかった。.....良し悪しは別だぜ。

そんな、「どうでもいいこと」と、誰しも思うはずのことが何故か頭から離れられない。噂されようと思ったこっちゃないのに誰に自分のことを言われているかと考えるなんておかしいじゃないかと頭で思っても、思考を止めることはできず、見えない相手をオレは必死に心の中で捜していた。

捜しているというより、むしろ答えがそれであってほしい、と希ってたからこそ振りをしていただけなのかもしれない。

納得のいかないままに最北の地——決してここのような、太陽の恩恵にあやかるとの出来ない、凍てついた大地——グリーンで半月前に別れた少女。「ジェーン...？」

名を口にするだけで、別れ際に見せた表情を思い出してしまうのは、納得のいかない別れをただけでないことは分かっていた。いや、本当は自ら納得させるような別れを告げてきたのはジェーンの方で、オレは何もできなかったんだ。

一言、言う勇気を出すことすらできずに.....。

『誰だってそう。男の人は永らく同じ場所に留まることを知らないのね』と言って...そして、彼女は笑った。

はにかむような、控えめな笑顔を見せて、もう一度。

『ジュリアンも、いつかそうなるんじゃないかって、思ってた』

涙もみせず淡々と語るジェーンは、オレが出て行くことを知っていたようだった。それは直感じゃなくて、そんな性格だと分かっていたから。

『...ジュリアンは、風だもの。同じ場所で均一に吹いてる風じゃないわ。いつかは駆け出してしまうものだと。...けどね、』

そこでジェーンが俯いたのは今でもハッキリ憶えている。涙をこらえているような、不自然な間。

ふいに顔をあげた時、無理に笑顔を見せている自分を意識しているのか、頬を朱に染めていた彼女。

『私は、やどり木のようにあなたの側にはいられない。なれる力を持ってないって分かるもの。だから自由にするの。風を永く同じ地に留められないことと同じように。...心配しないで。私の故郷はここだもん。同じ大地に咲き続ける花のようにずっとここに居るから、いつか又機会があったらここに来てね、ジュリアン。.....いつでも待ってるから』

一人でも平気よ、と見かけだけで虚勢を張ったジェーン。

オレは一言も喋らずに、彼女に背を向けた。ただ頷いただけの別れでも彼女はオレを呼び止めようとしなかった。もしかしたらジェーンはオレに話をさせまいと水を向けたくなかったのかもしれない。

言い訳めいたことや、別れの言葉を——聞きたくなかったからこそ、珍しく一人勝手に話していたのだ、と気付いていてもオレは引き返そうとしなかった。納得のいかないまま、わだかまりだけを彼女に残して去ってしまった。

——それしか 彼女に与えるものはオレにはなかったのか？

「ちっ.....嫌なこと思い出しちゃったな...ジェーンが俺の噂してるなんて分かる訳ねえのによ」

少しずつ傾き始めている太陽に、午後を過ぎたことをぼんやり感じながらオレは一人毒づいた。後ろめたい気持ち——

一行く当てががないにもかかわらず、グリーンを離れたとした行為——が裏返っていて半月前の記憶をほじくり返す自分が情けない。そして何より、納得のいかない別れをしてしまった行為も。

こんなことなら、話に間を空けないジェーンに無理やり耳を向けさせて別れの言葉でも言えばよかったかもな……。

いや、それはまずいか。いくら何でも強引すぎる。

……って！ 何また蒸し返してんだオレは！

「…そろそろ、出発するか。ロクなこと考えやしない」

誰にともなく独り言を吐いて、オレは寝ていた体を起こして立ち上がり、足で横に放っておいた剣を蹴った。浮いたタイミングで剣を掴む。

「よっ…、と」

剣を背中にかけて、その時だった。

何故かふっ……と、ある人物の顔が頭の中に割り込んできたのは。

ジェーンと似たような、儂げな表情を時折見せ、青い瞳は全ての悲しみを含んだような、感情を表に出さない、ある意味食えない男。

え……？

「メディオン…？」

…何であいつの顔が出てくるんだ？

メディオンは——オレにとっては——苦手なタイプの対象に位置する奴だったにもかかわらず？

あいつの軍に居た頃、顔に現れたその儂げな表情を見て最初は、

「こいつは一体、何を思って戦場に居ずまっているんだろうか」

とオレは疑問に思い、不安を覚えたこともしばしばあった。およそ軍を指揮して動かす將軍などの位には不向きな性格だなど分かっていくうちに、あいつが隊長を気取ってるのはやはり高貴な出のせいかな、と苛立ったこともある。

が、すぐにそれは誤解だと気付いた。好きで戦場に自らを措いている訳ではないのだ、自国の為とか、榮譽の為ではなく、ただアスピニアとデストニア——2国間戦争——の対立を軟化させる為に、自分に出来る事、それは戦争を終結させること——。

メディオンが戦場に立つ存在理由はただそれだけだった。

そんなあいつの内面も、行動を共にすることで少しずつ理解していったが、苦手であることには変わりが無い。何を考えているか分からないから、だ。

オレとは違って、行動する前に躊躇する奴だったから、そんなところもウマが合わない理由の一つかもしれない。

それと、あまりにも自分の感情を抑える奴だったから、人格を掴み難いためたったからかもしれないけど……な。

しばしメディオンのことに没頭していたオレははたと気付く。

だから、何だっであいつの顔がいきなり出てくるんだ？ 理由が分からない。あいつのことを思い出すきっかけなんぞなかったはずだぞ？

そこでオレは、さっきから頭を悩ませているくしゃみ——噂——のことまで頭を戻す。

まさかメディオンが噂の張本人、なんてことは…ありえないよな。

一瞬、そう思いかけた自分の考えを慌てて否定する。

いくら光の軍勢として共に北世界に遠征した、ジュメシンの仲とはいえあいつがオレの身を“案じた”ような素振りは一度も見せなかったし、北の地でシンビオスと共に別れるときでさえ、お決まりの言葉を言うだけで、たまに見せたあの儂げな表情を浮かべもしなかった。そんな奴がどーしてオレの噂をすると思う？

と、いうか…なんで決め付けようとしてるんだ……？

いよいよ頭がどうにかなっちゃったのか……？

「……つと、こうしちゃ居られない。そろそろ行かないと夜中に町に着くことになっちゃう、急がないと」

ポーッと突っ立ったまま、またしても考え込んでいたオレは変な考えを振り切るために思考を現実に引き戻し、自分を納得させるために独り言を吐いた。陽はすでに西にかなり傾いているが、急いで歩けばなんとか町に着くことはできるだろう。

夜前に着くようにしないと、折角の目的地が目前で閉まってしまう恐れがあるしな…。

かぶりを振って考えていたことを頭から追い出し、オレは草むらから街道に戻った。誰も居ない街道を傾いた太陽の

照らす方角へ歩いていく。

.....さっきのあれは噂のせいで出たんじゃないさ。くしゃみしただけで噂されてるなんて迷信があるもんか。

そうオレは自分に諭すように結論付けた。

街道の果てに微かに見える町はまだ遠く、足早に歩かなきゃ着かないだろうなと考えつつも.....。

ここ、パルメキア中央よりやや東に位置する小国「カシナート」、周辺諸国で1、2を争うほどのカシナート最大の交易都市「リユーン」は、大陸内部一帯の温暖地方——いわば寒さとは無縁の気候のことだ——に覆われた、恵まれた国だ。そのせいもあってか、この国は永世中立を保っており戦や侵略などとは無縁の国でもある。だからといって自国にもし敵が侵略しても黙って見過ごす、などということはない。その場合はしかるべき手段で侵略者を排除する力も併せ持っていて、決して軍事に関与していない訳ではない。

それを象徴するかのように、王都も兼ねたリユーンには常に軍が駐留している。リユーン守備隊や国を守る為に結成されたカシナート第一～第五正規軍は他国に及ばぬほどの戦力を持っていると、周辺諸国からもつばらの評判を受けるほど。

そんな外観を国外の人間から見れば「平和な国だ」と思われがちなのだがそうとも言えない。国は国で内側に厄介事を抱えているものだ。魔物もいれば、盗賊もいる。他の国と大して変わってる訳じゃなかった。

ただひとつ、他国と違う点を挙げるとしたら、リユーンが他の都市とは少し違っている点か。

リユーンの街全体はさすが商店や隊商の集まる出店などがひしめくように立ち並び、交易都市と呼ばれるに恥じない活気盛んな街だ。国の中心にあたる町だけあって、ここら内陸部の大きな都市だけにある精霊宮——4大精霊を祀り、精霊の加護と厄災を祓う場所のことだ——もあれば、内陸では有名な、魔術師達が集まり、古代文明や魔術の向上を目指す団体、魔術師学連のリユーン支部「賢者の塔」もあるし、東の果てにあるエルベゼム、西のボルカノンに次ぐ大陸中央では最も厚く信仰されている聖北教会のリユーン支部もあった。

でもこれだけじゃ何ら他の町と変わらないと思われがちなのだが、それはこの町にあちこち点在する「冒険者の宿」を見ていないからだろう。

冒険者とは、剣士であり、傭兵でもあり、魔術師でもある。しかし定職——オレみたいにあちこち渡り歩く流れの傭兵みたいなもんだぜ——につかない者達が集まり、時にはパーティを作って宿で見つける依頼を受ける、そんなギルド直営の宿がここリユーンにのみ存在している。

宿には彼らが多数集まっていて、中には宿にずっと常駐し、決まったパーティで依頼を受ける者もあれば、一時期身を寄せて路銀や資金調達のために宿の扉を叩くものもいたり様々だ。

何故オレがそこまで知っているかなんて、同業者連中には有名だから耳に入るのは必然だ。そこから情報を頂いたって訳さ。

その、冒険者に依頼する依頼内容もこれまた色々あるようだ。...まあ、民間を対象に依頼を受けるのがここのギルドの特性のようで、軍や政府が動いてくれそうにもない依頼——人探し、護衛、魔物退治に何らかの手伝い等——が殆どらしい。厄介な依頼を冒険者に委ねる意味も兼ねてギルドがこの町に存在するってことだ。

でも、冒険者は金を稼げるし、軍や国は厄介事の依頼が減るから、2つは衝突せず、お互いの立場を黙認している。利害関係が一致している以上、対立など無意味だからだ。

ま、そんなことまでオレや他の冒険者は興味がないけどな。

やや南に向かって延びる街道を進み、大分町に近づいたところで、つと足を止めて呼吸を整える。陽も大分沈んできているようで、薄暗い闇が周りを包み始めている。

あと1時間位で着きそうだな、と思って——ふと、左の方角——東の方だ——を向いてみると、暗い雲が空を覆っていて、しかも遠目で見ても分かるくらい、その雲には稲光が走っていてこちらに向かって進んできているのは自明の理だった。

「...夕立か？」

ついてないな、と内心オレは舌打ちすると、前に向いて走り始めた。もう少しで町に着くつのに、雨に見舞われるのは御免だ。走ればなんとか雨が降る前に宿に入れるだろう。

.....雨、か。

走りながら頭に浮かんだのは.....あの日、『雨が好きなんですよ』と微笑をたたえて言った男。雨が好きな男なんてあまり居そうにもないが、あいつだけは違ったな、メディオンだけは...

性格と、雨の醸し出す憂鬱感が実にそれに合っていて、妙に納得してしまったことがあった。その時「鬱陶しくて俺は好きじゃない」と返事を返したら何故か悲しげな表情を浮かべていて.....

でも、もう会うこともないだろう。永遠とまではいかないかもしれないが、シンビオスやメディオンに会いに今は東へ戻ろうとは考えてないし、戻る理由も無いからだ。

...だから、これが最後だろうな。あいつのことを思い出すのも。

認識してはいた。過去を思い出しては戻ろうとしていた甘い自分を。けれど戻っても自分の居場所はおそらくないだろう、という気持ちも同時に実在していて。

一介の傭兵が身分の高いあいつらの側に居ても、たとえ世界を救った奴だからって、周りのものがいつかはオレのことをけむたがるだろうし、実際オレが身分の高い奴らの送る窮屈な生活に耐えきれそうにない。だから北に向かったんだ、ジェーンと共に。——結局飛び出してしまったけど。

.....元気でいろよ、メディオン、シンビオス。

走りながら、心の中でいつか言ったあの言葉をもう一度繰り返した。あの雪しか降らない大地の都リモテストでシンビオスとメディオンに別れを告げた時のセリフを、自分の心に決別をつけるかのように。

おそらくこの街道を東に向かって歩くことはないだろうなと思いつつも、ようやく街道の先にはっきりと見えてきた、リューンの町にはぼんやりと明かりが灯され始めていた。

「.....私は、メディオン様が心配なのだ。分かるだろう、お前なら。お互い守る為だけに側に居る訳じゃない.....この世界に必要な、大切な方だからこそ止めているのだ。お前とて私と同じ立場に立てばきっとシンピオス殿を止めようと.....！」

ドンと大きな音を立てて、キャンベルはテーブルを叩いた。向かいに居たダンタレスは一瞬目をパチクリさせたが...
...キャンベルをなだめるように両手を振って威勢を制した。

「お前の気持ちは分かるが.....メディオン殿は自分で決着をつけようとしているのではないかな？」

ダンタレスは口元をやや歪めながら言った。

ここはアスピア城の西館——アスピア城は大きく分けて謁見や政治・領主を集めて会議を行う場所が多い中央館と、アスピアに駐留する兵士の詰所も兼ねた西館、王都を訪れた領主や貴族が利用する客間や、城で上位の位に位置する者達の自らの部屋がある東館がある。

3つの建物は中央館の左右から通路が伸びているだけでなく、3階にも連絡用の通路があり、尚且つ東西の館から中央を經由して行く手間を省くように中庭の上に置かれてある。

がしかし、両館の殆んど端に通路があるのと行き来が余りないせい か、通行する者はいないに等しい。.....せいぜいメディオンに会う為にキャンベルが通る位しか利用されないのだ。貴族と兵士の間に通路を利用することなど滅多に——と、いうか殆ど——ありえないから仕方がないが。

さて、西館には大勢の兵士が利用するために地下に大広間一つぶんはある位の食堂が設けられている。夜になれば勤務の終えた兵士が酒を飲む酒場が変わったりもする、いわば彼らの憩いの場だ。普段は酒に酔った兵士の陽気な声が聞こえたりもするのだが、今日はケンタウロス2人以外姿が見えない。というのも、キャンベルが、半日かけてシンピオスと共に王都入りしたダンタレスと共に酒宴を開こうと、ここの食堂兼酒場を切り盛りしている主人に話したら頼んでもいないのに貸し切りのような形にしてしまった。気を利かしたというよりも兵士達が思うように騒ぐことが出来ないという理由もあるのだろう。

彼は他の兵士に迷惑ではないか、と言って逃げようとしたのだが、無理だった。『王都にも酒場はありますから心配ないですよ。それに私の方からも常連客に言っておきますから』

そんなもんだから、この大広間で2人だけで酒を飲むことになってしまったのだが、広すぎる部屋で飲むということは贅沢というよりもむしろ不気味だ。普段の喧騒がないぶん静かすぎて自然と辺りを気にしてしまう。そのせいか、やたら周りを気にするダンタレスにキャンベルは小心者だと笑って彼を何度も無然とさせた。

そのダンタレスもようやく酔いが回り始めたのか、辺りを気にすることなど忘れたようで、キャンベルの話を適当にあしらいながら、エール酒の入ったジョッキを片手に持ち、もう片方の手は先程キャンベルがテーブルを叩いたせいで散らばってしまった、木の実を軽く炒ったものを彼はつまみでは口に入れていた。

「決着.....？」

半ば訝しむように視線を送るキャンベル。

「これは私の推測だが.....メディオン殿は共和国に亡命されてからも帝国のことを案じていたのではないかな？ 亡命したから帝国など関係ないとすっぱり縁を切るようなお方ではないと私は思うが」

「それが、決着とどういう関係なのだ？」

横槍を入れるキャンベルにダンタレスは困った顔を見せ、

「そう急かすな。.....招待の手紙が来たことは、少なくともまだ帝国での身分は存在しているはずだろう？ 第三王子という身分が。.....それを捨てるかどうかは分からないが、おそらく一王子としてな何かやるべきことを成し遂げに行くのだと、私は思うがね」

「成すべきこと？.....王子は帝国に戻るおつもりなのだろうか.....」

いやしかし、それならシンテシスやウリュドも連れていく筈だ、彼らにはその通達はしていないし.....それに、私にも.....。

「まあ、キャンベルはメディオン王子と式典に同行するのだろうか？それならそこまで心配することは.....」

私が小心者ならあんたは心配性だな、と薄ら笑いを浮かべたダンタレスの言葉に、キャンベルは辛そうに視線を地面に落とした。やがて、

「それが.....王子は当初、誰も連れていかない、もちろん私も同行を認めないと言っていてな.....」

絞り出したような彼の声に、ダンタレスは我が耳を疑った。

「.....？ それは...本当か？」

彼の問いかけに、向かいにいるケンタウロスは、ひとつ溜め息をついて...はっきりと頷いた。

「どうして.....」

「これは“約束”でな.....あの式典に出る際に3人の王子に課せられた、とある約束事のせいなのだ.....」

キャンベルは重い口を開くのを拒んでいるのか、少しの間を開けた後、ダンタレスにぼつりぼつりと話し始めた。

.....約束を定めたのはいつのことかは覚えていない。けれどメディオン様が生まれた後、というのは確かだ。マジェスティ様とアロガント様のみ居た時に式典はやらなかった...はずだ。なぜなら共和国独立のごたごたでそんなことをやる暇など兵士も.....そして、皇帝も、全く無かったからな。

メディオン様が生まれて何年かたった後に.....ようやく落ち着いた帝国に誰が言ったかは知らないが、皇帝誕生を祝う祝賀祭を毎年行うと決定したのだ。——いや、もしかしたら皇帝ご自身から決めた事なのかもしれないな。そこで皇帝はこう、2つの約束事をお決めになられたのだ——。

一つは、式典の3日前に皇帝は一切の政(まつりごと)を放棄して帝都郊外の別荘...

...御用邸と言った方がいいかもしれないが.....で静養するということ。もう一つが、そこに3人の王子を、お付きや護衛の者一切を連れてこないで一人で来るように、ということだったのだ。つまりは親子水入らずというものだな。

普段は会うことも滅多に出来ないからこそこういうものも必要だろうという皇帝のお言葉はすぐに可決され、その年から式典の3日前に皇帝とメディオン様含む3人の王子は別荘で過ごすようになった。

だが、やはり上のお二人の王子はメディオン様を快く思っていなかったせいか、まだ年端もいかないメディオン様をいじめていたらしい。もちろん、皇帝の目の届かないところでだ。これは別荘で働いていた者から聞いたのだが.....。

それでも、王子は毎年必ずこれを含んだ一連の式典には参加したのだ。おそらく、参加を拒んでも一時しのぎ程度だということと、そのせいで皇帝に——父親に、良くない印象を持たれなくなかったからだろうな。

そして、3日目の式典の日に皇帝と3人の王子は別荘を離れて王城に戻ってくるのだ。式典は我々側近の者ももちろん参加はするが、王子の側にいる訳ではなく、皇帝や3人の王子の居るテラスを囲むようにして肩越しに皇帝のお言葉を聞いているのだ。それが終わってようやく祝賀祭の段階に至ったところで、メディオン様と3日ぶりに対面できるのだ。

「...なるほど。それでお主の帝国行きを拒んだと言う訳だな。——その、皇帝が決めた約束のせいで」

キャンベルの話が一段落し、呷るようにエールのジョッキを口に運ぶ彼に、少しの間を空けてからダンタレスは言った。

「それで今年も...その、一連の行事があるから、お主を連れて行くことは出来ない、とメディオン王子が言ったのか？」

式典と言わなかったのはやはり共和国への忠誠心が高いのだろう。いまは自国と冷戦状態にある帝国でも、一度は刃を交えた敵国の王の誕生日など誰でも祝いたくないものだ。

ところが、ダンタレスの問いにキャンベルは首を横に振って、ジョッキをやや横柄に置くとこう言った。

「いや.....今年の式典は、第二王子アロガント様が亡くなったこともあって服喪の意味も兼ねて別荘での滞在期間はなくなっただけなのだ。——だからメディオン様も今回は式典のみの参加で、式典前日の明日に出立という訳なのだよ」

「.....それなら、キャンベルも同行しても構わないのではないのか？ お主は式典時には参加していたのだろうか？」

ダンタレスが半身を乗り出すように切り出しても、キャンベルは伏せ目がちに、またしても首を横に振ってこう言った。

「.....それが.....、メディオン様がな、亡命した私に着いてきた皆に被害が加わると危険だから、今回はいつものように私一人で行く。——こう、おっしゃったのだ。」

約束を守る意味も兼ねてな——。

キャンベルは心の中でそう付け足した。

——王子は約束を盾にして、一人で行くことを申し出たのだ。

キャンベルは先日のメディオンとの会話を思い出していた。ひどい雨の日、いきなり自分を呼び出した彼は、来た途端出し抜けに手紙を差し出して『どう思う？』と問い掛けてきた。読んでみたらそれは皇帝の誕生記念式典の件だった。

亡命した王子にこんなものが来ること自体が怪しいから止めといたほうが無難でしょう。そう言ったにもかかわらず王子は『行く』とにべもなく私に言ったのだ。どんなに止めようとしても徒労だった。それどころか同行を申し出る行為さえもはね返したのだ。

『たとえ今回が式典のみだとしてもキャンベル達は私と共に亡命した身ではないか。それに、招待状が来たのは私だけ。なら私一人しか呼ばれていないことになる。……そうだろう？』

そして、式典の前衛——御用邸での滞在期間だ——が無いからといって側近の者を連れて行くのは、やはり約束を破る意味も兼ねているのではないのかな？

そう、雨が止んだ次の日に。

彼は……言われるのを予想していたのだろう、いきなり同行者は要らないと言ってのけた。これにはグランタック殿を含め、ベネトレイム代表国王やフラガルド次期領主シンピオスらに猛烈に反対された。しかし王子は返事を覆すことなく要らないの一点張り。——おそらく今日、共和国入りしたシンピオスにも王子は最後まで留まってくれと言われているはずだ。

「それで？ 帝国の猛将キャンベル殿としてはどうするつもりかな？」

半分からかい調子を含んだ言い方で、ダンタレスはキャンベルの様子を窺うように上目使いで話す。もちろん、そんなものに屈するキャンベルではないと思っているからこそ、そういう態度を彼がとっていること位キャンベルとて判っていた。だから、

「聞くまでもないだろう。——メディオン様は私が守る。それだけだ」

あっさりと言い放つキャンベルに、ダンタレスは溜め息をついて——すぐに口元を歪ませ、困ったような、けれど嬉しそうな笑顔を向けた。

「メディオン殿は承諾してくれたのか？」

「……渋々、な。ベネトレイム代表国王とシンピオス殿のおかげで、最後にようやく私だけ同行を認めてくれたのだ。——だが、メディオン様が明日何をするか分かったものではないからな。念には念を入れて行くつもりだ」

その時……一瞬、深刻な表情を浮かべたキャンベルをダンタレスは見逃さなかった。すかさず、

「何をするか分かったものではない、とは？」

彼が言い放った言葉にキャンベルは表情一つ変えることなく……また首を横に振り、一つ溜め息をついて、ぼつりと言った。

「……何も起こらなければいいのだがな……」

グラスに浮いた氷をそれとはなしに見つめているキャンベルを、ダンタレスはそれ以上詮索しようとはせず、ジョッキにエールを注ぎながら頷いただけだった。

「ま、何にしろ、お前は王子を守ることに専念しとけよ」

励ますこと位しか私には出来ないからな——と、顔に浮かべて言うダンタレスに、キャンベルもつられて笑顔を返した。そして、

「……言われなくてもそうするさ。……裏をかかれぬよう気をつけて明日は何としてでも王子と同行する」

……裏をかかれる？

ダンタレスはその一言に疑問を抱いたが、余計な詮索をしても意味が無い、と思い直してジョッキを口に運んだ。

その意味を知るのが明日だということにも気付かずに……。

雨の音が屋根を通して響いてくる。

さっきから東の方に淀んでいた黒雲はどうやらこっちに来ていたようだ。

主人がつと窓の方を見やると、夜の闇にかまけて見えないが、雨足はかなり激しく、雨雲が通り過ぎるのは夜半過ぎだと感じせざるを得なかった。

——こりゃ今日はもう客はこないかな。

窓から目を離し、カウンターから辺りを見回しても知った顔ぶれしか居ないようだ。仕方なく主人は調理の手を止めて、流しに放つたらかshにしてある汚れた食器を洗おうと手をかけた。

その時だ。

木製のドアの扉が、しなるような音を立てて開いた。瞬時に雨の音がドアから洩れて激しく響く。習慣のせいで主人

は食器を手にしたまま、扉の方を見るため反射的に顔を上げた。

扉を開けて入ってきたのは、全身雨にうたれてびしょ濡れになっていた、山吹色の髪をした青年だった。容姿・風貌からして流れの傭兵の感がする。

雨に濡れて顔を塞いでいた髪をひょいと持ち上げると、バンダナを額に巻いた利発そうな顔が表れた。手練の傭兵と思えるような、隙のない眼差しで周りを見回すと、彼は主人のほうに向かって歩いてきて、カウンター越しに言った。

「.....登録と、それから部屋の空きはあるか？」

.....なんてこった。

オレは独り心の中で毒づく。

それ位しか自分の運のなさを嘆くより他はない。

リューンに向かって先に走っていたオレをまさか雨雲が追い越すとは思ってなかったから、町に着く一歩手前で滝のような雨にうたれるなんて考えもしなかった。

案の定オレは頭から大雨の洗礼を受けてしまい、ずぶ濡れでリューンの門をくぐると、中心に向かって延びている大通りにはもはや誰の姿もなく、自分が歩いて立てる靴の音だけが雨音に混じって空しく響く。

煌々と建物から洩れる光だけが雨の中を一人歩くオレを照らし出している。とりあえずは目的地を目指さない限りは今日泊まる宿さえも手に入らないかもしれないな.....。

オレは以前聞いた、大通りに面した所に有る宿、「風の森」亭に向かうことにした。そこはリューンのギルド公認指定されている冒険者の宿の一つだ。

点々と町内に散らばっている冒険者の宿の中でも依頼の数が多いと聞き及んでいるが、この際依頼は二の次だった。今は雨露しのげることを最優先させないと、そのうち自分が風邪ひいてしまう。

雨に濡れて重くなっているマントを、オレは片手にたくし上げるように持って走った。地面を流れるように伝う雨をはじく音は相変わらず誰も通らない街道に、そして町全体に聞こえるようだった。

目指す目的の場所に近づくにつれて、微かな喧騒の音が雨に伴った風に乗って聞こえてきた。もうすぐだ。

濡れてずり下がった前髪を上げる行為ももどかしく、オレは半ば飛びつくように「風の森」亭の扉を開けた。

かしいだ音を立てて、オレが扉を開けて入ると、一瞬、中で酒に酔って騒いでいた客——おそらくここに泊まっている冒険者や、リューンに住んでいる者だろう——の喧騒がすっ...と静まり、入ってきた自分に向けて値踏みするような、舐めまわすような鋭い視線を突きつけてくる。

そんな視線を気にする余裕もないオレは、ようやく顔を覆っていた前髪をひよいと上げて辺りを見回した。まばゆい明かりに一瞬目が眩む。

ようやく目が慣れた頃には宿内は元の喧騒を取り戻していた。

顔を伝う水滴を手で拭ってから、オレはカウンターに居るこの宿の主人とおぼしき人物に向かって、

「.....登録と、それから部屋の空きはあるか？」

雨に濡れたままじゃ出てけ！って言われるかな——と、オレが警戒していたにもかかわらず、気のよさそうな宿の主人はこう言った。

「登録は後からでもいいから、先ずはその濡れた体を何とかしろ。でないと鎧が駄目になっちゃうし、濡れた衣服のままでは風邪を引いちゃうぞ」

と、言ってオレに部屋のキーを放ってよこした。それから、テーブルに座って談笑している冒険者達のお酌をやっている少女に声を掛けた。

「おおい！ この冒険者に何か着る物と、それからタオルを渡してやれ！ おそらく体が冷えてるだろうから風呂でも使わないと風邪引いちゃうからな」

宿の主人の罵声ともいえる声に、少女は億劫そうにこちらを振り向いて、ゆっくりとした足取りで戻ってくるとカウンターの中に入って裏手にある扉を開けた。

部屋に入っていった少女は、しばらくごそごそと中で何かを漁っていたかと思うとすぐにこちらに戻ってきてオレにひよいと数枚のタオルを投げてよこし、右手に持った服を差し出した。

「はい、これは着替えよ。それが乾くまで着ててちょうだい。後で洗うからその時に渡してね」

と、言うだけ言って少女はまたもとのテーブルの周りに戻り、冒険者達にお酌をしまわす。おそらくここの看板娘なのだろう。彼らの話に加わっては笑い声を上げている様子からしてここに居る者達とはかなり打ち解けあっているようだ。少しの間周りを見ていたオレに、主人が焦れたような声で、

「そんな所でぼさっと突っ立ってないで、さっさと部屋で風呂浴びてこい。...でないと風邪で寝込みかねないぞ」

と言われて我に返った。慌ててオレはカウンターに金貨を数枚放り投げて上の階に上り、渡された鍵の番号と部屋番号を照合して、ようやく今夜の宿に着くことができた。

部屋に入って一息つく前に体が悲鳴をあげた。どうやら濡れたままでいたせいか体中が芯まで冷え切っており、早いうちに暖めないと風邪を引いてしまうのは自明の理だった。まずは湯に浸らないといけないようだな。

オレは鎧を先に外し、タオルでそれを丁寧に拭いて、部屋にある木製の衣装掛けに肩当て(ショルダーガード)と衣服を引っ掛けた。

小手と胸当てはテーブルに重ねないように並べて置いて、ようやく冷えた体を湯になじませることができたのは、ここに来てからゆうに数十分は経過した頃だった。

心地よい湯の熱さが体に浸透するみたいに、体温を徐々に取り戻していく感覚は久しぶりだ。雪や寒さとは殆ど無縁の内陸部でこんな体験をするとは思ってもみなかったが。

.....ドルマンの温泉はこれよりかもっと熱かったな。

ふと頭に浮かんだ昔の事を、オレは慌てて打ち消した。

与えられた衣服は白色の上質の麻で織られた飾り気のないチュニックで、袖は肘から二つに裂けており、そこに一本の紐が互い違いに合わさってあるだけだった。裾はひざ上までで、腰に巻く蒼色のベルトには右側に剣の鞘を引っ掛けるもう一つのベルトが横から伸びている。先は輪のようになっていて、鞘を輪の中に入れて縛れば固定するようになっていた。

オレは剣を鞘ごとそれに収めて、着替えが一通り済むと一息ついた。

先程まで冷えていた体も、湯で充分暖めたので外気の温度も丁度いいと感じる位に体温も戻っている。

どうやら風邪を引くことだけは免れたようだな。

と、ようやく人心地ついたところで、安心したかのように腹の虫が催促するように鳴る。今まで体を温めることのみ集中していたので気がつかなかったのだが、昼に乾パンを少量口にしてから6時間以上は経過している。腹が空くのも無理はないか。

「登録しに行くついでに、何か食うとするか.....」

登録とは、利用する者が冒険者の宿に来て最初に行わなければならないことだ。登録されると、冒険者がギルドから宿に流れてくる依頼を引き受けることがそれによって可能となる。だから登録をしないと、依頼を引き受けることが出来ないのだ。

これによって、依頼者と冒険者のビジネス上の取引はギルドを通して行うことができる。依頼内容と実際のものとは違っていたり、賃金を騙し取ったりなどという場合にギルドが仲裁の場に立ち対処を講じるのだ。

そういう万一の場合も含めて、冒険者の宿には彼ら冒険者の登録がギルドから義務づけられている。登録した者は登録解除か、死亡しない限り、登録した宿のみで依頼を引き受けることができる。複数の宿に登録することは禁止されており、一人につき一つの宿で登録可能ということだ。また、死亡したり、行方不明で消息が分からなくなったりすると、宿の一つ必ずあるアルバムに、消えた、もしくは死んだ冒険者の名前と年齢、功労数や最後に受けた依頼等の情報が明記されるとか。

オレもその登録をしないと依頼を引き受けることができないからな。

思い立ってすぐにオレは部屋を出て階下に下りた。

1階に下りてから、先程は慌てていてよく見ることができなかった周辺をぐるりと見回すと、思ったよりもホールは広くて大きな丸いテーブルが数台まちまちに置かれてある。カウンターはホールの手前、入り口入って目前にあり、後ろ手には厨房が見える。その隣に先程服を出した部屋の扉があるわけだ。

カウンターのすぐ脇には掲示板があり、数枚、募集依頼の貼紙が画鋏で無造作に止められてあった。冒険者はこれを見て、自分にあつた依頼を見つけては仕事をするのだ。

「おお、体は温まったか？」

と、カウンターに半身を乗り出すようにして主人が声を出した。

オレはその答えに頷き、カウンターに近づいて、

「登録はできるのか？」

と言うと主人は待っていたかのように、宿帳をカウンターの上に出した。

「こいつに、名前と生年月日、主な職業.....てのは、自分がどの職種に該当しているかを書くんだ。魔法を主に使う奴なら魔法使いタイプ、とか、剣を使うようなら剣士系とか。.....傭兵って書かれても一概には言えないだろう？ それ

によって依頼する仕事も変わってくるしな。だから書いてもらうんだ。——それを記入してくれ」

と言って筆と一緒に宿帳を渡す。オレは筆を取り、宿帳に必要事項の記入を済ませて主人に返した。

主人はオレの名前を見て、ニヤリとあまりいい感じのしない笑みをこぼすと、

「ジュリアン……か、いい名じゃないか。——じゃ、登録したぞ。何か食うか？ パンとスープなら奢らせてもらうよ」

照れるようなこと言ってくれるじゃねえか。

「ああ……じゃ、酒をいただけないか？ あと何か腹にたまるものを」

気のいい主人はオレの返事に頷いてから、厨房へと消えていった。自然とカウンターに座ったオレに、先程の少女がグラスを自分の右脇に置いて、酒を注ぎ、酒の入った瓶は置いたままカウンターに入って主人の代わりを務めるのか、流しに乱雑に置かれてある汚れた食器を洗い始めた。

と、主人が厨房から戻ってきて、やや中くらいの深めの皿と、もう一つはひらべったい皿をオレの前に置いた。深めの皿には熱そうな湯気をたてているコンソメスープと、もう一方の皿には白身の魚を焼いたものと、肉料理とが一緒になって間にサラダが盛られてあるものだった。

「全部奢りだ、酒は払ってもらわにやいかんが飯の方はまだあるからどんどん食ってくれ。——依頼の貼紙にも目を通してとくんだな。ここのシステムは知ってるだろう？ ジュリアン」

いきなり呼ばれた。

「ああ、知ってる」

「なら、早いうちに決めておくんだな。ここには他にも常駐している冒険者が多いから、儲けものの依頼はすぐ消えてなくなるぞ」

と言って主人は、オレが向かって右側にある掲示板を指差した。

「気にいった依頼があったら俺に一言声かけてくれよ」

言いながら主人は、食器を洗っていた少女に代わって自分が洗い始めた。少女は疲れた様子で、厨房の隣にある部屋に入ってしまった。

「依頼ねえ……」

グラスに注がれた酒を舐めるように飲みながら、オレは自然と右に体を向けて掲示板をそれとはなしに見ていた。狭い掲示板に所狭しと貼られてある募集依頼の貼紙は、目を凝らしてみると重なって貼られてあるようだ。一番手前に貼られてあるのが最近の依頼だとすると、一番後ろにあるものは……？

「……なあ主人、なんで依頼書が重なって貼られてあるんだ？ 一番下にあるのはもう依頼達成したやつで、はがすのを忘れていたもんじゃないのか？」

オレの問いに、主人はやれやれと肩をすくめた。

「……いや、依頼書として出したが、結局誰も引き受けようとしないう依頼が溜まってそうになっちゃったのさ。そういうやつは大概が報酬が低かったり、身の危険が高い依頼とかが大半でな。誰だって低い賃金で命を賭けるなんてことはしないだろう？ そういうのが溜まるとああなるんだよ。……気にしないのにこしたことはない」

それでいいのかと疑問符が頭に沸いたが、とりあえずは気にしないことにした。主人の言うことも一理ある。

「……ところでジュリアン、お前さんはここに来ることは初めてか？」

いきなり主人がオレに話し掛けてきた。——まあ、カウンターに座っているのがオレだけというものもあるのだろうが。他の常駐している冒険者らは皆テーブルで談笑していて、オレと主人が離れ小島的存在だったからというものもあるだろう。

オレは話に乗ることにした。

「ああ。リューンに訪れるのは初めてだ。——この景気はどうだ？」

世間話のようだと思われるが、国の情勢や周辺諸国らとの関係を聞くのはこの国がどのような状態なのかを知るいい情報収集の仕方だ。そして、冒険者らが入り出す宿や酒場には最新の情報を入手しやすい。あちこち渡り歩く者が必ずと言っていいほど訪れる場所だからだ。それは時として思いがけない効果をもたらすこともある。

「ぼちぼちだよ。——全体的に見たら、な。ギルドからの支援と、ここ最近冒険者の登録数もうなぎ昇りだから、守られているわし達は食うに困ったりはせんが、その数に見合った依頼数は出ないもんだ。登録している冒険者も仕事にあぶれる奴が多くて、宿賃すら払えない状態の奴も居るらしい。幸いわしの宿は依頼数が比較的多く来てな。今のところ

宿賃が払えなくて仕事もない、なんて冒険者は出しとらん」

——成程。ここリユーン冒険者の宿の存在は、俺たち流れの傭兵や冒険者にとって評判が上がりすぎたんだな。だから人手が増えちまって……いつかは国の厄介者に成り下がる可能性も有り得るって訳か。

「周辺諸国からの依頼は受けたりしないのか？」

おやじはオレの問いに、しばし考えているのか額に手をあてて頭を振ったあと、

「……無い、って訳じゃないが、他国にはそれを引き受ける業者や軍隊が居るもんでな。システムが違う理由で滅多に周辺地域からの依頼はやってこないんだ。他国に高い賃金を払うなら自国の者に頼めば国によって違う税金等のややこしい問題はないし」

もつともだ。

オレは頷きつつ、グラスに入った酒をくい飲み干してから、隣に置いてあった酒瓶に手を伸ばしておかわりを注いだ。

「……カシナート国はそれに対して？」

「国はギルドには目をくれたりはしないさ。ギルドは国営じゃなくて公営だからな。国外の依頼を受けることにも関心はないようだが、……まあいい顔してるとは思えんわな。ま、ギルドや宿の評判は周辺諸国でも評判がいいからな。ギルドが潰れそうになったら援助はしてくれるだろうよ」

洗った皿を拭きつつ主人はのんびりと答えた。特に今の情勢に不満がある様子はなさそうだ。——しかし、カシナートという小国でひんぱんにギルドへの依頼がそうそうある筈ないから、そのうち登録を中止するのは目に見えているな。あちこちから評判が高い以上、そうなると国が動くしか手がないように思えるが……。

「それはそうと、ジュリアンはしばらくここに居座るんだろ？……そんなこと気にしてる暇があるなら貼紙を見て依頼を受けた方がましだと思うぞ。さっきも言ったように、いいもんはさっさと取られちゃうからな」

大体のところ、ギルドから流れてくる依頼は、1日～2日おきに貼紙として宿に出されると聞く。ほぼ毎日掲示板を見てれば更新されていくものなので、慌てる必要は特になかった。残りの路銀も多くはなくても、1週間はここに泊まれる程の余裕はある。躍起になって貼紙を漁らなくてもよかった。それよりも大事なことを聞いたかったから。

「明日、そうするよ。——ところで、この辺に伝説とかは多いのか？」

やや遠まわしに言ってみる。案の定主人はオレの言葉に不可解な表情を浮かべながら答えた。

「伝説？——たとえばどんな？」

オレは上目使いに、機嫌を伺うように主人に向かって、

「ヒュードルとか……」

そう。それなのだ。

ジェーンを置いてグリーフを離れた理由の一つが、オレはガルムを追うと決めたことだった。もちろん、あの時果たせなかった、父さんの復讐を。

吹雪くボウレット山の先、ドルマントの手前で戦ったきり、オレはガルムの姿を見ることはなかった。いや、オレが姿を見ることはできなくても奴がオレを高みの見物しているだろうとは予想していたが。

光の軍勢(シャイニング・フォース)としての義務が終わっても、その復讐だけは果たすことは出来なかった。諦めることなどできるものか！

……おそらく、それを言った時のオレの表情は真剣そのものだったからだろう、主人が驚いたように目を丸くさせて

、

「ヒュードル？……あの伝説のヒュードルかね？ スピリットが何だとか、箱舟がどうとかの、あれ？」

主人の問いにオレは素直に頷いた。

「ああ。ここいらでヒュードルを見たとか、そんな情報はないか？」

オレの問いかけを主人は頭が痛そうな仕草をしながら、やや疲れた顔をして、

「ジュリアン、本気で言ってるのか？——伝説が今頃湧き出てくる訳ないだろう？そんな話はいずれ聞いたことはないぞ」

……やはりな。18年前にオレの故郷、エンリッチでのヒュードル騒ぎがあったのが、他方の人々にはわかに信じられないと、当初受け入れなかったのと同じなのだろう。

伝説が今頃湧き出てくる訳ない。

主人の言葉は理に適う。だがオレは実際にヒュードルを目にし、刃を向けた相手だ。だからこそ追っているのだ。——分かってもらえる筈はなかった。

ここもまた、他の場所と同じって訳か……。

少し落胆してしまった。そんな様子を見てた主人が哀れむような声で、

「なんでヒュードルの事を知りたいんだ？ 伝説の伝承を巡ってでもいるのか？」

「いや、ちょっと訳ありでな……。つまらんこと聞いてしまったな、忘れてくれ」

と自ら話を打ち切って、すっかりぬるくなってしまったコンソメスープにようやく口をつけた。しばし話すのをやめて、オレは食事に専念する。

そんな様子を黙って見ていた主人が、思い出したように指を弾いてこう言った。

「そういや、1年位前に、そんな事件があったよなあ」

……1年前？ ——まさか……

「…それは、どこで？」

期待はずれだと思っけていても聞くのは、藁にもすがりたい思いがあったからだ。主人は嬉しそうにオレに向かって、「え〜っと、確か、東の——なんとか国、なんだったかな……………お！思い出した！ そうだそうだ、あれがあったから思い出した」

あれとは何だ？

「デストニア帝国だよ、デストニア！……あと隣国のアスピニア共和国でも発見されたそうじゃないか、ヒュードルとおぼしき奴が！」

……やっぱり……。

得意満面に言う主人をよそに、オレはがっくりと肩をおとした。期待はしていなかったが、やはり聞くもんじゃなかった。

「確かあの時、二国間にはもはや戦は避けられない状態だったはずだよなあ、そんな最中、東からやってきた冒険者らに聞いたんだが、何でもヒュードルの王を信仰する邪教集団が帝都を襲撃したって言うじゃないか。あの時は我が耳を疑ったね。ヒュードルを崇める奴等なんていたのかってな」

油紙に火がついたように、思い出しては口にする主人を他所にオレの心はここにあらず状態だった。

デストニア、アスピニア……。今日はどうもその国名に悩まされる。

そこに居るはずであろう、共に戦った2人のことも。

主人は嬉しそうに、オレの返事もそこそこで一人勝手に喋りまくっている。オレは無視して、とりあえず皿に盛ってある肉と魚を片付けようと、フォークを忙しく口に運んだ。

「聞いているのか、ジュリアン！」

主人がようやく一人喋ってるのに気付いたのか、オレに向かってやや声高に言った。口に入ったものを飲み込み、一息ついたところで、

「ああ……聞いてたよ」

本当はちっとも聞いてなかったけどな。

その場で、実際にそれを見たオレに、そんな話をしても無駄、と言うより無意味だったが、あえてそれは口にしなかった。

それよりも……。

「——なあ、さっき思い出す前に言っていた、あれって何だ？」

喋りすぎて喉が渴いたのか、主人は水を1杯呷った。オレの間に「ん？」と飲みながら声を返すと、飲み干してコップを置いた後に、

「ああ、あれか。依頼があったんだよ、デストニア帝国からの」

——え？

「依頼？ 何の？」

オレが不審そうに問い返すと、主人は掲示板を指差した。

「まだ貼ってあるだろう。——見てみたらどうだ？」

と言われて、オレは即座にカウンターを降りて掲示板を覗き込んだ。が、数枚の張り紙が同じ画鋏で留められてある

ので、一枚一枚めくっていくしかない。オレははやる気持ちを抑えながら少しずつ張り紙をめくっていく。

——はやる気持ち？なんでオレがはやまらなくっちゃいけないんだ？

頭に疑問符を浮かべながらもオレは張り紙をめくって、ようやく中盤よりやや後ろに貼り付けてあった紙を見つけた。と言っても貼紙の数もせいぜい15枚位しかなかったのだが。

肝心の内容を見てみる。「依頼募集」と丁寧な文字で書かれてあるその下に、大きく「式典時の王城の門番・城中の見回り、要人の護衛等」と書かれてあった。——式典？

オレはその貼紙を画鋏からはがすと、カウンターの席に戻り、主人にも見えるようにして聞いた。

「式典の護衛……って、何かお祭り事でもあるのか？」

主人はその言葉に首を横に振った。

「知らないのか？ 内陸部でも有名な式典なんだがなあ」

有名だと？

「帝国皇帝の誕生記念式典だよ、毎年皇帝の誕生日に行う、それはもう豪華で壮大な式典らしいな。遠く遠く離れた、中央よりやや東に外れたここカシナートでも、その噂は毎年囁かれるほどだ。この日ばかりは帝都は沸き返って盛大なお祭りになるって話だけ」

知らなかった。——あの時はそんな状態じゃなかったから無理もないか。

「そんなにすごいのか？」

「すごいなんてもんじゃないらしい。他国を凌ぐほどのもんだって、みんな口を揃えて言うくらいだぜ」

主人は身ぶり手振りでその凄さを表現しようとしていた。

……へえ、そんなことがねえ……ん？ てことは、父親の誕生日である王子も出席するってことか？

「……なあ、その式典では皇帝の王子も出席するんだろ？ その中にメディオン王子も含まれているのか？」

何とはなしに、口からメディオンの名前がこぼれ出た。——おかしい、今日のオレはどうかしている。

「メディオン？ 王子の名前までは知らんなあ」

主人は話の腰を折られたような怪訝な表情で言った。気を悪くしてしまったようだ。

「……成程、よく分かったよ、ありがとう……」

と言って、オレは話を打ち切ろうとして、例の貼紙をもとの掲示板に貼り戻すためカウンターを降りようとした時だった。

「その貼紙に興味があるのかい？」

と、テーブルの奥から声が聞こえた。——誰だ？声からして男のようではあるが……

オレが声の発した方向を向くと、テーブルの周りに座っている冒険者らの合間を縫って一人の男が近づいてきた。歳はオレよりは上のようで、体型からして冒険者、とは言い難い、むしろオレと同じ傭兵のような雰囲気を出していた。くつろいでいても鎧を脱がないところを見ると、案外用心深いのもかもしれない。

その鎧は、磨けば輝きを取り戻せそうな上質の板金を使用しているにもかかわらず、全体的にくすんでいて磨こうと努力している点は見られない。無精なのかどうかは分からないが、もったいないな、とオレは思った。

男が来る前に、貼紙を掲示板に貼られてある紙の一番手前に画鋏で留めると、再び声がした。

「いやー、その張り紙を見て引き受けてくれる奴がいつになったら現れるのか、正直不安だったんだよ。5日くらい前に貼り出して、今じゃ後ろの方に隠れちゃっただろう？ 更新されるのが早いと聞いたから出したんだけど、まさか相手にされないとは思ってもみなかったからな」

男は近づきながらオレに向かって喋った。近くで見ると、そんなに年がいつてる訳じゃないことが分かった。せいぜい20代後半と思える風貌だ。

が、別にオレはこれを引き受けるために貼紙を見た訳じゃない。

その旨を伝えないと、このままじゃ目の前にいきなり現れたこの男はオレに依頼を押し付けようとするだろう。——よくテーブルの奥に座っていたにもかかわらず、カウンターで話していた声が聞こえたもんだ。

「……いや、俺もただちよとした理由で主人から話を聞いたもんだから。——別に引き受けるために貼紙を取った訳じゃないんだ」

男はそんなオレの返事に狼狽する様子もなく、

「まあまあ……そのうち気が変わるってこともあるだろう？ 話だけでも聞いてみようかな、とか思わないか？ 悪い

話じゃないと思うぜ」

確かに、オレも貼紙を一瞥しただけだが、報酬等に異議を訴えるほどのことはなかった。が、やはりデストニアは遠い。ここで常駐している冒険者は東の果てなんかに行くよりは、カシナート国内の依頼を、たとえ報酬が多かろうが少なかろうが受けた方がましだと思うだろう。だから誰も相手にしなかったのも察しがつく。

無論オレとてわざわざ東から来た道をまた戻るなんて事はしたくなかった。

だから、

「折角だが、わざわざ遠い場所まで赴くようなことはしたくないんでね。——あんたはデストニアから来たのか？ わざわざこんな内陸部にまで赴いて傭兵雇うよりも他を当たった方がよかったんじゃないか？」

余計な事を質問していると自覚しつつ、オレは訊いた。

だが男はまるで気にしていないのか、やんわりとした語調で、

「ん？——俺はデストニアから来た訳じゃないぜ。仕事紹介の仲買みたいなことをやってるんだ。その一つがこれだったってことで、他国にもこの依頼の件は流れているさ、だからここで見つからなくても他国で見つかれば用は足りる。——だけどな」

そこで言葉を切って、男はオレに向かってにやりと笑うと、いきなりオレの両肩を掴んだ。

「俺も依頼者を見つけるという仕事を持っている以上、最低でも一人はつかまえてこなくちゃ俺も報酬が出ないんだよ。ここで依頼書を出しても、他の奴は見ることは見るが、引き受けようと主人に話を持ち出したのはあんた以外いなかったんだぜ。——まあ、飲みながら話でもしようや」

と、言ってやはり勝手に話を進められた。——まあいいか。デストニアの式典とやらも少し気になる。だがあくまで話を聞くだけだ。

主人はカウンター越しにオレと男の話を聞いていたようだった。男がオレの座っていた椅子の隣に腰を下ろすと、主人は親しげに話し掛けた。

「おお、フィート、奥に居たのか？ 全く気がつかなかったよ」

フィートと呼ばれた、オレにむりやり話をつけようとしている男は主人に酒を頼むと、陽気な声で、

「ああ。——主人が言ったのか？ デストニアの話題を？ いやあ、感謝するよ。もう日がなかったからな、今回ばかりは焦ったぜ。誰も依頼を引き受けようとしなないだもんな。……仕方ないか。デストニアはここから遠い」

そう言って、フィートは主人から渡されたグラスを傾けてくいと一気に中身を飲み干すと、半ばこの男の強引さに呆れているオレに、早く座れと手で招いた。

「そうだな。さっきジュリアンともそう言ってたところだ。——デストニアには1年前ヒュードルが出たってことで、依頼の件を思い出してな。教えてやったら興味があるのか貼紙を覗いたって訳だ」

一瞬、フィートのグラスを傾ける手が止んだ。——かと思うとすぐに普通の表情に戻り、オレに顔を向けて、

「ジュリアン、ていうのか？——へえ、ヒュードルの伝説でも探しているのかい？」

オレは無視した。余計な詮索はお互いしない方がいい。それは傭兵同士の鉄則——と、いうより暗黙の了解か？——だった。フィートとてそんなことは知っていて訊いているのだろう。

「……話を聞くだけだからな」

と、ぶっきらぼうにオレは言い放った。

オレの返事に黙ったままなのでちらと隣を見てみると、フィートは窺うような目つきでオレの顔を見ていた。——視線に気がついたのか、彼はすぐに元の陽気な声で、

「すまんすまん、じゃ、話すとするか」

と言った。——先程のオレを窺うような行為が気に掛かる。

とりあえずは気にしない事にした。話を聞いてオレはおさらばすればいいだけだ、と。

最初はそう思っていた。

外では、相変わらず止む事を知らない雨が屋根を打ってはかすかな音を立てていた——。

蒸気の発する音が、壁を隔てたこちら側にも地響きのように伝わってくる。壁越しでこんなことから、間近にいたら耳がどうにかなってしまうのではないのかとシンビオスは思った。

ここはストリッチの東地区、共和国管轄の自治区だ。通行ゲートという壁をくぐればサラバンド——グラビー総督が亡くなった今は、誰が総督になる訳でなく、サラバンド評議会が台頭して都市を管理しているので、今のところは以前と変わった点は見られない——の管理下におかれてある自治区に入れる。が、共和国民で入ることのできる通行証を与えられる者は数少ない。それは、大陸横断列車という文明の利器にあやかる程余裕のある人がいないから。何せ家一件買える値段の乗車賃だ、当たり前である。

その文明の利器といわれる列車に、メディオンは乗って帝国に向かうのだ。端から見たらなんと羨ましいと言われるかもしれないが、帝都デストニアに着くまで途中下車する駅は、帝国領土内に位置する、サラバンド所有都市レイルロードのみだから、この国の者は乗りたいと思わないだろう。だから列車を利用するものは、以前はもっぱら帝国貴族かサラバンドの裕福な商人等が目立ったが、グラビー亡き今はサラバンドの商人はおろか、帝国貴族すら滅多に見かけない有り様で、壁の向こう側にある駅近くの宿は商売あがったりだとか。

それでも、大陸横断列車は交易の為に作られたようなものだから、本数は減らすことなく走りつづけている。だが、やはり荷物を運ぶのと、人を運ぶ値段の差は激しい。

だから、メディオンが乗ることは向こうにとっては有難いのもかもしれないな、などとシンビオスは思ったりした。

だが、正直言って、メディオンが帝国に行くことには素直に祝福できない。招待状が来た時点でおかしいと思うはずなのに、何故メディオンが行くことを決意したのか……。シンビオスには当初、理解できなかった。

でも。——おそらく、自分も、もしメディオンの立場だったら行くと云ったに違いない。そう思えば彼を止めることは無理に等しいだろう。

自分ができるのは、無事に帰ってきてくださいと、言うことだけ——。

そう思って、彼は昨日ダンタレスと王都入りし、メディオンと共に終日過ごしたのだ。

そして、今日。王都正門で、ベネトレイム代表国王やメリンダ夫人、イザベラ王女に簡素な別れを告げて、メディオンがストリッチに一人向かおうとした時。「ストリッチまで同行しますよ」とシンビオスの申し出に、メディオンは顔をほころばせ、喜んで受け入れてくれた。

2時間かけて王都からストリッチまで歩き、ようやく着いた時は、あと10分ばかりで列車が発車してしまう時間に近かった。これを逃すと午後に出る列車しかない。大陸横断列車は一日2便（午前と午後の二本）で、10時間かけて帝都に着くため、乗り過ごして次の便に乗れば一日ズレて到着することになる。式典は明日の昼前からだから、この列車を逃す訳にはいかない。

メディオンとシンビオスは、共和国側通行ゲート付近で立ち止まり、3分くらい、どちらとも別れを切り出すことができずに互い顔を向け合って黙っていた。

刻々と時間だけが過ぎていく中、やがてメディオンは焦れた様子もなく、やんわりとシンビオスに向かって、

「.....それじゃあ、行ってきますね」

ぼつりとそう言った。シンビオスは彼の声に、はっとした顔をするとすぐに表情を戻し、

「はい、——気をつけて」

やや元気がないシンビオスの返事に、メディオンは溜め息をついてから諭すように、ゆっくりとした口調で、「そんなに落ち込まないで下さいよ、シンビオス。たった一週間程度アスピアを留守にするだけです。また、すぐに戻ってきますよ」

——言っている自分も分からない今後の状況を、なんで“すぐ戻ってきます”などと簡単に言えるのだろうか？

シンビオスは彼の返事を率直に受け止めた様子は見られなかったが、それでも旅立つ者に悲しい顔を向けてはいられないと思ったのだろう、から元気を出すように声を張り上げて、

「はい。——必ず戻ってきてくださいね。約束ですよ」

と言って、ここまでの道中手から離すことなかったメディオンの荷物を差し出すように渡す。彼の表情は、無理に笑顔を作っていることが明らかで.....。それを見たメディオンは、自分の中に込み上げてくる感情に戸惑いつつも、必死で抑えようとしていた。

汽笛の音が高らかになる。どうやら出発の時間が近づいてきたようだ。

メディオンは今まで手に持っていた帽子を頭に乗っけるようにかぶせてから、シンビオスから荷物を受け取った。こちらも作ったような笑顔を向け、「それでは、シンビオス、気をつけて王都に戻ってくださいね」

と言い残して、通行ゲートの扉に向かい、切符をそばに居る駅員に見せた。駅員はメディオンに一礼してから、扉の鍵を懐から出して鍵穴に差し。

あまり開ける機会がないはずなのに、木製の扉はきしむ音を出して、向こう側へ通じるただ一つのゲートの入り口を開けた。ゲートなんて大層な物だ、と思われるだろうが、外観は小さな小屋程度の広さの家が壁に真っ二つにされたような形で建っているおそまつなものだ。

去っていくメディオンを眩しそうに目を細めて見つめていたシンビオスだったが、突然思い出したことに、慌てて彼を呼び止めようと彼に向かって大声で、

「そういえばメディオン、キャンベル殿はどうしたのです？ ストリッチで落ち合うと言ってましたが、姿が見えませんか？」

先程、ストリッチに向かう道中にキャンベルの姿が見えないことに気がついたシンビオスは、その旨をメディオンに訊くと、「彼とはストリッチで落ち合うことにしているんです」とのこと。

だがしかし、ストリッチに着いてもキャンベルの姿は見かけることはなく、

もしやキャンベル殿が遅れているのでは、と、思い出したシンビオスはメディオンに向かって慌てて言ったのだ。

そんなメディオンは、丁度ゲートに入ろうとしていた所だったが、シンビオスの声に振り向くと、やや冷めたような口調で、

「キャンベルは先に駅構内で待っている筈ですから、大丈夫ですよ、シンビオス、ありがとう。——それでは」

そう言って、ゲートの向こう側へと消えていった。

シンビオスは、駅員がゲートを閉めてしまっても、扉の前でじっと待っていた。やがて、汽笛の音がさっきより甲高く鳴り響き、列車がレールを滑るような金属の触れ合う音が後から響いてきた。そうしていつの間にか、彼は遠ざかっていく汽笛の音と列車の走り去る音に聞き入っていた。

やがて完全に聞こえなくなると、シンビオスは溜め息を一つついてから、壁の頂点を見上げるように顔を上げた。

「.....どうかメディオンが無事に帰ってきますように」

と独り言を呟いてから——らしくないな、と思い、見上げていた顔を戻して壁から離れ、町の入り口へと足を向けた、——その時だった。

ストリッチの門の向こう側からやけに砂埃が立ってきている。どうやら誰かがこちらに走ってくるようだな、とぼんやり思っていたシンビオスだが、砂埃が途絶えた一瞬、その走っている人物を見て目を疑った。

それは必死に走ってきているケンタウロスのようなようだった。一人じゃなくて二人。そのうち手前に走ってきているのはなんとメディオンと同行しているはずのキャンベルだったのである。

シンビオスが驚くのも無理はない。汽車は出てしまった後だったのだから。

キャンベルと、その後ろに走っているもう一人——おそらくダンタレスだろう——は、殆ど滑り込むようにしてストリッチの門をくぐっても突進を止めず、こちら、通行ゲートに向かって走ってくる。おそらく人にぶつかったりしないよう注意して走ってはいるだろうが、ストリッチの民はそんなことが分かる筈なく、二人から避けるように逃げている。

シンビオスはというと、通行ゲートの扉の前から動こう、と考えることも忘れたように茫然と立ちつくしている。その姿に気付いた二人はゲートの手前で速度を落とす。そして、シンビオスの一歩手前で二人は足を止めた。

「シンビオス様！」

「メディオン王子は汽車に乗っていかれたのか？」

と、ダンタレスとキャンベルが同時に口を開いた。目を丸くして驚いているシンビオスを他所に、キャンベルは独り言のように言い始めた。

「メディオン様がベネトレイム様やメリンダ様としばしの別れを言いに言ってくると、今日の朝部屋に行った時におっしゃったのだ。そこで別れなければ.....！ 裏の裏をかかれるなど、全くもって情けない」

彼はぽつりとそう言うと、ふと我に返ったように表情を変えてシンビオスに詰め寄った。

「それで？ メディオン様は、もう汽車に乗って行かれてしまわれたのか？」

やや気圧されていたシンビオスは、何がなんだかわからない、といった様子で、

「メディオン殿なら、予定通り午前便の列車で行きましたけど……どうしてキャンベル殿がここに？ メディオン殿はキャンベル殿は駅構内で待っている筈だと……？ まさか、行き違いですか？」

シンビオスの返答を、キャンベルは最後まで聞いていなかった。

彼は話し途中のシンビオスに敬礼をしてから、通行ゲートの前に立っている駅員に帝都行き切符を見せ、ゲートを開けてもらった。そんな彼を黙って見ていたダンタレスが、

「キャンベル！ ……汽車は午後まで出ないのだぞ？ 今向こう側に入っても意味がないではないか？ 一体どうするのだ？」

と言う彼の言葉に反応して、キャンベルがこちら振り向いた。ふっきれたような表情で彼は、

「……言っただろう、メディオン様は私が守る、と」

そう言い残して彼はゲートの中へと消えていった。

追いかけても、汽車が出てしまった今メディオンに追いつく事など出来ないと分かっているはずだ。キャンベルを止める事くらいシンビオスとダンタレスにはできた。——しかし、できなかった。

二人はゲートの扉を見つめたまま、身じろぎもせずに立っていた。

シンビオスは、未だに訳の分からない今の状況の諸事情を聞こうかと何度か口を開いたが、雰囲気それがそれを邪魔して、話すタイミングがうまく掴めない。結局彼は聞くことを諦め、ゲートの方へと目を向けた。

ゲートの扉から離れようとしなかったのは、もしかしたらキャンベルが戻ってくるのではないかと案じたからだった。

しかし、キャンベルが扉から再び現れるよりも先に、いきなり壁向こうから甲高い汽笛の音が二人の鼓膜を襲った。

「……え？ だって、汽車はさっき……」

独り言のように呟く、シンビオスの隣にダンタレスは立って耳をすます。壁向こうで鳴っている汽笛の音はさらに響き、間もなく出発する事を暗に示しているようだ。

しかし、次の汽車の発車時刻は今からまだ数時間後だ。大陸横断列車は蒸気機関という、高度な技術を終結させてできた物であるから、列車の数も今メディオンを乗せて走っている汽車と、次にここから出る汽車の二台しか生産されておらず、それ以外に汽車はない。次にストリッチを出る列車は、おそらくもうここに停留していて点検準備等にかかっているだろうが、出発時間はまだ先だ。その汽車から、汽笛が今から鳴るなんて通常では考えられないはずなのだが——

と、考えを巡らせていたダンタレスは、ふと、先程キャンベルがぼつりと言った言葉を思い出した。……そして、ほのかに口先を歪ませて笑みを浮かべ、

「——『メディオン様は私が守る』か、なるほどな」

独白するように彼はぼつりとそう言うと、壁向こうで必死になって駅員を説得しようとしているキャンベルの姿を思い浮かべた。——誰にも、彼を止める事などできないだろうな、と。

彼なら、きっとメディオン殿を守ることができるだろう。なんせ汽車まで(……)動かしてしまう(……)のだから、たいしたもんだ——

などと、キャンベルの真意が判って一人にやにやしているダンタレスを、横目で見ていたシンビオスは自分ひとりが蚊帳の外に居るみたいで面白くない。ぐるりと体ごとダンタレスに向けると、詰まっていたものが出てくるくらいの勢いで、

「ダンタレス、一体何が、どうなったっていうんだ？ なんでキャンベル殿は——、い、いや、それよりも、メディオン王子はキャンベル殿がここに到着していないと知っていながら一人帝国に向かったのかい？ 説明してくださいよ」

やや顔を紅潮させて、嘸み付くような剣幕でまくしたてたシンビオスを、ダンタレスは困ったような表情を浮かべて、一体何処から話すべきかと頭を悩ませ始めていた。

彼ら二人の背後から、遅らばせながらも、キャンベルだけを乗せた大陸横断列車の汽笛が、それを彼方へと連れて行くかのように徐々に遠ざかっていった。

「自己紹介がまだだったな、当り障りのないことだけを述べさせてもらうぜ、それは鉄則だからな。——俺の名前は、さっき主人から聞いたと思うけど……フィートってんだ。依頼の仲買を勤めながらも本職は傭兵なんだぜ。あんたもそうだろう？ 流れの傭兵ってどこか？」

酒が入って饒舌になったのか、フィートと名乗った、無理やり依頼を頼もうとしているカウンター席の隣に座った男は、オレのグラスに酒を注ぎながら陽気な声でそう言った。——流れの傭兵にしては、身に付けている鎧の価値を考えると、もしかしたら身分を隠している貴族の類なのかもしれないが、冒険者や、傭兵は、同じ仕事仲間や相棒に対して、過去を詮索するのは禁じられているのだ。それは職業柄、なぜこれ——命を落とすかもしれない——傭兵や、冒険者に身を投じたか、理由は人それぞれあるものだ。……言いたくないこともあるだろう。それを聞くのは反則行為だと、傭兵や冒険者の間では暗黙の了解となっているのだ。

だからオレも、心の中でそう思っただけでも口に出したりはしない。

などと考えていると、

「さあ、俺が自己紹介したんだから、あんたもしてもらうぜ。ま、こうしておけば仕事上のトラブルがあった時の“保険”になるしな」

もっともだ。オレは話そうと、フィートに顔を向けた。待ち構えているように彼はオレをじっと見ている。

「俺は、同じくさっき主人から聞いたと思うが——ジュリアンだ。今のところは何処にも雇われていない、あんたが言った流れの傭兵そのままだ。ここに来たのは一時、仕事を見つけるためであって……」

と、言い終わるよりも先に、フィートが口を挟んだ。

「おお、仕事を探してここに登録しに来たんだらう？ なら俺の話は格別いいと思うぜ。遠いのは確かにそうだが、その分依頼料が多いから損する話じゃないんだぜ？ 引き受けてくれないか？」

しつこい。……まあ、この位強引でなきゃ依頼の仲買なんて出来やしないだろうが。

「言っただらう、話を聞くだけだからなって。——それから考えさせてもらう。今はまだ軽はずみなことで返事を返したくはない」

「それは依頼を引き受ける気になってるってことかい？」

「違う」

投げやりな答えを返し、オレはグラスに口をつけた。——あんな貼り紙見るんじゃなかったぜ。

「まあいいさ。話だけでも聞いてくれるだけでこっちはありがたいしな。……ところで、主人の話によれば、あんた、デストニアにえらく執着しているみたいだな。どうしてだ？」

何をにやにやしているのか分からないが、フィートはそう言って、自分のグラスに入っている酒を舐めるようにして飲んでいった。

「執着している訳じゃないぜ。——たまたまオレが、ヒュードルの話をしていたら、話題に出てきただけだ」

「へえ——、俺はてっきり、デストニアに以前居たんで、その後どうなっているのかと聞いているのだから、とってたんだがな」

「大陸中を回っているから、どこの国に雇われてただなんて覚えちゃいないよ」

フィートの視線から逃げるように、オレは辺りに目を走らせて答えた。主人はオレとフィートが話し出した途端、厨房の奥へ引っ込んでしまって今は姿が見えない。テーブルが置かれてあるホールにはまだ冒険者たちが飲んでいて、話し声は絶えることなく続いているようで、時折話の合間に出る笑い声が、ホール中を陽気な雰囲気へと満たしていく。

フィートはオレの返事に納得した様子は見られなかったが、とにかく彼の話を聞いて別れたらそれで充分だった。オレは依頼を引き受けようなど考えもしなかったから。

「……それよりも、依頼の話だけでも聞くからさっさと話してくれないか？」

自分から催促するように言うのはまずいんじゃないかな——、と、口に出してから思ったが、言ってしまったことを後悔しても仕方ない。

しかし、フィートは依頼の件を話すことよりも、オレが主人と話していたことに興味を引いたらしい。オレの言うことなど耳も貸さない様子で、

「……じゃあなんで、式典と聞いて依頼の話をも主人に聞いたんだ？ 聞いて即座に席を立てて掲示板に向かったんだろ？」

興味があるってことだよな？」

あながち嘘とは言えない。少しの好奇心もなしに貼り紙を見に席を立つ事を興味が無い、と言っても信じてくれないだろう。

すっかりフィートのペースに乗っていると分かりつつ、オレは渋々答えた。

「.....ない、とは言いきれないが.....」

「そうだろう？——ここの連中はジュリアンのように俺の依頼に飛びついたりはしなかったからなあ。遠いって理由だけで。——だからあんたがこれに目を引いた理由も、そう.....デストニアに以前居たんじゃないのか、って思っちゃったのさ」

フィートはオレの行動を最初から見ていたのだろうか？

「さっきから俺の行動を全て見ているような口ぶりだが.....主人とのやりとりを、一部始終見ていたのか？」

オレの質問に臆することなく、フィートはのんびりとした口調で、

「まあな。俺だけじゃなく、ここに居る全員あんたを少なからずとも観察してたと思うけど」

——成程な。新入りがどんな人物なのか見定めてたってところか。

などと考えているオレを、納得したように見えたのか、フィートは満足そうに頷いて主人に奢ってもらった白身の魚を、指でつまんで口に入れながら、

「まあ、そんなとこだ。.....俺がジュリアンを見ていたのもその理由。まさか俺の依頼の貼り紙を見してくれるなんて思ってもみなかったけどな」

「ああ.....で、依頼内容をいい加減話してくれないか？」

今のうちに軌道を修正しようと、やや話の腰を折るようにオレは再び催促した。もしかしたらフィートは、オレが依頼を引き受けたいと思わせるようにこんな雑談ばかり話しているのかもしれない、などという疑問が頭をよぎる。

しかし、そんな疑問はすぐに打ち払われるように、フィートはオレの言ったことにうんうんと頷き、「ああ」と返事をする、空になったグラスに再び酒を注いでから、にこやかな笑顔をオレに向けて、口を開いた。

ようやく話が聞けるのかと思ったが——、彼の口から出た言葉は、全く予期していないことだった。

「.....主人と、この件について話をしていた時、デストニアの元第三王子の名を呼んでいなかったか？」

——ぎくりとした。この男は、なぜテーブルの奥で一人酒を飲んでいただけにもかかわらず、オレと主人が交わしていた言葉が聞けたんだ？

オレの表情が一瞬にしてこわばったのを見たせいでか、フィートは驚いたように目を丸くさせて、

「ああ、すまん、.....ほら、さっき俺がジュリアンを観察してたって言っただろう？ それでつい、あいつらの話が少し途切れた時に、偶然耳に入っちゃったんだよ。盗み聞きしたような言い方して悪かった」

と言って頭を下げた。——信用できない。かといって聞かれても別に何の支障も無いはず.....だ。ただ、風の噂で、シンビオスの居るアスピニアに亡命した、第三王子も式典に参加するのかが聞きたかった、とでも言えばそれで済むはずだった。——なのに、気分は晴れない。フィートが本当に談笑が切れた合間にオレの話聞いてしまったというのにもわかに信じがたい。そして、この男が、さっきから上手い手でオレを詮索しようとしているのも、疑いを更に増す要因だった。

この男には近づかない方がいい——そう、オレの心は警戒音を立てていた。

オレは努めて顔に出さないように、平静を装いながら、

「.....風の噂で、亡命した第三王子もその式典に参加するかどうかを知りたかっただけだ。——依頼を話す気はどうやらないみたいだな。さっきから俺のことを詮索するようなことを聞いてばかりだし。.....失礼するぜ。これ以上つきあってらんないんでね」

そう言ってからオレは席から立ち上がり、カウンターの向こうに酒代の金貨を数枚置いてから立ち去ろうとした。がしかし、金を置こうとした時点で慌てた様子でフィートも立ち上がり、オレを通さんとでもするように立ちはだかった。上背はオレよりもフィートの方が上なので、やや威圧感を感じなくもない。

「そう言うなよ、ジュリアン。俺は別にお前さんを詮索していた訳じゃないんだよ、ただ、デストニアの噂で.....な、もしかしたらって思って質問を繰り返してたんだ。すまん」

デストニアの.....噂？

オレはその言葉に引っ掛かりを感じたが、聞かぬほうがいと直感が訴えている。何故かは分からないが.....。

「聞きたくないのか？ デストニアの噂って奴がなんなのか」

オレの心を見透かしたように、フィートは口先を歪めてにやりと笑うとそう言った。ややもすれば周りに居る冒険者たちの談笑に消え入りそうな、小さな声で。おそらくオレだけに聞こえるようにして言ったのだろうが、たかだか噂に、他人に知られないように小声で話すのもおかしい。

それに、聞いた所で何になるってんだ？

「……いや、いい。遠慮しとくよ」

と、片手を振ってオレは部屋に戻ろうと、彼の体をすり抜けようとした時、フィートはわざとオレの気を引こうとしたのか、窺うような目つきで、

「流れの傭兵が、ここから遠い国の王子の名など知っているなんて、おかしいよなあ？……メディオン王子、そう呼んでいたよな？」

「それが噂と何の関係があるんだ！」

つい怒鳴ってしまった。奥歯に物が挟まったような言い方をする人間はオレは嫌いだ。言いたいことがあるのならはっきり言え、といつも思ってしまう。——フィートもそうだ。こいつは何か隠している。いい加減にしてくれ。オレがあんたの話を聞く理由がどこにあるんだ？

辺りは一瞬、オレの怒鳴った声に反応して静かになった。——が、すぐに元の喧騒を取り戻す。

少しの間後、フィートの顔を窺うように見ると、腹を決めたような真剣そのものの表情で、やはりオレだけに聞こえるように、

「あるんだよ。——噂とは一年前、お前が主人に聞いていたヒュードルの事だ。国を巻き込んだその一連の事件を打ち払った方は3人いて……アスピニア共和国のシンビオス、元帝国第三王子メディオン様、そして流れの傭兵——名をジュリアン。そう聞き及んでいる」

……再び少しの間。

フィートの視線がオレに注がれているのを痛いほど感じる。

オレがどうでるか、反応を見ているんだろうが、そんなことまで気を配っている余裕はなかった。……何故彼は一年前の事件を知っているんだ？

冷や汗が頬を伝った。——顔には出すなと思っていても無理に等しい。

黙ったままのオレに、フィートはなおも食い下がろうとせず、

「……光の使徒、そう呼ばれた彼らは、ヒュードルの王、ブルザムを倒すと、共和国に亡命を希望したメディオン王子とシンビオスは、そのまま南へ——アスピニアへ戻っていった。が、もう一人は、北の大地に留まり、そのまま旅立っていったと言われている。……それはジュリアン、あんたなんじゃないのか？

光の軍勢(シャイニング・フォース)を指揮したのは、お前さんじゃないのか？」

彼の声がじんわりと響くように聞こえる。周りの声は一切耳に入ってこなかった。ただ、フィートの口から出てくる真実からオレは逃げようと、耳を塞ぎたい衝動だけに駆られていた。

——何故だろう？ どうしてオレはこうまでして、あの事件との関わりを断ち切ろうとしているのだろうか？

……いや違う。何故彼がここまで事の真相を知っているか、でだ。こんな内陸部の小国でこれ程知っている奴なんて居る訳が無い。居るとしたら、それは——ここに流れ着いたデストニアかアスピニアの者か、あるいはブルザムの残党……？

「……何の事だか分からねえな」

などとオレははぐらかして、仕方ないといった様子を見せながらも一度椅子に座った。しかし、フィートは立ったまま、真剣な目つきでオレを見据えて、

「はぐらかしても無駄だぞ、ジュリアン。——俺はお前を以前にも一度、目にしているんだぜ」

まさか。——オレは覚えてないぞ？

「覚えていないだろうが、バーランドで、……メディオン王子と一緒に居ただろう？」

その一言はオレを動揺させるに充分だった。——確かにオレは、バーランドの町の手前、西平原でメディオンと出会い、彼の軍に一時身を措くことにした。その後立ち寄った町がバーランドだったことも。

「……もしそうだったとしたらどうするんだ。オレを殺すのか？」

ぼそりと低めの声で言ったオレの返答に、フィートは驚いたような顔を見せた。が、すぐにふっと笑みを浮かべて、「違う違う、俺をブルザムの残党と思っているのか？ その推測は外れだよ、ジュリアン。——様とあとに付けたほうがいいのかな。一応世界を救った『勇者様』だし」

フィートの言った冗談に、ようやくオレは緊張の糸が切れた。つられて笑みを返すと、フィートも安心したらしく、椅子に座りなおして、

「やはりそうだったか、ヒュードルの王ブルザムを倒した伝説のジユメシンの一人に……こんな時に会うとは。何か運命として定められているような気がするな」

「……あんた、オレをバーランドでメディオンの軍に居た時に見たっていったよな？ デストニアの者か？」

「ああ、青竜海兵隊——レリアンス將軍直属の部隊の一人だ。バーランドでは町の警護をあたっていたときにあんたを見かけているぜ。まあ、もっとも、ついさっきまで思い出せなかったけどな。確信が持てるまでは」

懐かしい名前だ。あの時オレは、まだ滝から落ちたショックで町の景観なんぞ殆ど覚えていないが……？

ふと疑問が頭に浮かんだ。

「確信？ 俺のことを最初からそう思ってた訳じゃなかったのか？」

フィートはうんと頷いた。

「ジュリアン、て名前を聞いた時は驚いたがな。——それだけじゃ決め手にならんだろう？……まあ、メディオン様の名前を口にするジュリアンなんて人物は一人しかいないけどな」

と言って彼はにやりと不気味な笑みをオレに返した。——まったく、なんであいつの名前なんぞ口にしたんだ。後悔しても仕方ないけど。

「レリアンス將軍の部隊か。——どうりでメディオンにだけ特別扱いしているもんだ」

「特別扱いなんてしていたか？」

おどけて言うフィートを横目で見ながらオレは、すっかりぬるくなってしまった酒の残りをビンからグラスに移しつつ、

「ああ、オレやシンピオスには“様”をつけなかつただろう？」

フィートはオレの言うことに納得したのか、軽く頭を頷かせると、

「ああ、本当だ」

と言って、屈託ない笑顔で笑った。つられてこっちも笑ってしまう。

「なんなら、ジュリアンにも様をつけたっていいんだぜ？ ジュリアン様、いつぞやは帝都をブルザムの魔手から救っていただき有難うございました、てな」

「よしてくれよ」

帝都を守ったのはオレ達だ、という理由を知っているのはごく限られた者だけだ。それは、ワルキューレが去った後、狡猾なスティール將軍に上手く丸めこまれたデストニア帝国第一王位継承権所有者マジェスティが、オレ達の功労を賞賛するどころか、こともあろうに帝国から追い出したためだ。それ故、帝都を守ったのはマジェスティだというデマが帝国内を駆け巡ったらしいが、おそらく……帝国内約8割の人間はそれは嘘だと思っただろう。何故なら、書や花を愛でる第一王子が、戦いをもってして帝都を守るような行為に及ぶはずがないからだ。

あの場に居なかった、フィートの居る軍も真相を知らないはずだろうが、おそらくオレの軍に居た、レリアンス將軍配下のオネスティが口添えして言ってくれたのだろう。

——しかし、なんでこんな大陸中央にデストニアの人間——しかも軍の人間だ——が居るんだろう？

何かの偵察でこっちに来ているのだろうか？

「そういや、なんであんたは、こんな大陸中央の辺境まで来ているんだ？ 何かの偵察か？」

と当然の疑問を口にする。すると、さっきまでゆるんでいたフィートの表情がさっと変わった。——何か隠している

。まあ、しかし、オレには関係のないことだろうな、と思っていたら、

「ジュリアン……」

重たい声でオレを呼んだ。

「何だ？」

和んだ空気が一瞬にして冷たい雰囲気へと変わっていく。聞かない方がよかったのかもしれない。

しかしフィートは、オレの座っている方へ体を向け、思いつめた顔をして、言った。

「.....ここで出会ったのは、まだ神は救いの手を離していないってことだな」

無神論者のオレにそんなことを言われても困る。

と、やや疲れた顔を見せたオレを、フィートはいきなりじっと見つめてきて、周りに聞こえないよう小声で、
「助けて欲しいのだ。——ここで出会ったのも、もしかしたら運命なのかもしれないとさっき言ったよな。.....おそろくそうなのだろう。ジュリアンにしか出来ない。頼む、メディオオン王子を助けてくれ。彼が式典の時に暗殺されてしま
うかもしれないのだ」

——何だって!?

「——雨が好きなんですよ、私は」

——夜。軍の進行を妨げる役にしかない滝のような雨を、本陣の明かり取りの窓から見上げながら、彼はぼつりとオレに言った。

雨足が激しいため、今日は進軍をあきらめよう、ととあるさびれた村で休息をとることになったのだが、帝国第三正規軍——メディオン軍、と俗に呼ばれた——の全員が、村の宿に全員収容できるわけがない。仕方なく村の隅に置かれてあった本陣を利用して夜露をしのぐよりほかなかった。

とはいえ、今はオレと、彼——メディオン、だ——以外に、本陣の中は誰もおらず、皆出払っていて姿は見えない。彼に始終着いている者達も、食糧調達の為に、王子をオレに任せて出て行っちゃった。

任せられたとはいえ、オレはメディオンとは一対一で口を利いたこともなかったから、二人一緒に居てもお互い何を話すことなく、皆が戻ってくるのをオレは退屈しながら待っていた。その時だ。

独り言のようにぼつりとそう言ったメディオンに、思わずオレは彼の方へ振り向いて——オレに話しかけてきたのか、と訝しんだ。

オレはあんたに話すことなど何もないよ、と思っていたのが顔に出ただろう、それを見たメディオンは嫌な顔一つせず、しかも自分の方に振り向いてぎこちない表情を浮かべているオレを見て嬉しそうに、

「やっと、私の方を向いてくれましたね、ジュリアン」

と、水色の、澄んだ瞳をオレに向けて言った。

どういう意味だ、と疑問を口にするよりも先に、

「ここに来てまだ間もない、ジュリアンと話をしたかったのですよ」

歩きながら彼はそう言って、徐々にオレとの距離を狭めていった。オレは殆どメディオンの居る側の反対の壁に凭れていたから、彼がオレの手の届く場所に来るまで一分近くを要した。

.....話したかった、ね。

王子なんていう種族はもっぱら、縁の下の存在に等しいオレ達平民を疎ましく思うのが常だと思っていたが、目の前に居る王子は何でも平民出の王妃から生まれただけあって、その点が少し違っているのは分かっていた。

だからといって、話をしたい、なんて思った事は一度もない。ただ雇い主と、雇われた者という関係だけで充分だった。お互いそれでいいだろうと勝手な解釈をしていたのかもしれないが。

——それなのに、メディオンはこともあろうにオレと話をしたいと言ってきた。まったく困った王子様だ。

やれやれと、オレは肩をすくめる。.....そして、

「雨が好きだ、ってさっき言ったよな」

「ええ」

ようやくオレが口を開いたことを嬉しいのか、彼はにこにこ顔に笑みを浮かべてオレの問いに答えた。

「.....鬱陶しくてオレは嫌いだな、じめじめしてるし、憂鬱な気分にするし.....」

それに、雨の日は——あの日を思い出すからな。

父さんが何故消えたのか、その真相を義父アランに聞かされた.....やはりこのような、大粒の雨が降る夜を。

メディオンは、オレの返事に戸惑うことなく「そうですか」と答えただけだった。拍子抜けするほどあっさりと言うと、話が途切れてしまった。

またしてもぎこちない雰囲気がおレとメディオンの間に漂ってくるのかと思って、彼の顔をちらりと窺うと、彼は目を伏せて悲しげな表情を浮かべていた。そして、

「——雨は、何もかも流してしまうでしょう？ 自分の目から流れる涙も、雨にうたれていれば誰にも気付かれな...。よく、そうやってごまかしたものですよ。だから私は雨が好きなんです。虚飾に塗られた自分を唯一洗い流して、本心を見せてくれるから」

そう言って、オレに控えめな.....やや作ったような笑顔を向けた。それはまるで、あなたなら分かってくれると思っていたのに、と暗に示しているかのようなだった。

その時からだ。オレがメディオンを違った目で見えるようになったのは。

彼には心を許せる誰かが側にいなければ、朝日が出たら消えていく霧のように、そのうち何の前触れもなく消えてし

まうような——そんな儂げな存在に思えたのだ。

——こいつを導いてくれる誰かが必要だ、と。

けど.....それは、オレの役目じゃない。

「ジュリアン？」

ふと、昔の事を思い出していたオレを、フィートは現実に戻した。そしてオレを窺うような目つきで見つめ、

「.....信用していないのか？ 俺のことを」

とこれまた機嫌を窺うような言い方をした。——当たり前だろ。いきなり現れたデストニアの者だかなんだか分からないが、何でオレを必要とするんだ。オレじゃなくてもシンビオスの方がずっと近くにいるだろう？

と言いかけて口をつぐんだ。言い返すのも馬鹿馬鹿しい。

黙ったまま視線を返さないオレを見て、フィートは勝手に解釈をしたらしく、首を左右に振りながら溜め息をついた。

「そりゃまあ、いきなりこんな辺境で出会った奴がデストニアの者でしかもメディオン王子が暗殺される、なんて聞いても信用しないよな。俺だってお前さんの立場だったら信用しない。——けどな、信用してもらえなければ彼は——メディオン王子は、確かに殺されてしまうんだ。お前さんをお前さんとして、俺に何の得がある？」

フィートは真剣に、オレを説得したいようだった。そしていきなり、自ら着ていた鎧の肩あて(シオルダーガード)を、腰に差していた短剣でこすり始めた。やがてこすった部分に、ぼんやりと何かの紋章が刻まれているのが分かるようになる。凝らして見ると、どうやらデストニア帝国国旗の模様だと見てとれた。

「これが証拠だ。——俺はとある理由でこんな風に鎧をわざと汚してデストニアの紋章が見えないようにした。そして今は身分を隠して冒険者に成り下がっているのさ。理由は一つ。メディオン王子を殺す暗殺部隊から逃れている身だからな」

いきなり穏やかでないことをフィートは言ってきた。オレは驚いて思わずフィートの方へ顔を向いてしまう。

「.....なぜ追われている身なんだ」

喉の奥から搾り出すような声で、ようやく返事を返したオレを、フィートはにやりと口元に笑みを浮かべて見ている。話に乗ってきたオレをからかいたそうだった。思った通り、彼は声を弾ませながら、

「それを聞きたいってことは、俺の話に信用するってことだよな？」

と取り引きを持ちかけてくる。——信用してない訳ではない。ただ、どうしてそれがオレに回ってくるんだと嘆いていただけであって.....。

その時ふと思い出した。

今日一日、何故かメディオンの事ばかり思い出していたことを。

もしかしたら、あれは.....こうなることの前兆だったのか？

と一瞬、肯定しかけたが.....違う、とすぐに思いとどまった。

オレがそんなこと出来るわけがないだろう。そもそも、前兆なんて——ばからしい。そんなものは迷信から来る気の迷いだ。そうだ.....そうに決まっている。

半分自分を納得させるように心の中で言い聞かせてから、オレはフィートの方へと向き直って、

「.....分かった、分かったよ。信用する。だから全部知っている事を吐き出してくれ、出ないと助けるも助けられないも始まらないだろ」

彼とのやりとりに半分うんざりしていたオレは、結局自分が引くしかないのだと諦めて、仕方なさそうに話を促す。——内心はそうでもなかったのだが。

フィートは満足そうに頷くと、いきなり親指を後方へと向けて、

「テーブルも多少空きが出たから、向こうで話そうか。ここじゃ聞かれるとちよつとな.....」

ぼそりとそう言って、彼はグラスとボトルを手に取り、カウンターを立った。オレも同じように倣う。

ホールの隅に置かれてあるテーブルに彼は座った。辺りはさすがに宵の口も過ぎたせいかわ、来た時ほどの冒険者の数はもう見当たらない。皆部屋へと引き払ってしまったのだろう。残っている者はオレ達を含めて10人程度といったところか。

フィートは座るとボトルに残っている酒を自分のグラスとオレのグラスへ注いでいく。そして、少ない酒が入ったグ

ラスを手にして、

「厄介な話だろうと思っただろう。その通り、厄介な話だ。これを聞いた以上、ジュリアンには一つの選択しか残されない。その選択とは——帝都へ赴き、式典の最中に暗殺されるメディオン王子を救うこと、だ。それでも聞くのか？ 辞めておこなら今のうちだぞ」

自分からオレの正体をバラしたくせに、その言い草はないだろ——、などと思わず心の中で毒づく。だが——腹は決まっていた。

ここまでされて別れる、なんてのも後味が悪いし、オレ自身納得がいかない。そして何よりも、彼も正体を隠して逃げてきたのだ——オレと同じじゃねえか。

オレもフィートと同じようにグラスを手にしてから、

「ここまで聞かされて嫌だなんて言うもんかよ。後味が悪い」

と言ってグラスを傾けた。オレの返事にフィートは「そうか」と短く言って、同じようにグラスに入った酒を口に入れた。

「.....それと、あんたも一緒に行くんだぜ。オレ一人に任せるって訳じゃあないだろう？」

と念のために付け足しておいた。

するとフィートはいきなり、オレをまじまじと見てきて.....突然、大声で笑い始めた。あまりの大笑いに、オレは一瞬ぼかんとしてしまう。

「ははは.....まだ俺を疑っているってことかそれは？——安心しろ、俺もあんたという心強い見方が現れた以上、帝都に戻ってメディオン王子を救うつもりだ。.....まったく。俺ってのは信用できない奴に見えるのかい？」

「そういう訳じゃないが.....」思わず口ごもる。——疑いなくて言った訳ではないからな。

「まあいいさ。俺の依頼を引き受けてくれるって言ったしな。じゃ、早速仕事の話をしようじゃないか」

と周りにいる冒険者に急に思われないようにフィートは振舞った。オレも適当に相槌を打ちながら、辺りに神経を行き渡らせた。

フィートはそう言うと、懐から何か取り出した。どうやらそれは丸めてある紙のようだ。所々やぶれて、くたびれているところを見ると、見た目は古い巻物にも見えた。

「じゃあまず、何故俺が逃げる身となったのか、いきさつを話してやろう。でないと話の筋が通らんからな。——俺がレリアンス將軍の配下の部隊だって事はさっき言ったよな。プルザム神を巻き込んだあの戦いの後、俺たち帝国の軍隊は日々鍛錬と帝都の護衛、見回りを繰り返すのが日常となりつつあったんだ。平和だなんて言えるほどでもなかったが、戦争がないだけましだ

った。なにぶん、血を見るのが嫌いな性質(タチ)でね」

.....それでよく軍隊やっていけたな？

「そんなある日の事だ。——俺はいつものように帝都の見回りを終えて兵舎に戻るところだった.....」

フィートは兵舎に急いで戻ろうとしていた、普通のサービス時間はもうかなり過ぎていて、辺りはすでに闇に包まれ始めていた。

見回りを交代するはずの兵士が何をやっていたのか遅れて来てしまったため、彼は普段よりも長く仕事をしていたせいで体中が悲鳴をあげている。早く風呂にでも入って筋肉をほぐさないと、明日筋肉痛になってしまうかもしれない。そう思えば、自然と足は早くなった。

城の門をくぐり、兵舎が見えてきたところで、彼の足は突然止まらざるを得なくなる。

こんな時間に、普段なら明かりがつかはずがない、会議場の明かりが何故か灯されているのだ。それも、外の目を気にしているようなぼんやりとした明かりで。

会議場、と一口に言ってもせいぜい40坪程度の、王城から少し離れた場所にある一階建ての建物で、せいぜい100人程度しか入れない。中は小さなホールのように、壇上が一番低い位置にある。古い建物のため、今は会議をするのはここではなく、王城軍事院3階にある大会議室を使っていた。そのせいで今ここは使われていない筈だった。明かりがついていること自体おかしいのだ。

丁度交代の時間を過ぎたから、誰も王城を出入りする者の姿は自分以外見られない。まさかそれを見計らって、とも思えたが、自分には関係のないことだと思い、通り過ぎようとした。もしかしたら上層部の重要な会議かもしれないし、兵士の一人が誰かと逢い引きしあっているのかもしれない。邪魔しては失礼だ。……しかし、ちょっと様子を見るくらいならいいだろう。警備の為だとも言えばごまかせるだろうし。

元が楽観的な考えを持つ彼は、そう思い直して足音を忍ばせながら入り口へ近づいた。一瞥してから帰っても咎めまい。むしろ見回り熱心だと誉めてもらいたいくらいだ——そう心で思いながら、入り口の扉をわずかに開けた。

しかし、中には誰の姿も見えない。

もしかしたら壇上で話をしているのかと、フィートは開いた扉の隙間から、顔だけをひょいと突き出した。

思った通り。壇上に人の姿が見える。しかし、周りが暗いのと彼らの側で灯されてあるランプの光が、油が切れる寸前なのか弱すぎるため、残念ながら顔までは見てとる事はできなかった。しかし、人の姿はかろうじて見える。とはいえ彼らは何故か黒い服を纏っていて、部屋を取り巻く闇に殆ど同化していて、ランプの明かりがなければ判別はつかないだろう。

そんな姿の人間が数人と、それに混じって四つ足の人影も見える。どうやらケンタウロスまで居るようだな、てことはやはり軍議かなんかかな、と思ったフィートは今日の城内の予定と照らし合わせてみる。——しかし、今時分、使わない会議場を使用する予定があるとは書かれてはいなかったはずだ。

……まあいいか。極秘の会議なのかもしれない。これで退散しよう。

と思って突き出した顔を戻して扉をそっと閉めようとした時だった。

「計画にぬかりはないんだな？」

と、沈黙を守っていた会議場に突然声が響きわたる。もちろん、抑えたようなか細い声だったが、場所が場所なので響いてしまうのは仕方がない。だからフィートの耳にももちろん入ってくる。彼は一瞬ぎくりとして、扉を閉めようとしていた手を止めた。

「——手筈も、準備も、訓練も予定通りです。訓練では失敗もなく、ほぼ間違いなく成功するでしょう」

「ほぼ、というのは勘弁してほしいものだ。絶対と言えるほどになってもらわなければ困る。当日何が起こっても、必ず成功させるほど自信を持ってもらわなければな」

二人の男が何やら、なんかの計画を成功させるために話し合っているのだろうとは声で判断できた。……しかし、あんなに数人居る場所で二人の声しか聞こえないということは、他の者は計画実行部隊の部下なのかもしれない。フィートは兵舎に帰ることも忘れて、扉越しに聞き入っていた。

「あと数日も訓練すれば、彼らは絶対と言えるほどの腕前になっておりますよ。ぬかりはありませぬ」

チンとグラスを鳴らす音がして、しばしの間、声が途切れる。おそらく乾杯でもしているのだろうが……。

やがて、息を吐き出すような音がした後に、最初に聞いた男の音が、

「何せこの日にしかできないのだからな。——あの男が姿を現すのは」

「もっともでございます。——まったく、身の程知らずとはこの事ですな」

と、返事を返した男はそう言って笑い声をあげた。

「皇帝には残念なことですね。一応は自分の血を分けた御方ですし」

——？

「いや、これは皇帝にとっては必要な事なのだ。私にはあの男が皇帝の目の上のたんこぶのような存在としか思えん。——この国にとってもな」

「そうですね。共和国へのこの亡命した第三王子なんて、まあこの国にとっては厄介者——ですか？ まあ、消したところで誰も文句は言いませんでしょう。メディオン王子のおつきのキャンベル殿には残念ですが」

……何だって！

フィートは今聞いた事を否定したかった。

メディオン王子を消すだと？ ということは——暗殺しかないじゃないか。

道理で、こいつらが黒い服を身につけていたのは、闇で人知れず目的の者を殺す為……暗殺者だったからだ、と今頃納得してしまう。

そして実行するのは、話でいうとおそらく——皇帝の誕生記念式典の日だろう。その日に彼が招待されるのは招待客名簿で誰も知っていたからだ。そしてこいつらが話し合っていたのは——メディオン王子暗殺の計画会議といったとこ

ろだな。

阻止しなければ。この計画を何としてでも。俺はメディオン様率いる第三正規軍の兵士だ。自分の守る方がたとえ亡命したからといってみすみす見捨てる事などできない。

.....しかしどうやって？ レリアンス将軍に報告するか？

いや.....それは無理だ。あの方には相談できない。

というのも、レリアンス将軍は先の共和国との戦いで、帝国は僅差で勝利を掴む寸前だったのを、彼が皇帝の筆跡を真似た手紙を書いてしまい、結局そのせいで皇帝は共和国併合を断念せざるを得なくなった。その責任をおわれて、彼は今身動きが取れない状況になっているのだ。

.....なら、俺がやるしかない。他の者に迷惑がかかると厄介になるし、おおっぴらに出してしまう危険もある。そうなってしまうたら奴らの素性を突き止めるきっかけがなくなってしまう。

——なら、知れていない今のうちに、計画を盗み出すのが得策だ。そして式典当日まで逃げ切れればいい。そうすれば王子は助かる。あの御方を殺させてたまるものか。

「——そうして俺は、彼らが酒に酔いしれて寝ている隙を見計らって、計画書をごっそり盗み出した訳さ。.....で、これがそれ」

と言ってフィートは先程懐から取り出した、丸めてある紙を手にとってオレの方へ差し出した。彼からそれを受け取って、テーブルにほんの少し一部分を広げてみる。そこには当日、式典の流れが事細かに書かれてあった。時間まで書かれてあるところを見るとそれが重要な箇所なのかもしれない。

「.....そういや、計画を盗んだのはいいけど、奴らが他の手を考えるってことはないのか？ そうしたらこれを盗んでも意味はないだろ」

オレの問いを、フィートは無表情のまま聞いていた。答えを用意しているかのようだった。

「それはないよ。——やっこさんたちは俺を殺そうと今も追ってきているはずさ。もう式典まで日にちがないからな」

「ない.....って、どうしてだ？ 他の案を考える余裕はないのか？」

間髪入れずに問い返すオレを無視して、彼はのんびりと答えた。

「余裕も何も、彼らの持ちえていたデータを全て、俺が盗んじまったからさ。それがないと次の案も出すことはできない——だから今のところは、メディオン王子を殺す事はできないってことになる」

え?...じゃあなんだ、俺が行かなくても別にいいってことじゃあ.....？

と考えているオレの心を察したのか、フィートはにやりと笑って、

「それなら俺の出番はないじゃないか、って言いたそうだな。.....そんなことはないぞ。もし、この計画が未遂になったとしても、奴らは遅かれ早かれ別の手でメディオン王子を殺そうとするだろう。暗殺を企てている奴らの息の根を止めない限りは、な」

「じゃああんたは、どうしてこんなところまで来たんだ？ 逃げてきたからか？ メディオンを殺そうとしている奴らを見つけようともせず？」

「そうだ」

そう言うと、彼は遠くを見つめるような目つきで、独白するように、

「俺は計画書を盗んだ後、これをどうしようかと思悩んだ。——これを盗んだ以上、メディオン王子は殺されることはない、と思った。しかし、いずれここに居てはばれてしまう。それなら式典まで逃げ切ろうと思、俺は同僚に『式典時、メディオン王子を頼む』と任せ、事があつた夜半に俺は帝都を飛び出した。——もちろん、夜半に出るなんて不審だと、ある兵士が俺を止めたが、なんのことはない。そいつは暗殺計画に携わっていた奴らの一人だったのさ。.....懐にあるこいつを見たら目の色変えて襲ってきやがった、俺は一撃でそいつを殺して、帝都の門の裏手にそいつを隠して逃げた。——おそらく朝には気付かれただろうがな。盗んだ奴が逃げたと」

「留まってそいつらの尻尾を掴もうとは思わなかったのか？」

「俺は暗殺者に狙われるのを黙って待ってられるほど肝がすわってないからな、——逃げて事なきを得ようと思うよりなかった」

それはあるだろう。人というのは、目に見える恐怖に慣れることはできても、見えない恐怖に長く耐えることはできないようになっている。それ故にその存在を必死で明かそうとしたり、否定したりするもんだ。

「……それで？ どーして今になって依頼の貼り紙なんかを置いたりしたんだ？ 黙って待ってられないんだろう？ 逃げるのに疲れたのか？」

「ま、そんなところだな」

飄々とした言い方にオレはやや呆れてしまった。——こいつ、本当にメディオンを助けようと思ってるのか？

「囮だよ。デストニアの式典の依頼が何故こんな辺境に貼ってあるんだ、とおそらく俺を追ってきた奴らはそう思うだろう。そして貼り紙を貼った俺と接触をする。俺はその時に奴らからあれこれ素性とか聞いて、もし暗殺者の一味だと分かったら『ここじゃなんだから、場所を移して話そうじゃないか』とかうまいこと言って人影のない路地裏へと連れ込んで、その場で始末するつもりだった。こんな大陸中央部にほど近い場所まで追っかけてくるとは思っていないけど... ..奴らだって、計画が失敗に終わらないよう死に物狂いで俺を探しているはずだ。それを思うと、逃げてても無駄だと思っ

と、オレが不満を言い返すよりも先にフィートが口を開いた。

「……なるほど。ここのシステムを逆手に取ったわけか」

あまり感心しないやり口だな。と心の中で呟く。

もし万一奴らがあんたの顔を覚えていたらどうする？ あんたが兵舎からいなくなった事は奴らの耳にも届いているだろう。そうなればあんたの顔を知らない訳がない。ばれたら先に殺されてしまう可能性だってある。危険すぎるぜ。

「危険な賭けだとは分かってるさ。——けど、頭が足りないんでな、これしか思いつかなかった。……これ以上故郷から離れたくもねえし」

オレの心を見透かしたように彼は呟いた。——わずかの間のあと、

「だから、俺はお前さんのことも疑ったって訳だよ、ジュリアン。お前が、俺の貼り紙を掲示板からはがした時から目を光らせていた。こいつ、もしかしたらデストニアの奴じゃないかって。……そうだったら殺さないで、ってな。けど、名前を主人から聞いた時は焦ったぜ。まさかと思っていたけど、話していくうちに、徐々に思い出していったよ。世界を救った三人のうちの一人だよ」

……疑った、ね。ご苦労なこった。確かにあんたのやり口は尋常じゃなかったぜ。

「それで？」

「それでも何も無いよ。俺はお前さんに任せると決めたんだ。ジュリアンなら絶対メディオン様を救いに行ってくれると」

「勝手に決めつけるなよな。——大丈夫だよ、今さら逃げ出したりしないから安心してくれ」

と言い切ってオレはグラスに残った酒を呷った。

「逃げたりすんなよ、ジュリアン」

「俺が逃げるタマかよ」

意地になって言い返してやると、フィートは口を開けて笑った。そして、

「期待してるぜ。——それじゃあ、いよいよ肝心の計画内容について話をするぞ」

と言って彼は、テーブルにオレが一部分広げてあった紙を全部広げて見せた。数えてみると四、五枚ほどある。オレが見たのは一番手前にあった紙のようだ。長い紙が丸めてあるのかと思っていたが、実際は紙を数枚重ねてあっただけだった。と言っても一枚一枚はやや横長で、普通の紙とは違ったサイズだ。

「今さっきジュリアンが見たのは、当日の式典の流れが書いてあるだろう。そこに一つだけ、赤い丸が書かれてあるよな。——それが、奴らがメディオン様を暗殺する時の式典内容だ。一番初めに『開始の言葉』から始まって、その次の『代表者祝辞』——代表者ってのは第一王子マジェスティ様のことだ。いつも彼か、第二王子アロガント様が祝辞を述べることになっているのさ。ちなみに、メディオン様は一度も呼ばれた事はない。——話を戻すぞ、その次の『来賓祝辞』は来賓方の祝辞と、遠方からの祝いの手紙の披露を行うんだ、そして丸が書かれてある『皇帝からの謝辞』。この時にメディオン様を暗殺するようだな。開始時間は、書かれてある事が正しいと見ると、午前十一時二十分からだ」

時間まで詳細に書かれてあるということは、おそらく式典の一部分を握っている者も荷担しているのかもしれない。そうでなければ時間や式典の流れは、おそらく当日まで分かるはずがないだろう。

「次の紙には式典に来る来賓方の名前や、出席する重役達書かれてある。メディオン様も書いてあるぞ。——ほら」

と言ってフィートは次の紙をめくった。見てみると名前が紙全体ぎっしり書かれてある。その中でメディオンの名前だけが際目立った。なぜかというやはり名前の部分に赤丸が書かれていたからだ。他は目立った点は見られない。

「……なんでメディオンを狙うんだかな」

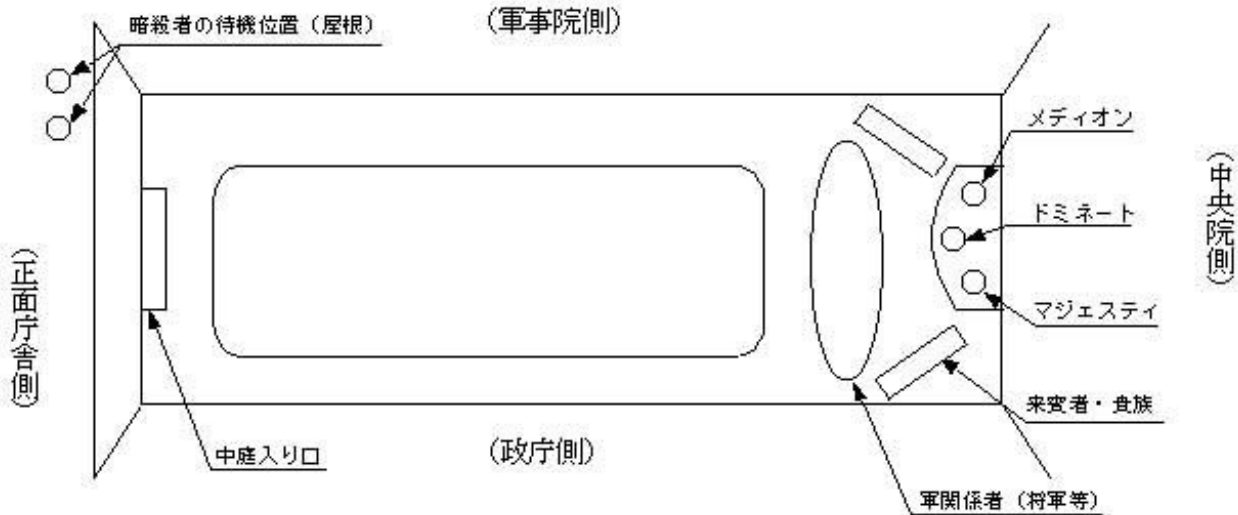
ぼつりといふ漏らしてしまった言葉を、フィートが聞き逃すはずがなかった。

「——さあな。国にとって厄介だから、って奴らは話してたけど、それだけで普通、暗殺はしないよなあ。裏に何か理由があるのかもな」

……あいつはそんなに人から恨みをかう人物なのか？

「その次の紙にはいよいよ暗殺計画の全貌が書かれてあるぜ。俺も盗んでから全部目を通して知った位だから、読んだだけじゃ理解できないだろうからな、説明を入れながら話すとしよう」

そして紙をまためくった。次の紙にはやたら図面とか、絵が多くて大体のところ、何を表しているのかは分かる。



「右から順を追って話すとしよう。——さっき、皇帝が感謝の言葉を述べている時に作戦実行だと言ったよな。その時の行動がこれだ」

どれどれと目を凝らして読んでみる。

「——皇帝らは二階のテラスで式典を行うらしいけど、そうなのか？」

「ああ。毎年、中庭南側の城館二階のテラスを使っている。四方は城に囲まれた、まあ箱庭みたいなもんだ。なんでそんな所でやるのかっていうと、周りが自分の城に囲まれているから、まず敵襲を受けないってことと、すぐ隣が軍事院——将軍とか身分の高い軍人が居る場所が横だから、てのもあるらしいな。この図面を見ると分かるが、奴らはそのテラスのある反対側……北側城館の屋根の上で犯行に及ぶらしい」

なるほど、確かにそう書かれてある。テラスを下から見下ろす形で狙うって訳か。

「テラスにはドミネート皇帝と第一王子マジェステイ様、そして第三王子メディオン様らが居るだけだ。配下や臣下、軍関係者らはそのテラスのすぐ真下……一階で話を聞く。皇帝の方は向かずに、国民の方を見る形になっているんだ。で、あとは国民が中庭を埋めつくすって訳」

「来賓達は？」

「……ここには描かれてないな。おそらく一階に居ると思うけど？ 関係なさそうだな」

そのようだ。オレは描かれてある図面をざっと見て、頭の中に記憶しておこうとする。

メディオンの座る位置は、彼から見て右側、向かいから見ると左に位置されている。フィートの話からすると、そこは去年までは第二王子アロガントが位置していた場所だそう。彼が居た頃は、メディオンは二人の王子の座る位置より、さらにテラスから離れた位置に座っていたらしい。

そこでオレはイザベラは出席しないのかと聞いたが、彼女は修道女なので出席できないとのこと。——どうりで、彼女の名前がでなかった訳だ。

「軍関係者はともかく、一般国民が王城に入れるのは一年の間でこの時だけだぜ。って言っても、国民全員が一気に押し寄せたら要塞みたいな王城だってひとたまりもないからな、この時期になると国民から希望を集めて抽選するんだ。それに当たった奴だけが王城の地を踏む事ができるのさ」

話がだんだん脇道へそれている。放っておいたらフィートはそのまま油紙に火がついたように別の話を喋り続けそうだ。

オレが聞いてないことに気付く様子もなく喋っているフィートを他所に、オレは計画書に目を通す。そこでふと、「フィート、テラスの反対側に実行犯が配置されるのは分かった、が、それで奴らが暗殺に使用する武器は——矢なのか？」

「.....それ以外にどうやってメディオン王子を殺すんだよ」

いきなり割り込まれたのに悪びれた様子もなく、彼は答えた。そして下に重なってある紙を一枚抜き取って、テーブルに広げると、

「ほら、これがメディオン様を殺す時に使用する矢.....というより、シェルと言った方がいいのかな。先端に雷弾が埋め込まれてある矢だけどな、今回使用するのはとんでもない奴らしいぜ。——この図面見てみろよ。雷弾の先端に矢の先っぽがくっついてあるんだ。これはどうやら相手を射った時に、その体に突き抜けさせる役目のようだ」

矢の構造が描かれてある四枚目の紙には、所々補足を付け足したような落書きの跡があった。図面を一目見たからには、普通のシェルと何ら変わりはない。

しかし、シェルの雷弾部分の先に矢の先が付いているのと、雷弾にはなぜか導火線が描かれてあるのは、普通のシェルと明らかに違う。導火線の長さは正確な数値が書かれてあり、どうやらそれが燃え尽きて火薬に点火する時には、狙った相手の腹に矢が食い込んでいるのだろう。普通のシェルは導火線などはなく、相手に当たった衝撃を元にして爆発するようにできているから、ここにあるシェルのような特殊な矢には、火薬が大量に詰め込まれてあるはずだ。配合する火薬の名称などは書かれてあったが、どのように調合するかまでは書かれていなかった。もしかしたらもう完成しているのかもしれない。

オレがそう言うと、フィートは、こともあろうに首を縦に振り、

「完成してるだろうさ。さっき、犯人の話の中で出てきたろう？ 訓練しているって言っていたから、おそらくもうその矢は完成してるさ」

となると、奴らはメディオンに矢が当たる距離も分かっているのだろう。でないと導火線の長さや爆発するまでの時間が比例しないからな。

「中庭の全長が約700m、とはいえ屋根の上から射る訳だから、正確な距離はわからない。使用する弓はボウガンと書かれてあるから、屋根からメディオン様までは届くことはできるな。導火線がどの位の長さが必要だとか、屋根の上からテラスまではいくらの距離だとか。——かなり前から訓練してないと正確なものは割り出せなかつたらう」

その通り。付け焼刃で出来るような芸当ではない。それにボウガンなど、並みの弓より遥か強力だから普通の軍隊には使われていないはずだ。それは矢を飛ばした衝撃がかなりあって一撃討つごとに手に負担がかかり、次の矢を装填させるのに手間がかかるのだ。かなりの腕の立つ弓兵でない限りは、素人が扱えるようなシロモノではない。

フィートはそう言ってから最後の紙をめくった。

一番下に敷かれてあった紙には、今までのとは多少違っていた。文章と図面が交互に入り混じっている。要所要所を見ても、どうやら当日、暗殺者らの行動についてのようだ。今までは、式典の流れ、出席者の名称、会場の簡略図面とその配置、使用する暗殺武器の構造と使用方法が書かれてあった。最後はいよいよ当日の奴らの行動が分かるってのか。——全てくすねただけあって奴らの行動は手にとるように分かるのは有り難い。フィートを血眼で捜しているだけの価値はあるな。

「最後はいよいよ、当日の奴らの行動だ。えーと、書かれてあるのを読みあげてみるぞ。——『「皇帝からの謝辞」が始まる前に2名ほど、屋根へ上がらせ、身を隠したまま待機させる』だと。図面にも書かれてあった通りだな」

「その次は、『用意したボウガンを所定の位置へ配置、固定させる』.....所定の位置なんて前もって調べておいたんだな。場所はおそらく——メディオンの居る方だから、向かって右側か？ 図面にも書かれてあったのも右側だったし」

と、フィートの後をオレが引き継いだ。彼は黙って頷く。

「奴らはかなり前から計画を練っていたようだからな。——続きを読むぞ。『皇帝が席を立ち、テラスの手すり付近で話を始めたところで、照準を目標へと合わせ、合図と同時に目標を射る。』——この合図、ってのが分からないんだよな、唯一これだけ書かれてなかったから」

確かにそうだ。合図して射る、だなんてこれっぽっちも今までに出てきてはいない。.....当日にならんと分からない

のか。

「最後の行は……、『目標死亡後、実行犯2名は早々に屋根から退去。その後仲間と合流し、門から出て、港町まで直行。証拠品は全て港から海へと捨てて抹消。——その後一旦解散し、各々個人で帝都へと戻る』個人で戻るってのは、おそらく集団で帰るとまずい理由でもあるんだろうな」彼は自分の推理に自分で納得するようにうんうんと頷いている。

「おそらくそうだろう。——書かれてあるのは以上だな。で？ どうやってメディオンを俺たちで助けるんだ？ 屋根に上がって2人を仕留めるのか？」

「……時間があつたらそうするでしょう。まあ、臨機応変にすれば何とかなるさ」

……あんた、本当にメディオンを救いたいのか？

オレが呆れた表情を浮かべるよりも先に、フィートが薄ら笑いを顔にして、すまんと片手を振り、

「冗談だよ、ジュリアン。ちゃーんと案は考えてあるさ」

……信用できないな。

「そう信用できない、だなんて顔に浮かべなくてもいいだろうが。——俺一人じゃ手に余るからな、ジュリアンが居てくれたらこの案は通るさ。……先ず、俺の持っているこれ——」と言葉を切って、彼は懐から小さな紙切れを取り出してオレに手渡す。紙といえどもかなりの固さで、折り曲げる事はそう難しくはないが、少し力がある。外見を手で回して見た後、それに書かれてある字を見てみると、「デストニア帝国所属承認証」と書かれてあり、その下にはフィートの名前、所属隊の名称等が書かれてある。

「それは帝国の軍人だ、という証明みたいなもんだ。それを門番に見せたら城に入れる。そして俺とお前さんが一旦別れる。ジュリアンはメディオン様の居るテラスの裏手に回り、俺は屋根を登って2名を捕らえる」

いきなり作戦を並べ立て始めたフィートを、慌ててオレは制した。

「屋根に登って、だって……？ 屋根じゃ剣は使えないぜ。足場が不安定でうまく切り込めないし」

フィートは、そんなこと分かっている、とでも言うような目つきでオレをちらりと横目で見た。

「俺がそうなんだから、相手もそうだろう。それを利用するのさ。魔法で仕留める事は出来るからな」

「……魔法？ あんた魔法が使えるのか」

いきなり彼の口から出た言葉は意表をついていて、オレは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「炎熱流(ブレイズ)や氷結嵐(フリーズ)、降雷撃(スパーク)程度ならレベルは低いが使える。言ったと思うが、俺は血を見るのが嫌いだから、剣術よりもこっちの方が性にあってるみたいだな」

軍隊の人間が魔術師ってのも何だか聞こえが悪いが……。

「……魔法だったら、確かに足場なんて関係ないからな。案外うまくいくかもしれないぜ」

「そうだろう？ ——とまあ、こんな調子でメディオン様をジュリアンが助けて、その後、どこかで落ち合うことにしよう。後は先程言った臨機応変に——だな。メディオン様を共和国に帰すってこともできるし」

「ああ。——これで何とかかなりそうだな」

フィートは頷く。そして話がようやく一段落したせいか、もしくは声を出し切ってしまったのか、テーブルに常駐しである水差しを引き寄せてグラスに注ぎ、何も言わずに飲み干した。緊張の糸も緩み、辺りに目を走らせるとホールに残っている者はちらほらで、カウンターの向こうに掛かっている時計は、もうすぐ11時を指そうとしている。いつから居たのか、カウンターの中に主人の姿があつた。さっきほど雨の音も気に障らない。どうやら峠は越したようだな。

そんな、静寂に包まれている宿に突然、扉を叩く音が響いた。

主人が「どうぞ」と声を掛けると、扉が開いて一人の男が現れた。どうやら宿を求める者のようだ。こんな夜中まで営業しているんなら、あんなにしゃかりきになって走らなくてもよかつたな、と今になって思ってしまう。

「……ふう。ようやく人心地ついたよ。全く、喋りつづけるってのも楽じゃあないな」

と、フィートの声に反応して、オレは彼の方へと向き直る。

「ああ、そうだ、忘れていた。——式典、てのはいつ行われるんだ？」

オレは、フィートが殆ど飲んでしまった、水差しに入っている飲料水をグラスに移して口につけた。外気にあてられて全然冷たくないぬるまった水でも喉の渇きを潤してくれる。

「あれ、言わなかったか？ 七日後だよ」

七日後?!

オレは自分の耳を疑った。

「フィート、今、七日後って言ったのか？」

「ああ」

さらりと言っただけの目の前の男に、オレは冗談じゃないと言ってやりたくなった。

「七日で着くわけがないだろう！ オレは半月かかってグリーフからここまで来たんだぜ、ここからデストニアまでだつて同じようなもんだ。せいぜい十四、五日かかるに決まっているよ。どう考えても無理だぜ、フィート」

オレが彼の耳元で怒鳴っても、彼はいたって平然としたまま、

「七日目に着かなけりゃ意味がないからな。全速力で走れば何とかなるんじゃないか？ それに、グリーフとデストニアじゃ、ここまでの距離がまるで違いすぎる。だから多少は誤差が出るさ。……七日目で絶対着くように進路を進めりゃ平気だよ」

……こいつの楽観的な部分を、半分オレに分けてもらいたいくらいだ。

「——じゃあ、ここを出るのは今夜か？」

「ああ。せいぜい1時過ぎってところかな」

間髪を入れずに答えた。——こりゃ今夜は眠れそうにねえな。

オレは分かったと頷いて、フィートが丸めた計画書を手にとり、頭の中で重複させる。重要な部分は当日の配置と奴らの流れだ。ここさえ掴んでおけば平気だろう。

……知らずうちに、熱心に書類を読んでいる、自分に気付いて驚いてしまう。

どうしてだ？ オレがメディオンを救いたい、と思う理由が見つからないのだが……。

最初は興味半分だったのが、今じゃ真剣に助けたい、と思い始めている。

胸の奥に、何かがわだかまっている感がしたが、それが何なのか自分でさえも分からない。——おかしなもんだ。

オレは黙ったまま、グラスの中に残っている水をちびちびと飲んでいるフィートに計画書を返した。彼は相変わらず何も言わないまま、懐に書類を戻した、とほぼ同時にカウンターから主人の声が飛んだ。

「フィート！ お客さんだよ」

名指しされた彼は、呼ばれても眉がぴくりと動いただけで、動こうとはしない。

……客？ こんな夜更けにとは、どんな客だ？

とオレが思っていると、彼はやおら首をカウンターの方へと向け、

「こんな時間に誰が来たっていうんだい」

と、半ば投げやりな調子で言い返した。主人はそんなフィートの様子を気にも留めず、

「貼り紙を見て、仕事を引き受けたい、って言ってる人が居るんだが？ それでも目が覚めないのかね」

「——仕事？」

背もたれに首を預けて、疲れた様子のフィートが一転して目の色を変えて飛び起きた。オレは座ったままカウンターの方へ首を回す。

フィートは立ち上がり、カウンターに座っている男へと近づいて、

「……仕事を引き受けたい、とはあんたのことかい？」

と言うと、彼の前に座っている男はこくり、と頷いた。それは先程ここにきたばかりの客だった。

この男、身なりはいかにも傭兵なのだが、オレから見ると、なんだか傭兵や冒険者らしからぬ雰囲気を持っていた。言葉では言い表せないんだが、なんかこう——無理している、というか——そんな感じがする。気のせいかもしれないが……。

その男はフィートに「路銀を稼ぎたくてね」と短く言っただけで、後はフィートに促すというのか、右腕を軽く振った。彼は頷く。

「わかった。じゃあ、ちょっと連れにことわってくるから、少しの間待っていてくれ」

と言ってオレの方へと戻ってくる。彼が自分から去っていく後ろ姿を、カウンターの男はじっと見つめていた。オレの視線には全く気付かないのか、フィートだけを焦点に合わせている。——なんだかおかしい。仕事の依頼人を余程、頼つてもいるのだろうか？

「よう、待たせたな」

フィートがテーブルに戻ってきた。にこやかな笑顔を向けて、仕事を引き受ける人物が現れてさも嬉しそうにしながら、彼は椅子に座ると、笑顔をオレにかけたまま、

「.....逃げるんだ、ジュリアン」

「……は？」

一瞬、オレは戸惑った。彼の表情と言っている言葉がまるで噛み合わなかったからだ。

そんなオレの表情を察する様子なく、フィートは嬉しそうに笑った後、辺りのテーブルにまだ飲んでいる冒険者らの囁くような声と同化するようなか細い声で、

「逃げるんだと言ってるんだ」

「……何で逃げなきゃいけないんだ？——まさか、今フィートに話し掛けた奴は、デストニアからの追手……」

彼は、オレが話していてもカウンターの方へと何度か目を向けていて、かなり焦っている様子が見て取れる。顔に笑顔を浮かべながらも、心の中は緊張に包まれているのかもしれない。

「……そうだ。あいつは傭兵を気取っているが、中身はデストニアの軍人だ。おそらくは、ガーゼル將軍配下の国境守備兵団の一人だと思う。殆ど汚れた

板金鎧(プレートメール)を装備してても、ごまかすことはできないさ。あれは他の国に普及しているような、そこいらの安物じゃあないからな」

……籍をおいてあっただけあって、さすがは帝国軍隊に精通している。オレはカウンターからくる視線を気にして、相槌を打つように頷いた。

「そうか。——じゃああんたも、もうばれているのか」

「多分な。だからこそ、逃げるんだ、ジュリアン。俺はお前さんと会えたことで、メディオン様を救ってくれる手が現れたと思った。お前さんが最後の希望なんだ。あんたまで俺に、最後までつきあってくれるいわれはないんだから」

「しかし……」オレは言葉を切った。

言ったじゃないか、あんたもオレと一緒に帝国に向かうと。そうでなければ折角立てた計画が水の泡になってしまう

。

——しかし、オレは言うことができなかった。おそらくフィートは分かっているだろう。そう……信じたからだ。

「よし。俺はあいつを仕留める。仕留めてから合流してリユーンを出てデストニアに向かおう。……なあに、平気さ。一人位でおめおめ死んだりはしないよ。——リユーン東門で待っていてくれ。もし、一時間経っても来ない場合は、お前一人で行くんだ、ジュリアン。約束だ」

「……一人位で死んだりしないんじゃないのか？」

「念には念をだ」

笑顔を絶やさずにフィートは言って、いきなり、

「手を出せ」

と言ってきたので、素直に手を出すと、彼はオレの手に何かを握らせた。見るとそれは、先程見せてもらった帝国所属承認証と、もう一つは見たことのない、丸いくすんだ銀色をした玉だった。

「その玉は、万一メディオン様を救えそうにない場合に、投げて使え。煙幕が張って敵の矢が当たりにくくなる。あとその承認証はお前が持ってる。万一の時に、俺なしでも城に入れるからな。ああ、それと、怪しまれるとまずいから、金貨を前もって手にしておけ。それを主人に払えば、何を渡したか詮索されることがない」

なるほど……。金貨を持っていると分かったら、フィートがオレを奢ってやろうと、金貨を渡したんだと思うだろう。オレは皮袋から金貨を取り出して、カウンターから見えない位置ですりかえる。怪しまれないよう、フィートと喋っているように、彼に顔を向けて笑顔を振る舞った。

「じゃあ、預かせてもらうよ。だけど計画書の方はどうするんだ？」

「アレは俺が持ってなけりゃ、もし死んだ時、俺の身辺を探してもないとなると、俺と接触していたお前さんが標的になってしまうだろう？ そうなっちゃあおしまいだ。だから俺が持つておくよ。元はといえば、自分が盗んだものだしな。それを他人になすりつけちゃいかんだろ」

……理屈に適ってはいるが、今はそんなこと言われる状況じゃないだろうが。

悪態ついた後、オレはやれやれと肩をすくめた。

「分かったよ。内容は充分把握してあるから平気だし。——だからってあんたがいなくなったら計画はおじゃんなんだからな。無駄死になんかしたら承知しないぜ」

フィートは、人が懸命に話しているのが余程おかしいのか、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべている。——まったく、人の気も知らないで。

やがて彼は、

「ああ。だから、お前も俺との約束を守ってくれよ。俺の身に何があっても決して後ろを振り向かないこと」
念を押すような、嫌とは言わせない低くこもった声で、彼は言った。オレは頷く。

「よし。じゃあ、先に行つてろ。裏口から出れば分かりっこない。裏口は二階階段のあるすぐ横だ」

「分かった。じゃあ、門で待ってるぜ」

オレはそう言って席を立った。彼も倅う。目で一時の別れを告げて、カウンターへ近づく。手に持った金貨を主人に渡し、「ごちそうさま」と言い残してオレは何気ない素振りを見せたまま階段を上がっていく。

上がる途中、ちらりと横目でフィートの居るはずの方を見ると、彼は、いつのまにカウンターから離れたのか姿が見えなくなっていた。おそらくテーブルかどっかで話しているのだろう。

やたら人目を気にするような仕草をしながら、オレは自分借りた部屋の扉を開けて、滑り込むようにして入った。

木製の衣装掛けにひっかけた衣服は、まだ少し濡れていたが、肩当て(ショルダーガード)は殆ど乾いていた。テーブルに置いてあった小手と胸当ても、あまり湿っぽさを感じない。

オレは借りたチュニックを脱ぎ、まだ少し濡れている服に袖を通す。じつとりと肌に冷たさが伝わってきたが、もう外の雨も止んでいる。そのうち体温と外気で乾いてしまうだろうと思い、不快感を感じつつ着替えた。

乾いている鎧を、胸当て、小手、足当て(レグガード)、靴、肩当て(ショルダーガード)の順に装着し、最後に前髪を止めるバンダナと、マントを羽織って、胸当てについている輪に通して着替えは完成した。休む間もなくオレは部屋に置いといた、少ない荷物と、フィートから預かったものをまとめ、部屋に入ってから10分と経たないうちにオレはもう飛び出していた。

「すまん、場所を変えて飲みながら話そうと思ってね。もうすぐ着くから」

フィートは、ジュリアンが金貨を主人に渡すとほぼ同時に、依頼を受けた男を連れて宿を出ていた。辺りは真っ暗で、彼の持っている外灯(ランプ)の光だけがぼんやりと辺りを写しだしている。とはいえ、すぐ目の前が壁だったら直前にならなければ分からないほどの弱い光だから、相手の顔もよく見ることはできない。付いてきているかどうかは足音で判別するしかなかった。

やがて、フィートの足がひたり、と止まった。後ろに歩いていた男の足音も止まる。

雨雲の切れ目から、月の光が二人を照らした。お互いの顔が見てとれる。男は周りを見回したが、酒場はおろか、人の住んでいそうな家屋も見当たらない。ただ資材のような物が辺り一体に山積みされてあるだけで、あとは全くの平地だった。

怪訝そうな表情を浮かべた男に、フィートはにこやかな笑顔を浮かべ、

「着いたよ」ぽつりと言った。

「.....どこに酒場があるんだ？」

男は疑わしそうな目を周りに走らせた。そう思うのも無理はない。フィートが連れてきたここは、リユーンの西側——都市拡張計画の場所で、今はまだ何も建てられていない場所だからだ。

「そんなものは最初からないよ」

「.....どういうことだい？ 俺を騙すためにこんな所に連れてきたってのか？」

男が吐き捨てるように言うと、フィートは突然声を上げて笑った。一瞬男はきよんとする。

「騙すだって？.....あんただって俺を騙しているんじゃないか、身分を隠すんならもうちょっと上手く隠しな、デストニアの兵士さん」

フィートの言った言葉に男は一瞬、狼狽の色を見せた——、が、すぐに平静を戻すと、何のことだと言わんばかりに、

「何言ってるんだか分からないな」

肩をすくめる仕草をする男に、フィートは懐から例の書類を取り出して、

「——コレが欲しいんじゃないか？」

男の目の前に突きつけた。男はそれを見た途端、態度が急変した。彼をじろりと睨みつけて、やや語勢を張り上げ威

嚇するような声を上げ、

「——ちっ、ばれてたんじゃしょうがないな。大人しくそいつを渡さないと、あんた無駄に命を落とす事になるぜ」
腰に下げていた剣を引き抜きながら、男はフィートを逃がさない、とばかりに彼から目を離さなかった。——今度はフィートが、やれやれと肩をすくめて、「……欲しけりゃ力づくで奪ってみな。メディオン様を殺そうとする者は、第三正規軍青竜海兵隊所属の俺が許さない」

そう言い放つと、フィートも剣を鞘から引き抜いた。互いの剣が、月の光に反射されて銀色の光を放っている。

そして——緊張の糸がぷつり、と切れた。男は剣を構えてフィートに切りかかってきた。辺りに光が殆どない分、相手がどの位置から襲ってくるかは足音と、感に任せるよりない。

フィートは冷静に男の位置を確かめて攻撃を受け流した。

攻撃を流され、勢いあまってつんのめっている男からすぐに彼は間合いをとり、男が振り返った瞬間にはもう動き始めていた。

瞬時に間合いを詰めて剣を振るう。一撃目は受け止められたものの、一気に踏み込んで剣を振り下ろした二撃目は効果があった。受け止めようとした男は、フィートに押し返されて剣を手放してしまった。

今のうちだ、とフィートは思って最後の一撃を振るった。その一瞬について、男は懐から短剣を取り出すと、フィートが剣を持っている腕に向かって渾身の力をこめて突いた。

剣を振り下ろそうとしていたフィートの腕は勢いに止まる事を知らず、男の持つ短剣に吸い込まれるようにして刺さる。一瞬、再び雲に隠れてしまった月の光のない闇に溶け込んだ、鮮血の色が彼と男の視界に入った。

「……！！」

腕から伝わってくる激痛に、フィートは男を目前にして剣を落とすと、慌てて間合いをあげ、彼は腕に刺さったままの短剣を引き抜いた。鈍い音がして、短剣が取れると傷口からますます血が溢れ返った。

——こりゃあもう剣は使えないな。

フィートがそう判断すると同時に、その隙をついて男がフィートの剣を手にして切り込んできた。腕を押さえたまま、彼は男の一撃をすれすれでかわす。

「大人しくその書類を渡せえ！」

と荒々しく叫んで、武器を持たないフィートに攻撃の間を与えず男は、何度もフィートに切りかかってきた。武器を持っていないから反撃されることはない、と男は確信していたのだろう、隙だらけの攻撃だった。

相手の動きをよく見ていたフィートは、直前で身かわして攻撃を流していた。そうしながら反撃のチャンスを待っていた。

そして、男の剣を振るう腕が重くなってきた時を狙って、彼は避けざまに

左手に持っていた外灯(ランプ)を男の顔にめがけて投げつけた。瞬時にして男の視界がまっしろになり、闇に慣れていた目が眩む。

「何しやがった！ くそっ……何も見えない！」

と、男が目を押さえてふらふらしている間に、フィートは痛みで麻痺している右腕を、男に向け、手を広げ、左腕を支えにして呪文を唱えた。

「剣を持っていることが災いしたな——降雷撃(スパーク)！！」

フィートは最後にそう付け足すと、言霊の力によって呪文を解放させた。

彼の“力ある言葉”に反応して手の平が光を放ったかと思うと、天から雷の光がフィートの剣めがけてまっすぐに降ってきた。避雷針の役目を果たした剣を持っている男は、剣もろとも雷の光に包まれる。彼は男からなるべく離れた場所で、暗殺者の最期を見届けた。

やがて雷の光が去った後、フィートは男に近づいてみると、男は地面に倒れ、生きてはいるようだが、もはや虫の息だった。間もなく命の火が消えかけようとしている男に、

「……どうしてこんなことをするんだ。メディオン様を殺そうとなんて考えなければ、今頃は帝国で一兵士として活躍していたはずなのに……」

と問い掛けると、男は力なく笑って、

「何甘い事言ってるんだ？ 肩身の狭い俺たちに活躍なんて言葉は無いも同然なんだよ……し、書類を、渡せ。そうすればあんただって助かるんだ、今ならまだ、助かる。全てにおいて救いの手が現れるんだ」

「何を言っているのかさっぱり分からないが、これを渡す事はできない。私はメディオン様を殺すなど絶対にさせない。——さらばだ」

最期にそう言って、彼は地面に落ちていた、自分の血がついている短剣を手にとり、男の首を切り落とそうとした、その時。

突然辺りに炎が現れたかと思うと、彼に向かって炎の柱がぶつかるようにして当たり、その拍子に疲れきった足が体重を支えられず倒れてしまった。幸いどこも焼けてはいないが、突然のことにフィートは何が起こったんだと辺りに目を走らせた。が、目の前にはもはや息をしていない男の姿が見えるだけだ。すると、

「もしこの炎で書類が燃えたらどうするんだ？」

「大丈夫ですよ。手加減はしておきましたから」

などと炎の向こうから声が聞こえた。——新手か？ と思っているそばから炎は一瞬にして消えた。炎が消える直前に、目の前に数人の人影が居るのが見える。

とほぼ同時に肩にずしっ、と痛みが走った。見てみると矢が二本、鎧を通して刺さっているではないか。

「書類を盗んだのはあんたかい」

と、バリトンのよく響く声が聞こえた。もはや闇に包まれてまったく姿は見えないが、気配を感じるとどうやら四、五人は居るようだ。自分の横で死んでいる男だけだと思ったのが間違いだった、とフィートは自分のうかつさを呪った。

「……そうだが？」

と答えたかみなかで、彼は足に激痛を覚えた。見ると足に深々と矢が食い込んでいる。たまたま彼は、足の力を失って倒れこんだ。

「返してくれないかな、それがないと俺たちの計画が台無しになってしまうんでね、今ならまだ助けてやってもいいんだぜ」

陽気な声で言い放つ男に、フィートはバカ言えと言いたくなった。絶対に渡すものか。

「……生憎と、これだけは渡せないんでね。メディオン様を殺すなんて絶対にさせやしない」

「ほう。——じゃあ、あんたが死んだ時に奪えばいいってことか」

男はにやりと笑みを浮かべた——ようにフィートには思えた。彼は気力を振り絞って立ち上がり、男が近づいてくる足音で位置を確認しながら、呪文を唱える。他の者が手を出してこないのは彼にとって有り難かった。

——やがて、男の足がひたりっ、と止まる。——しばしの沈黙の後。

「自分の忠誠を誓った相手を呪うんだな」

と言って、すらりと剣を抜く音。

相手だってこの闇で自分の姿が見えないはずだ。ただ、先程炎に巻かれた時にお互いの位置が見えたから、それで矢が当たったりするのだろう。フィートはすでに唱え終わっている呪文を無駄にしないよう、精神を集中させて相手の動きを感じ取ろうと目を閉じた。

と、いきなり闇が薄れ、雲の切れ目から月の光が再び辺りを照らし出した。

男は一瞬、月光に気をとられ、空を仰ぎ見る。その一瞬をフィートは見逃さなかった。

自分の一歩先にいた、剣を握っている男の腕をがしっと掴むと、彼は呪文を開放させた。

「氷結嵐(フリーズ)！！」

掴んだ手から光がほとぼしり、剣を握っていた男の体をみるみるうちに凍らせていく。フィートは精神を振り絞って最後の最後まで精神力を使い果たそうとしていた、が、

「ぐおおおっ！貴様ああ！！」

男も絶命寸前に、あらん限りの力をこめて剣を振り落とした。

フィートの肩当て(シールドガード)をぎっくりと裂いて、剣は男を掴んでいる彼の右肩に食い込んだ。——しかし、フィートは手を離さなかった。

男は最後の力を使い果たして、凍ったまま絶命した。

フィートは、男が絶命したと同時に手を離して倒れた。しかし、攻撃の手は休むことなく自分に降りかかってきた。矢が数本、自分の鎧を通して体を貫いた。

「……もはや、これまでのようだな。覚悟しろ。仲間二人の仇も含めて、死んでもらう」

と誰かの声が聞こえて、月の光に辺りを見回せば、一人の男が手を自分にかざして何か口で唱えている。

フィートは逃げようとしなかった。いや、できなかった。足には矢が刺さりっぱなしで、ろくに力も入らない。

彼はにやり、と笑みをこぼすと、懐に入れておいた書類を手にとり、

「……これがそんなに大事なら、やぶいて捨ててやるよ。計画を実行させてたまるものか」

と言い捨てて、彼は手にした書類をやぶこうと、両手で持ちなおして引き裂こうとした。しかし、やぶこうとしたその時、両手の甲に矢がぶつり、と刺さり、彼は書類を落としてしまった。

——そしてその時、男が唱えた呪文が完成した。

「炎熱流(ブレイズ)！！」

炎が自分の体めがけて放たれる。

自分が焼けていく感触すら痛みによって全く感じていないフィートは、嬉しそうな笑みを顔に浮かべながら意識を失っていった。

自分が死んでも、きっとあいつがメディオン様を救ってくれる。俺が他の人間と接触したことを知っている奴はもういない。だからこそ、彼は俺にとっても最後の希望なんだ。

——後は頼んだぞ。ジュリアン。

部屋を飛び出たあと、宿の裏口から外へ出たオレは、そのまま走って東門へと急いだ。辺りはうっすらと、油の切れる寸前の外灯の明かりが光っているだけだ。町の間は皆寝静まっているから、誰に呼び止められることはないだろう。

雨が上がったばかりの通りには、あちこち水溜りができていて、走るたびに出る、水をはじく音その都度町中にこだまする。もし誰かに気付かれてはまずいと、オレは走るのを止め、やや早足で歩くことにした。

もうすぐ東門が見えるか見えないか、というところまで差しかかった時だった。

歩いている自分の背中の方から、いきなり爆発音が響く。それから相次いで何かが燃やされていくような音。再び爆発音。そして、遅まきながら爆風が、オレを掠めるようにして過ぎ去っていく。

——何が起きたんだ？

オレは音がした途端、瞬時に後ろを振り向いた。すると、闇に包まれたリューンの町の一角が、闇よりも紅い炎で包まれており、そこら一帯が昼間のように明るくなっていた。

そこは丁度、オレが今居る東側とは正反対の、西側の方で爆発しているようだった。……まさか、とオレが思うより先に、静まり返った町に届きわたるような、断末魔の悲鳴が微かに耳に伝わった。

——フィート！！

駆け出しそうになった足を、オレは自制心を総動員させて止めた。……あれは確かにフィートの声だった。——じゃあ、じゃあ……彼は……！

オレは立ち尽くしたまま、その紅い、彼を焼いていく炎をただじっと見ていることしかできなかった。

あの場所に行くことはできた。しかし、彼と約束したのだ。

『俺の身に何があっても決して後ろを振り向かないこと』と。

……見事に俺の約束を破りやがって。俺もあんたとの約束を破って、あの場所に行こうと思えばできるんだぜ。

しかし、オレは頭でそう考えても、体はそこを動こうとしなかった。——約束を守り通すことでしか、彼の命を癒す事などできないと分かったからだ。

オレは、フィートから預かった帝国所属承認証を握りしめながら、炎が消えていくまで見ていた。

……やがて炎の勢いが薄れていき、やがては完全に消えてしまった。おそらくフィートを殺した奴は、その場で起きた事を隠滅させるために、周り全てを火で燃やし尽くしたのだろう。そしてフィートは、オレの逃げる姿が見られてはまずいと、西の方角へ敵を誘っていったのだろう。

ここに居てはじきに、宿に現れた男と遭遇してしまう。町から離れなければ、リューンの人々も爆発音に目覚めてしまっただろう。今逃げないと後々面倒になる。

オレはもう一度振り向いて、フィートに呼びかけた。

「——約束を果たしてやるからな」

そう言い残して、オレは東門をくぐり、全速力で走った。あと7日——日が変わったから、正確に言えば6日——

後に、メディオンは自分の故郷で、反逆者の手によって血祭りにさせられてしまう。国民が一斉に見つめている中で、彼は無残にも矢に撃たれて、テラスを血に染めてしまうかもしれないのだ。

絶対にそんなことはさせない。させてなるものか。

闇の中を、月の光に頼って街道を東に進むオレは、フィートの死によって霞んでいた目が覚めた。オレの心にわだかまっていたのが何なのか。今ようやく分かった。思うだけで、胸が焦れるような、そんな感情をどう言葉で言い表わしていいか分からなかったが、これだけははっきりと言える。

——オレは、あいつ(メディオン)を守りたい。

空はどんよりと薄灰色の雲で覆われている。

男は、来るべき日までの間が、少しずつ短くなっていくのをここでしか見守る事ができなかった。もし、自分が城から居なくなれば、たちまち一騒動が起きるだろう。それだけは避けたかった。

しかし、もう日にちがないのも事実だ。あれが見つからないことには、あの日に実行されるはずだった計画を無に帰すしかない。じっくりと綿密に立てた計画は、一人の男の手によって全てを瞬時に奪い取られてしまった。

やはり、世界を救った者を暗殺する行為など、神が許してはくれないのだろうか……。

この計画は、どうしても実行しなければならなかった。

何故なら、あの者が、たとえ亡命したとしてもこの世で生きている限り、いずれ我々にとって邪魔な存在になるからだ。ドミネート皇帝の目が黒いうちはいいが、年を取ることは誰にも止められない。——マジエスティ様はまだ自覚がなさそうだが、それはおそらく自信があってこそ生まれる余裕のせいなのだ、と思いたかった。

——アロガント様を失った代償は大きかった。あの方が生きておられたら、まだ救いがあったかもしれない。——そう。救いだ。この計画が成功すれば、すべてにおいて救いの手があらわれるのだ。

「——こんな所においてでしたか」

背中の方から突如声がした。振り向いてみると、剣士風の男の姿が目に見え、とはいえ、窓の近くにいっても日の光が差さないで、足から上が部屋全体の薄暗さに包まれていてよく見えない。しかし、声と体格が、その人物が計画に荷担している一人だと、男には判断できた。

「こんな昼間に何の用だ？ あまり外目には我々の関係は知られてはまずいのだと、言っておるだろう」と何度注意しても、目の前にいる男は一向に聞く耳を持たなかった。

計画を実行にきたすためには、どうしても誰かの手が必要だった。そのため、信用できる將軍に打ち明けようとしたが、だが、どういういきさつでこうなったのかは忘れてしまったが、帝国軍隊の中でも弱小と謳われた、一兵団の隊長に話をしてしまったのだ。それが、今目の前に立っている者だった。

彼は、この計画に賛同して手を貸すと言ってから、実に多くの仲間を集めてくれた。どういう方法でかき集めたか、問いただしても「あの方を憎んでる奴なんか、ごまんといってるってことですよ」とごまかすだけだったが、それを十分に補ってくれる人材だった。

しかし、この計画のことを知っている者は、我々計画実行者と、計画書を盗んだ、第三正規軍のレリアンス將軍配下の者だけだ。だから、普段会うはずのない者と面識がばれたらまずいことになってしまう。

「すみません。何分急な返事が届いたもんで。それをお伝えしようと思ひまして」

「急な返事？——ということは、書類を盗んだ奴を追っている者からか？」

気がつかないうちに力んでいる自分に気付く。

「そうです。先程、伝書鳩が私の手元に届いて、彼らの状況を知らせてくれました。——書類は無事に取り戻す事ができた、と言っております。それと、書類を盗んだ青竜海兵隊所属の男は殺した。」

「……それは誠か」

「はい。早馬を駆ってこちらに向かうとの事。着くのは——せいぜい、5日後でしょうな」

やはり、あの者の運命は我々の手中にあるということか。男は周りの手前、歓喜の声を出不さぬよう努めながら、表情一つ変えることはせずに、

「5日後か。分かった。さすがはお前が選んだ者達だ、立派に使命を果たして戻ってくるとは、もう無理だと思っていた。戻ってきたらねぎらいの言葉でも掛けるとしよう」

「しかし、こちらもかなりの痛手をおったようです。二人ほどやられたと、書いてありました」

——自分の主君が殺されるのを阻止しようと、必死になって戦ったのだろう。男にも分からなくはない。自分も、書類を盗んだ者の立場におかれたとしたら、必死で主君を守ろうと戦っただろう。しかし、盗んだ男の場合、仕える主君が悪すぎた。ただそれだけのことだ。

「……そうか。死んでしまった者も弔ってやることにしよう」

「ありがたきお言葉、光栄に存じます。——報告は以上です。その後の状況等が分かり次第、また集会でお伝えしようと思ひます。今回は急ぎの報告のため、ご了承下さい。……失礼します」

ついに相手の表情を見ることなく、お互いの会話は済んでしまい、報告を終えた男は足音一つ立てずに部屋から出ていった。

残った男は、心の中に勝利を得た優越感が広がっていくのを認識しながらも、それを押し止めようとしなかった。甘い喜びがじんわりと、不安で一杯だった心を癒していく。

我々は勝利を得たのだ。計画が成功すれば、忌まわしき帝国の厄災を取り除く事ができるのだ。——メディオン王子は、帝国の厄介者だ！

しばし勝利の確信に浸っていた男は、さっき話していた男が出てってから数分後に、その部屋を離れた。足取りは普通のそれだが、男の顔には、先程とはうってちがって晴れ晴れとした表情が浮かんでいた。

名も知らぬ 惑星の上に独りただ 果てしなくあゆみつ……、

道ばたのキャベツ畑に飢えをいやし……、

夜半の風に まどろみをおかされ さらに憩うすべなし……。

……どっかの作家が歌った唄に、こんなのがあつたけな。

などとぼんやり頭の隅で考えていながらも、オレの足は一步一步、東へ向かって歩いていた。

リユーンを離れてから、オレは再び太陽が昇るまで、歩き通して街道を東へと下った。持参してあるランプに火を灯し、ひっそりとした街道を独り歩いているオレを端から見たら、なんと珍妙なんだろうと思う。

日が昇りきった頃に、オレはようやく、リユーンから普通に歩いたなら1日かかる街道沿いの小さな町に到着した。一晩中寝ずに歩いたせいか、それとも、普段よりも早足で歩き続けてしまったせいか、自分の足はぼんぼんに脹れてしまい、町に着いてすぐにオレは教会へ治療してもらうために駆け込んだ。

一晩寝てない分の疲労も溜まっていたオレは、教会を出てすぐに睡魔に襲われ、宿の部屋を借りると、ベッドに寝転がってすぐに眠ってしまった。

目が覚めたのは夕方近い時刻だった。

慌てて部屋を引き払って町を出ると、日はもう紅くなり始めていた。逃げるようにして町を出て6時間後、街道はすでに山道へ差し掛かっていた。——つい先日歩いてきたこの道をまさか戻る羽目になろうとは、一体誰が予想していただろう？

それでも、オレの今課せられたことは歩くことしかできない。

歩いて、道端で休んで、の繰り返しを、一体いつまで続けたら目的の場所にたどり着くのだろうか。

それだけデストニアの距離は遠く、長かった。

山道を、鎧を着けたままで歩くのは困難だった。一步一步登っていくのに、身に着けている鎧の重さは体に大きな負担を加えた。急いで山越えしなければ、魔物との遭遇する可能性も高くなる。オレは必死で歩き、山を越えたところで夜が明けた。日の光に安心してしまったせいか、倒れるようにして草むらに体を横たえた後、オレは道端で眠ってしまった。

東に向かって延びているこの街道には、オレ以外誰も通るものではなく、広い草原の中を、あるいは雨の降りしきる湿原を、ただひたすら、デストニアに着くことだけを考えて歩き、あるいは走った。

3日も歩いたところだろうか、出会い頭に魔物との接触、そして戦闘になだれ込む。

歩き通しだった足は、戦闘で移動するのに耐えられないほど持久力が落ちていた。仕方なく、オレは移動をしないで、なおかつ素早く戦闘を終えるために、降雷撃(スパーク)の魔法を魔物の周りに落とし、魔物が消し炭になったのを確認してから、よろめくような足取りでその場を去った。

しかし、歩き初めてものの数分で、オレの足が悲鳴を上げ、力尽きるような格好で倒れてしまった。起き上がるろうにも、足に力が入らない。感覚が完全に麻痺してしまったようだった。

「……くそっ、何で起き上がらないんだ」

弱音を吐いているような時間はなかった。日は着実に傾き始めている。こんな所で道草食ってはいられないんだ。

頼むから、立ち上がらせてくれ。せめて次の町に着かないと、治療してもらう事すら適わない。

何とかしないと、と思い、荷物の中からありったけの薬草を取り出して、口の中に入れて噛み砕き、ブーツを脱いで足のふくらはぎに、噛んで柔らかくなった薬草をこするようにして付け、その上に布を巻いてあてがった。その状態じゃブーツを履くことはできないから手に持って移動するしかない。足は靴下のみだったが、次の町に着く頃まではもつだろう

。 ゆっくりと立ち上がると、先程よりは幾分楽にはなったが、所詮は付け焼刃だ。教会で治療してもらわないとそのうち足が壊死してしまうだろう。

急がないと。頭の中はそれだけだった。

足はふらつきながらも歩みを進ませてくれていたが、オレの心は急いでばかりいた。もっと先へ、先へ。何故こうも足は早く歩いてくれないんだ。

ふと、メディオンの顔が頭をよぎる。悲しげな表情を浮かべた彼を。

思うだけで、胸が焦れているように熱くなる。考えるだけでくらくらとする思考。そして何よりも、メディオンを助けたい、その気持ちを、最初は無視していた。リユーンを出てから悩ませていた、胸の奥に巣食っているわだかまりは、デストニアに近づくにつれて膨れ上がる一方、素直になることを怖がっている自分。——オレもあいつと同じだ。

「……つたく」

オレは頭を振ってから、遠い東の空を見上げて、独り呟いた。

——愛してるって、こういう気持ちなのか。

……………ん？——な、何言ってんだオレは?!

ふと我に返ったところで、自分の口から洩れた言葉の意味に気付いて自分自身に驚いてしまった。その拍子で、力の出ない足が、体重を支えきれずによろけてしまう。

「ああっ！……つと、危ないところだった」

すんでのところ、もう片方の足に体重をかけたおかげで、倒れるのだけは免れたが、何であんな言葉がひよいとオレの口から出たのか訳が分からない。——だが、呼吸は荒く、顔はやや紅潮している。誰にも見られていないはずなのに、オレは慌てていた。自分を落ち着かせるためにと、足に負担をかけるように早足で歩いていく。——やがて落ち着きを取り戻しはしたが、胸の奥のわだかまりは、一瞬溢れ出しただけじゃ物足りないように、オレの心を揺るがしていた。

……夜半を回ったところで、ようやく次の町に着くことができたオレは、半ば叩き起こしたにもかかわらず、慈悲深い教会の神父によって、両足にか

かっている極度の麻痺を、解呪(アンチドウテ)によって治療してくれた、それだけに終わらず、

「今晚はもう宿がどこもふさがっているから、泊まっていきなさい」

とまで言ってくれた。断る理由もなかったので二つ返事で承諾する。

遅い食事を済ませ、ベッドに寝転がるとすぐに睡魔が襲ってきた。これから先の進路の取り方について、考えあぐねようとする前に眠りに落ちてしまう。

ずうっと毎晩夜通し眠らずに歩き続けたせいで、すっかり前と生活が変わってしまっていたオレは、次の日になり朝の光が窓から差すまで、一度たりとも目を覚ますことなく眠っていた。

そのせいか、十分に体力は回復していた。足取りも重くなく、普通に歩くことができる。

……この調子じゃあデストニアまで何とかもちそうだな。

すでにリユーンを離れてから4日目になっていた。あと2日後に式典があることになるが、今の状態ならなんとかがいけそうな気分だった。

朝食を頂き、神父に別れを告げて去ろうとした時、神父は笑みを浮かべながら、オレを諭すようにこう言った。

「あなたは今、目的のために急いでいるのですね。あそこまで足を痛めつけても、進もうとする努力は、きっと、あなたにとって余程大切なものなのでしょう。目的を達成することを神に祈っていますよ」

目的か。——ああ。達成しなくては。フィートになんて言われるか分かったもんじゃないからな。

オレは頷き、そして神父にお礼を述べてからその場を去った。足早に町から出て、東に伸びる街道を走っても、足が悲鳴をあげることはもうなかった。

空の様子が変わり、周りの景色も変わっていく。いつのまにか万里の長城が、自分の歩いている街道からずうっと北側に建っていて、東に向かってまっすぐ伸びていた。それはオレが、デストニアに徐々に近づいていることを唯一、証明してくれるものであった。

無理をしない程度に歩いて、休んでを繰り返し、夜は努めて歩かないようにした。無駄に魔物と遭遇して、戦闘に費や

す時間よりも、休む時間の方が大事だと分かったためだった。

そうして歩き続けて、五日目になった時だった。

デストニアに続いている街道が峠になり、急な坂道に息を切らしながら歩いていると、ふっと時々、何かが木々の合間に見え隠れした。今登っている山からまだ幾分か離れた場所に、これよりか高さが低い山に囲まれてある、大きな都市。

——あれは、まさか……。

オレは、もっとよく見える場所まで行こうと、急ぎ足で峠の頂上を目指した。急な斜面を走るようにして歩いたせいで、すぐに息が上がってしまったが、そんなことは気にしてはいられなかった。

ようやく峠の折り返し点まで着いたところで、両膝に手を当てて呼吸を整えると、顔を上げて東の方角を見た。

山に囲まれた都市の東側から、何かの線路が突き出すように出ている。目を凝らしてみると、それはうねうねと伸びていて、遙か北の方角へと歪曲を繰り返しながら続いていた。その先には、ここからは見えないが、レイルロードという駅があるに違いない。

「……デストニアだ」

そう。それはデストニア帝国の中心にして、国の中枢を担う都市。要塞都市と呼ばれた、帝都デストニアだった。

今居る場所からはまだ少し離れていたが、峠を降りて平地を進めば、明日の朝には着くだろう。どうやら間に合うようだ。

「しかし、本当に6日で着くもんなんだなあ」

思わず独り言を呟く。グリーンからリューンまで半月かかっていたのは、のんびりしすぎていた、と思えざるを得ない。……まあ、あの時は目的あって旅していた訳じゃなかったから仕方ないけど。

疲れたことも忘れてしまった。

オレは荷物の中から水筒を取り出して、ぬるい水を一気に飲み干した。走るように登ってきたせいですっかり汗をかいてしまい、服が体に張り付いて不快だったが、気にしてはいられなかった。幸い、今いる折り返し点の斜面の一角から、岩清水が湧き出ているのを目に留めて、それを利用させてもらうことにする。

冷たい岩清水は、火照った体を冷やすのには充分だった。顔と手だけを洗って、手ですくって水を飲み、その後に水筒に水を補給した。そうやっているうち、体の熱がようやく冷めて、上がっていた息は完全に普通の呼吸に戻っていた。

「そろそろ行くか」

自分に言い聞かせるように、声に出してそう言うと、オレは折り返し点から、歩いてきた方とは逆の方角へ伸びている街道を今度は下っていくことになる。登りよりかはかなりましだし、時間も短縮できるから、一時間もあれば峠を越せると思っていた。あとは平地を歩いていけば、帝都はもう目の前だ。オレの気持ちは歩いていくうちに高ぶっていった。

しかし、半分を過ぎたところであろうか、歩いている街道に、やたらと石が転がっているのに気付く、前を凝らして見れば、なんと十数メートル先の崖が崩れて、街道を完全に封鎖しているではないか。

……まさか……。

嫌な予感がした。ここ連日雨は降ってはいないはずだ。東の方角をずっと見て歩いていたオレが、雨雲を見ていないなんてはずはない。それでも、山の天気は変わりやすいが、足元や、周りを見ても、昨日か一昨日に雨が降ったと思われる形跡はなかった。どこもぬかるんではないし、木々は水を補給したような感じはどこにも見られない。

オレはその場所まで走り、崖崩れの手前で足を止め、辺りを見回す。

「もしかしたら……」

木々の辺り、切り立った崖のすぐ目の前をオレは調べてみる。もしこれが仕組みられたものだったら、爆破させるなにかが残っているはずだ。

と探していると、崖の斜面に、何やら燃えた時に地面を焦がしたような、線状の跡が見つかった。それを目でたどっていくと、崩れた崖の斜面に生えている木々の間に向かっていった。さらに辿ると、木々の間の一角から爆発したような跡にぶつかる。おそらく木に爆弾か何かを取り付け、それを導火線——線状に焦がした跡がそうだ——によって爆破させたのだろう。そして吹き飛ばされた木と、それが根を生やしていた崖とが、くつつくような形で崖を崩壊した——しかし何のために？

それに、この行為はどうみても一人や二人じゃ出来るようなことじゃない。……ということは、仲間は二人以上いた

のか？ 一人だと甘く見たフィートは、そのせいで死んでしまったのか？

だとしたら、他の仲間がオレの存在を知って、このような行為に結びつけたのも筋が通っている。——よもや、この事以外に、崖を崩すような行為をする理由があるか？ メディオンを殺そうとした奴らが、オレより先に帝都に戻る道中、このような大それた事に踏み切ったとしか、考えられない。こりゃ帝都に行ったら覚悟していた方がいいな。まあ、そこまでなくては、こっちとしても面白みが欠けるけど。

とりあえず今は、この崩れた崖をどうやって、向こう側へと渡るかだ。

「.....決まってるじゃねえか」

登るしかない。いちいち迂回なんてしていたら、あっという間に日が暮れてしまう。空を仰ぎ太陽の位置を確認すると、やや西に傾きつつあった。四の五のしていたら夜になってしまう。

オレは慎重に、崩れている元は崖だった地面に手をついて登り始めた。山積みになっている土砂は、土が乾いているせいで今にも崩れ落ちそうだ。土砂が再度崩れたら、オレだってひとたまりもないだろう。

そう簡単には行かせない、か。結構なことだ。オレだってこんなことに音をあげていられるか。約束したんだからな。

待ってろよ、メディオン。

必ず助けに行くからな。

「いくらなんでも無茶しすぎです。メディオン様。どうしてそう、一人で何でも解決されようとなさるのですか？ もうちょっと私の事を頼ってくださいってもよろしいじゃないですか」

部屋に入っていきなりの第一声がそれだった。メディオンはきょとんとした顔で、目の前にいる人物を珍しそうに見ている。それもそのはず。自分が共和国に置いてきた者が、ここに着いて数時間後、いきなり目の前に現れたのだ。もう夜が明けて、辺りはうっすらと日が差し始めていた。

メディオンが乗った列車が、レイルロードを経て帝都に入ったのは、もう日が変わろうとしていた時間だった。休む間もなく彼は城に入り、皇帝ドミネートに謁見を求めた後、与えられた部屋に入って眠りについた。

そして、夜明けが近い時間に、いきなり部屋のドアをノックした音で目が覚めた彼は、何も疑う事なくドアを開けた。見ればそれは、自分が裏をかいてでも、連れて行くのを断念させようとしたキャンベルだったのだ。

とりあえず何か言わないとと、メディオンは、

「や、やあ、キャンベル.....おはよう」

などと、場違いにも挨拶を交わした。キャンベルはそれに応えようとはせず、頭を振って額に手を当てた。疲れているようだ。

「何がおはようなものですか。——ああまでされても、ここに来た執念だけは認めて欲しいですね、メディオン様。今日はあなたの側から絶対離れませんよ。昨日のような目に会いたくないですからね」

つつけんどんに言い返す。それに対してメディオンは苦笑を浮かべていただけだった。

「.....けど、よく来れたね、キャンベル」

ケンタウロスの耳がびくりと動く。

「メディオン様が乗った列車が行かれた後、私はストリッジの駅長に頼み込んで、次の列車をすぐに出してもらったのですよ。デストニアの式典の件だ、と言ったらすぐに出してもらえました。おそらくメディオン様が出て行くのを見ていたんでしょうな」

うかつだったな。とメディオンは思った。帽子をかぶってまでして、自分の存在を見られないようにしたのだが.....

「いつこっちに着いたんです？」

とりあえず部屋へ入ると、メディオンは扉から離れてキャンベルを入れる。ドアを静かに閉めると、まだ朝早かったのか、どこからも何の音も聞こえず、我々が話している声しか耳に入ってこなかった。

「今朝方.....というより、ほぼ真夜中ですね。ストリッジで延々と待たされましたからな。車両点検に遺漏があったとか何とかで。そんなことがなければ、メディオン様が着いた後に着くはずだったんですが」

「遺漏があったのは、キャンベルが列車を急発進させたからだろう」

「.....おそらく」

無理を承知でここまで来てくれたキャンベルに、メディオンは心底感謝していた。自分はそこまでされて守られる価値のある人間なのだろうか？　といつも頭を悩ませる問題が浮かぶ。嬉しいのだが、言葉には決して出せない臆病な自分は、守ってもらうことに対して何も考えてはいないんじゃないか

と、周りで見られているのでは、そう思えばいつしか、口には出して言えなくなっていた。

「そういえば、城に入って聞いた情報なんですがね」

ようやく気持ちの整理がついたのか、邪険な態度だったキャンベルは、普通の態度のそれに戻っていた。窓に目をやっていたメディオンは、話し掛けてきた彼の方へと向く。

「西の……大陸中央へ通じる街道があるじゃないですか。峠を越えたら他国領になる」

「ええ。……それがどうか？」

「なんでも崖崩れで通行できなくなっているみたいですよ。どうやら、西のほうへ出張していた軍の人間が、それを発見して、どうにも通ることができないらしくて、仕方なく迂回をして帝都へ戻ってきたって話です。行きはそんなことはなかったってことですがね」

キャンベルから見て、メディオンは最初、話半分に聞いていたようだったが、次第に表情が曇っていった。すると、「おかしいとは思わないか、キャンベル。ここ連日雨は降っていないはずだろう？　大雨が降らない限り、崖崩れなんて起きやしないはずだ」

話を振られたキャンベルは慌てて頷く。

「ええ。しかし、山の天気は変わりやすいと申しますし……かといって、それが人為的だとしても、何故そんなことをするのか理由が掴めません」

確かにそうだ。西へ通じる街道はまだ他にもあるから、デストニアを孤立させようとした行為ではないだろう。——とはいえ、山に大雨が降ったなら、河川は増水しているはずだろうが、そんな話はメディオンの耳に入っていない。……どうもおかしい。

「まさか、そこを通過していた人は生き埋めになってはいないだろうね？」

「さ、さあ、そこまでは聞いていないので何とも……。メディオン様が直接聞いてみたらどうですか？」

返答に窮していたキャンベルは、首を振りながらそう言った。

メディオンも、それ以上は聞かないと言って、軽く頷く。——ふと見れば、もう日は東の空に上がっていた。式典の日が、いよいよやってきたのだ。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか、キャンベル。まだ皇帝に——父上に会っていないのだろうか？」

「ええ、こちらに着いてすぐにメディオン様の所に来てしまったので」

「じゃあ、謁見をしなければいけないね」

そう言うと、メディオンは笑った。嬉しそうな笑みというより、やや控えめな笑顔だった。キャンベルは何故か胸が痛んだ。

「……じゃあ、私は扉の前でお待ちしておりますので、着替えをなさった後に行くとしますかな。いいですか、くれぐれも逃げたりなさらないようにして下さいね」

念を押すように彼は言った。メディオンはまたも苦笑すると、ぼつが悪そうな顔をして、

「……ここまで来て逃げる理由があるのかい？　それに、ここは二階だよ。逃げようとなんて出来やしないよ」

しかし、キャンベルは納得した様子もなく、

「いいえ。——窓から飛び降りる事は可能ですからな」

「式典があるのに、逃げたりなんかしない」

「絶対ですな」

「絶対だ」

そこまで言って、ようやくキャンベルは折れた。彼は肩をすくめると、

「分かりました。扉の前でお待ちしています。ドアから出てきてくださいね」

「当り前でしょう」

おかしように笑ったメディオンを見たキャンベルは、ほっとした表情を浮かべて、部屋から出て行った。

元気付けようとしてくれた彼の行為に、メディオンの沈んでいた気持ちが徐々に明るさを取り戻していった。

メディオンは心の中で、扉の向こうでかたずをのんで待っているキャンベルに感謝の言葉を言うと、テーブルの上に、

きちんと畳まれてある帝国貴族の礼服に手を延ばした。

ちら、と、林の間から光が洩れた。

汗を拭いつつ、東の方角——今オレが向いている方向はやや北側に面した街道だ——に、考え込んでいたせいで閉じていた目を開けて見てみると、夜がいつの間にか明けたらしく、日はもう顔を覗かせ始めている。その、太陽が最初に放った光がもう届き始めているのだった。

「もう夜明けかよ」

焦りが自分の心を支配し始めてきている。それもそのはずだ、何故なら、オレはまだ土砂崩れが起きた場所の こっち側に居るのだから。

——この土砂を登って、向こう側に行こうと最初に登ったまではよかった。登り初めて数時間が経った頃だろうか、もう辺りは真っ暗になっている頃、ようやく土砂の山の頂上まで登りつめたオレは、辺りが見えるようにとランプを荷物の中から探し出して、芯に火を点けようと、座のような形で土砂の上に腰を据え、ランプを持った手と、片方の手をようやく土砂から離れた時だった。

まるで待っていたかのように、座っていた土砂が地響きを立てたかと思うと、有無を言う暇さえなく滑り込むようにして崩れ落ちた。とっさに身構えたオレは、なんとか土砂に埋まる事は免れたが、そのショックで持っていたランプを失ってしまい、一瞬自分の居る場所がどこかまるでわからなくなってしまった。

ようやく闇に目が慣れた頃、自分の目の前に黒くわだかまっている物が土砂の山だと気づき、登ろうと足をかけた途端、その足場が無い事に気付く。手で触ってみると、殆どが乾いて崩れ落ちた土のようで、岩のようなものは手探りで探してもなかった。それでも登らないと、と足を踏み入れても、ものの二、三步で土砂が崩れて地面に落とされてしまう有り様だった。

.....なんてこった！ 土砂を降りてからランプを点けてもよかったですらうに。何だっあそこで油断したんだ！

下に降りる時の足場を確かめようと、ランプを出したのが、結局裏目に出てしまった。

オレは無闇に体力を使うのを抑えようと、少しまどろんではまた起きて、黒いわだかまりと化した山を登ろうとしたが、結局は無駄に終わった。——そして、今に至る訳だ。

夜明けが近いことを知ると、オレの心はますます焦りの度合いを深めていった。このままでは埒があかない。しかし、どうやってこれを登る？ いくら光が照らしても、登れないことには変わりがない。この、もう砂と同然の山を登ろうなんてどうやったって無理だ。何かすか、破壊でもしなきゃあ.....？

破壊？

オレは一瞬、目から鱗が出るかと思った。——そうだ、破壊すれば済む事じゃないか。どうして今まで気がつかなかったんだ！

しかし、今までの無駄骨に歯噛みをしている暇はない。オレは土砂の山から充分離れると、剣を抜き、目前の高さまで上げると、剣を持たない手を抜き身に添える。そして言葉を唱え始めた。

最初からこうしておけば、昨日のうちに帝都につく筈だったものを、何で気がつかなかったんだろう。.....自分の力を慮っていた訳ではあるまい

.....。まあ、ここら辺の地形は少し変わってしまうだろうから、その点を考慮していたのかもしれないが。

急激な精神力の消耗に、やや頭がぼんやりとする。しかし、言葉を唱える口は動き出したら止まる事はなかった。

唱え終わると、オレは目標を定める。添えていた手を離し、剣を持った手は、標的——土砂の山だ——にゆっくりと剣先を向け、片方の手は剣の柄を支えるように握らせる。そして、唱えていた呪文を解き放った。

「焦熱斬(インフェルノ)!!」

“力ある言葉”に応えるように、剣先から鋭い光が放ったかと思えば、次の瞬間には標的を目指して、まばゆい真紅の光が突っ込んでいった。解き放って間もないうちに、乾いた土砂は一瞬にして四散する。

やや抑制がきかないこの魔法は、下手したらこの山一つは吹っ飛ばすほどの力を秘めているのだ。それ故に、オレはあの戦いで使用した以外、使ったことは一度もなかった。

四散した土砂が舞うように辺り一面に土を降らす。やや霧がかかったように見えたそれがようやく沈静すると、まるで何事もなかったように、向こう側の景観が見えるようになる。

「行くか」

辺り一面を確認するように見回しても、このせいで二次災害が起きたりはしないだろう。ただ、少し土砂があった周りの木々が、燃え尽くされてすでに炭化となっていたが、まあ気付くはずはあるまい。多分。

オレは一気に土砂のあった場所を駆け抜けると、一散に走って峠を下っていく。下り坂に走るのはもちろん、速度が上がって危険ではあったが、そんなことを悠長に構えていられる暇などなかった。

一晩足を使わなかったせいで、自分の足は重ったるいことはなく、走りつづけてもくたびれた様子は見せないのは救いだった。やがて峠を越えたオレは、勢いがついた足を止めることなく、平地を風のように走っていく。

もう太陽はすでに東の空上空に浮かんでいた。おおよその時間をそれで合わせると、8時半は過ぎているだろう。式典開始時刻は10時と書かれてあったから、夜が明けて1時間はあそこで足止めされていたことになる。貴重な時間が失われたことになるが、今は悔やむ事よりも、前進する事でその時間を補うより考えがつかなかった。

だが、さすがに走りつづけていくにつれ、息が切れて、走っている足がだるくなったように速度を落としていく。やがて完全に足が止まってしまったオレは、胸に手を当てて息切れを整える。体がものすごく熱かったが、いちいち体温を気にしてられる余裕はなかった。手で額の汗を拭っただけで済ませて、息が整うとまた走る。

走りつづけていくうちに、遠くの方から何か弾けるような音が耳に届いた。何度も何度も一定の間をあけて繰り返される、その音がする前方に目を向ければ、音が鳴る前に何か空中に打ち上げられているようだった。遠めで見ても、それが花火だとはおおよそのところ察しがつく。そして……花火が上がったとすれば、おそらく式典が始まったのか、あるいはこれから始まるのであろう。

「急がないと……」

気ばかりが先走って、自分の焦りを一層強まらせていく。――落ち着け。必ず着くさ。まだ式典は始まったばかりだ。メディオンが殺される予定の時刻まではまだ一時間少しはある。そのうちに着けばいいんだ。

自分で自分を励ましながらか、オレは足を進めた。もう帝都は、囲まれている山を迂回するように回っていけばすぐだった。さっきから息切れしていても休まず走っているせいで、走る速度がちっとも上がらなかったが、歩いているよりはいくらかましなので気にすることはなかった。

やがて右手に見えていた山が切れて、なだらかな平地が現れた。ぐるりと引き返すようにして囲まれている山々の間に入ると、辺り一面はでこぼこした丘陵地帯になっていて、所々に岩がむきだしになっている。そこはかつて、帝都がブルザムの古代兵器ワルキューレに襲撃されるのを阻止しようと、それに無謀にも戦いを挑んだ地であった。そして、丘陵地帯の先には、目指す目的地、帝都デストニアがある訳だ。

無我夢中で走ってきたオレは、さすがにこのでこぼこした地面で走るのはやめた。ここまでくると辺りにちらほらと人影が見える。おそらく港町デストニアから帝都へお祝いに行く民間人だろう。そいつらに不審に思われても困ると考えたからだ。

しかし、のんびり歩いていられる程でもなかったもので、早歩きでその場を去る。懐かしい風景に、オレはかつてのことを思いださずにはいられなかった。港町の方は変わらないだろうか。

遠巻きに、歓喜とも悲鳴とも似つかぬ人の声が風に乗って流れてくる。リユーンの宿屋の主人がすごいと言っていたことは、あながち嘘ではなかった訳だ。

オレははやる気持ちを抑えつつ、ようやく丘を登りきったところで一息ついた。人々の歓声は間近で聴こえるほどの大きさになってきている。ようやく目的地に着いた、という気持ちと、これから戦闘になるだろうことを予想してか、オレの心は緊張感に包まれる。こんな祝うべき時に何を緊張しているんだか、などと他人に悟られたら訝るかもしれないが、幸い、自分なんぞに目を掛けるような暇人はいなかった。歩いている人間は皆、一心不乱に帝都に向かっていて、まるでそれに吸い込まれていくようにも見える。

息が静まると、オレは再び歩き出した。もう帝都の門は目の前だ。がっしりとした鉄製の扉は今は完全に開かれていて、中の様子が多少離れている場所からもはっきり見える。その扉をたたえた、帝都を外敵から守る役目を果たしている城壁はその役目を十分に果たしていた。

門の両隣には軍の兵士が二人、帝都に入る者を品定めしているような目つきで眺めていた。フィートの話じゃ誰が計画加担者だか分からない様子だったし、ここから先は気を緩めずに進んだ方が賢明だろう。まさかとは思うが、もしオレの素性がばれていたら、それこそ王城に着く前に取り押さえられてしまうかもしれない。

オレはやや顔を俯かせながら、帝都の門をくぐった。早足をやめて、普通に歩いている速度で通過しても、門番の兵士はオレに対して咎めもせずに門を通らせてくれた。やや拍子抜けしたが、そんなことに気を配っていられる状態じゃ

ないのですぐに忘れた。

しかし、門までは無事に通り過ぎる事ができたが、そこから先はそうもいかなかった。

通りの端から端まで人の頭だけが突き出している状態で、しかも、普段は広いはずの中央通りは出店で一杯になっていた。それにより、歩ける道幅がかなり削られてある。そこに人がうじゃうじゃと押し合いへし合いやっているのだ。こんなとこ通っていたらそれこそ、メディオンが殺される予定の時刻までに城に着けそうもない。

そして、町じゅうあちらこちらで、切り花やら色紙を切ったものやら、テープやリボンやらが上空から舞うように降り注いでいる。それは、通り脇の民家の窓から上体だけを覗かせた人が笑顔を振り撒きながら投げている、さながら帝都の町はお祝いムード一色と化している。あんな圧政を敷いた皇帝を祝うなんて、とてもじゃないが考えられないが、しかし……とんでもない祭りだな、こりゃ。

がむしゃらで歩くオレの頭にはいつしか紅いリボンやら切り花やらが落ちてきていたが、そんなものを取り除く余裕もないのでとりあえず無視する。

オレは両手で人を掻き分けながら中央通りを進んでいった。時折、掻き分けた人から不満の声が耳に届いたが、幸いぐっかかってはこなかった。疲れてぐったりとなってきた両腕を鞭打つように働かせ、なんとか通りの半分まで歩いてこれた、と思った瞬間。

どこからか高らかに鐘の音が響いてくる。そして、通りにひしめきあっていた民衆は一斉に、中央通りの一角に置かれてある柱に顔を向けた。あまりにも周りの動きが同じなものだから、つられてオレもその柱を見ている。

何があるのかと思っていたら——柱にあるのは、それに食い込まれるような形で埋め込まれた大きな時計だった。ややそれから離れているオレから見ても、その時計が高価な物だと見てとれた。精巧に描かれた綺麗な模様が、時計が埋め込まれてある場所をなぞるように柱に描かれてある。そして、時計の丁度12時を差す場所には、大きな宝石が埋め込まれてあり、太陽の光に反射してはまばゆい光を放っていた。

何だ時計か、と思って首を元に戻そうとした矢先——慌ててもう一度時計を見れば、その針は11時少し過ぎたところを差していた。——11時?! あと20分後に皇帝の話が始まっちゃうじゃねえか!!

時計に見入っている民衆を、今まで以上の力を出してオレは先へと進んでいく。……冗談じゃない。ここまで来て目の前で殺させてたまるか。

幸い、他の物に目移りしている民衆の間を抜ける事は楽だった。

ようやく人ごみから脱出し、オレは走って城の門を目指す。駆けてくるオレを見て、城門に配備されている兵士は、何だこいつは、とあからさまに嫌悪を示した視線を投げかけた。とりなすように、オレはフィートから預かった「帝国所属承認証」を見せた。

「こいつの代理で頼まれてね。中に入れてくれないか？」

軍の兵士二人は、オレが突き出した紙をまじまじと見て、

「この者に頼まれたと言われる証書がないと、今は中に入れることは出来かねますが……」などと役人ぶった返答を返してきたので、オレはむっとしてつい怒鳴るような声を出してしまった。

「そんなこといちいちやられるか！ こちとら人の命がかかってんだ、あんた達と付き合っている暇人じゃねえんだよ！」

と言い捨てて、オレの怒鳴り声に呆気にとられている兵士の間をすり抜けて門を通過した。追ってくるかな、と思い、ついと後ろを振り返ってみたが、兵士二人は追っかけてくる様子もなく、そこに茫然と立ち尽くしていたままだ。どうやらオレの怒鳴り声に魂が抜けてしまったかのようだった。

そのまま走って、テラスのある中庭を目指す。正面庁舎の入り口を駆け込むように中に入ると、人の話す声が聞こえてくる。軍事院側へと通じる廊下を進めば、右手に大きな木製の両開きの扉が見える。

ためらうことなくオレはその扉を開けた。

一瞬、外から流れ込む日の光に目を細めながらも前を見れば、辺りを見回すことができないほど、ずらっと横一列に並んで置かれてある椅子に座っている民衆の行列がいた。確か……フィートの持っていた計画書には、民衆の居る先には將軍らが待機している場所が設けてあって、その両隣に来賓者と貴族らが座っていた。そして、その中心にあるテラスに居るのが……。

オレは目を凝らして、中庭南端中心にある白いテラスを見た。今はその下——一階だ——に居る来賓者か貴族が祝いの言葉を述べている最中のような。計画書にあった『来賓祝辞』の項目のようだった。そして、テラス越しに見える三

人の人物の中、向かって左側にオレは焦点を合わせると、遠すぎてよく分からないが、金色の髪が、降り注ぐ太陽の光に照らされてきらきらと輝いている。何か反応したのか、少し顔を横に向けたせいで、オレの目にはっきりとその顔が映し出された。——メディオンだ。

オレの心はなぜか躍った。またしても胸にわだかまっている感情が溢れてきたが、今はそれに支配されている時間はない。中庭両脇を守るようにして配備されている兵士がオレに疎ましいような視線を投げていることもあり、オレは愛想笑いを浮かべながら中庭を辞した。

兼ねての計画どおり、テラス裏側に回らないとメディオンを救えそうにない。オレは正面庁舎から軍事院へ抜ける通路をわたって、二階に通じる階段を大急ぎで駆け上る。正確な時間が分からないので、急がないと間に合わないかもしれない。自然に足は速度を増していく。

息切れをしつつようやく二階に辿り着いても、休む間もなくオレはテラス裏側へ回るために軍事院の通路を中央院に向かって走る。ここの通路はなぜか中庭に面しており、向かって左側——城の外側に位置している——に部屋が設けられていた。万一城壁を越えて敵が侵入してきても、対処できるようにそうなっているのだろう。内側に面した壁には中庭がよく見えるようにとの配慮なのか、窓で殆ど覆われてある。

縦一直線に伸びたその長い通路を、右手に見える中庭の状況を確認しながら走っていくが、軍事院から中央院に抜ける直前の扉が固く閉ざされていて、そこから先へは進めそうになかった。こじあけようにも、鍵がなければ無理のようだ。皇帝や、王子が居る場所に誰も近づけないよう、こうした処置を施したのだろうが、今になっては障害物の一つにしかならない。……なんてこった。こんな所で足止め食らうなんて、予定にはなかったぞ？

オレは力づくで鍵を壊そうと扉に体当たりしたが、びくともしないそれに再びぶつかっていくような力はもうなかった。

「くそっ……どうすればいいんだ……！」

扉を目の前にしてオレは何をすればいい？

目的地にあたるテラスは、今オレが居る開かずの扉のちょうど真横にある。窓からテラスまでの距離は、目検討でも有に7メートルはあるだろう。窓に寄って見ればメディオンの横顔が見てとれるが、オレの視線に気付いた様子はない。そして、オレは今居る場所から正反対に位置する、正面庁舎の屋根に視線を移動させると——いる。頭しか今は見えていないが、どうやら予定通り暗殺者を二人配置しているようだ。やや視線を上越しにずらさない限り、彼らの姿を見る事はできない。まさに絶好の暗殺場所ってところか。

などと悠長に考えている暇なんてない。どうすればいいんだ……！ 目の前にしてオレはメディオンが死ぬ場面を傍観しなけりゃいけないのか？

などと思った瞬間。

「それでは、これよりデストニア帝国皇帝、ドミネート様より感謝のお言葉を賜ります。一同ご起立下さい……」

と、司会の声の中庭じゅうに響いた。——まずい！

屋根の上に目を滑らせれば、計画書に書かれてあった通り、屋根に待機していた二人の人間が姿を現して、屋根の上には何かを固定させようとしている。——ボウガンだ。

もう後にも引けなくなってしまう。この状況を見て、考えられる方法は只一つ。……ここからテラスに飛び込むしかない。

オレはその真横にあたる窓を全開に開けて、その軌道となる位置に当たる部屋の扉を蹴破って中に入る。館全体に誰の気配も感じなかったのと同様、侵入した部屋の中は細々とした家具と、少ない調度類しかなく、誰も中にはいなかった。客間のような。

ありがたい。そう思いオレは部屋の中を走り、一番端の壁に張り付くようにして立つ。窓の先にあるだろうテラスの状況はこの位置から見ることにはできない。胸の中が緊張と焦りに包まれる。見えない以上、あとは聴覚だけを頼りにするしかなかった。

立てと言う司会の言葉に従って、中庭にいる全員が立ったような音が、部屋の端にいるオレの耳に届く。そして、「ご着席ください」と、再び司会者の声。その声に反応して、人々が再び椅子に座る音が響いてくる。

そして、そのざわめいた一瞬に、何かから、と窓から光が差し込んだ。太陽を反射させてできたような、ある意味この場所には不自然な光。——鏡か？

その光は一階左方向からやや斜め右上に向かって差し込んでいるようだが、どこから発せられてるかまでは分かりそ

うにない。……光？

光と思ってピンときた。……まさか、これが合図だったら？ あの書類に書かれてあった『合図を目標に相手を射る』ってこれのことじゃあ……！

四の五の言ってる暇はなかった。——オレは足に力を込め、助走つけずにいきなり全速力で窓に向かって走っていく。

部屋を出てすぐ、オレは暗殺者側の方を目だけ滑らせるようにずらして見た。いつの間にか屋根に固定させたボウガンの照準をメディオンに合わせていた暗殺者らは、体をかがめ、もう今にもあのよくわからない矢ともシェルとも似つかぬ物を撃ってきそうだった。

オレは走りながら肩に背負った剣を抜いた。——全開に開いた窓を蹴飛ばすその一瞬、声の出る限りオレは叫んだ。「メディオン!!」

その声に彼が振り向いた瞬間、オレの足は窓の棧から離れ、次の瞬間には宙にその身を投げ出していた。

首を右に向ければ、暗殺者らは第一撃を放ってきたところだった。軌道を外すことなく、それはメディオンへと向かっている。

しかし、自分が窓から飛び込んだ方が、矢を撃った奴らよりわずかに早かった。速度をつけて飛んただけあって、途中で落下することなく、オレはテラスに上体から落ちる格好で突っ込んだ。衝撃をやわらげるために、着地と同時に手を床に当てて体をくると一回転させる。辺りに目を配る間もなく矢の軌道をなぞってみれば、放たれた矢はメディオンの頭を確実に狙って、こちらに向かって徐々に近づいている。オレは右手に握っていた剣を構えた。

「ジュ、ジュリアン——？」

後ろ手から聞こえるメディオンの声に、反応する暇なんぞないオレは剣を振るって、一撃目に放たれた矢を正確に打ち返した。空中に放られた矢は、行くところを失ったように見えた後、導火線の火が火薬に点火したのか、雷弾部分が一瞬光を放ったかと思うと、爆発音が辺り一面に響いた。

今まで、何が起きたか分からない様子だった中庭に集まっている民衆や貴族は、その爆音をきっかけに悲鳴を上げた。入り口の方角へと去っていく人影も見える。軍の間人は混乱しながらも、それを何とか抑えようと何人かが入り口のほうへと向かっていくのが見えた。

オレのちょうど横には、ドミネート皇帝が茫然としたまま立ち尽くしていたが、こいつを狙っての犯行ではないことを知っているオレは、メディオンの前まで体を移動させ、彼を守る姿勢をとった。第一王子マジスティはというと、いつの間にか姿が見えない。もしかしたら父親を置いて逃げちまったのか？

続いて二撃目が襲ってきたが、どちらが放った矢もオレがあっさりと打ち返しては、矢は空中で爆発して四散した。

こちらもやられてばかりはいられない。まずは矢を撃ってくるこいつらを何とかしなければ逃げる事はむずかしそうだ。万一逃げようとしても、その行為に及んでいる際にメディオンが撃たれたら元も子もない。牽制して、その後に逃げた方がいいかもしれないな、そう判断したオレは、剣をまっすぐ差し出した体勢のまま呪文を唱えた。

ボウガンは前にも言った通り、矢を一度撃ったら次の矢を装填するのに時間がかかるのだ。戦闘時にはあまりお勧めできないが、獲物を狩ったりする時には大いに活用できる。メディオンを殺そうと考えた奴らもそこを狙ったのだろう。一撃で倒せたらそれまで——そう計画していたことが、オレという予期しない人物が現れたために、脆くも今それは崩れ去ろうとしていた。

オレはふと、メディオンのいる後ろを振り向いた。彼は逃げもせず虚ろな瞳でこちらを見ていた。オレを見ているのではなく、その先を見つめているような、どこか気の抜けた感じだった。

「メディオン！ 逃げるんだ、ここに居てはやられちゃうぞ」

しかし、オレの言葉に反応する様子はない。完全に心ここに在らず状態のようだ。

呪文を唱え終わったオレは、再び前を向き直り、剣で狙いを定めた後に降雷撃(スパーク)の魔法を放った。何せ相手が遠すぎるために、殆ど当たる事はないだろうが、相手は一瞬怯んでしまうだろう。その隙をついて逃げるしかない。

オレはフィートに貫った、銀色の玉を取り出した。——どうやら役には立ちそうだな、感謝するぜ、フィート。

呪文を解き放った後、オレは否応なくメディオンの手を取った。

「逃げるぞ」

そう言い捨てて、彼の手を握っていないもう片方の手でオレは銀色の玉を床に当てるようにして投げた。

床にぶつかったと同時に、破裂した玉は白い煙を瞬時に吐き出して、辺り一面を包み込んでしまった。これなら奴らは矢を撃ってこられまい。狙う目標がどこに居るか分からないし、皇帝に当てる訳にはいかないと考えるはずだ。帝国の人間なら尚の事だな。

オレは煙の中、再びメディオンの方へ向き直り、彼の顔を覗き込んだ。端整な顔立ちは一年前に別れた時のままだ。「しっかりしろ、メディオン！ オレのことを少しでも憶えているんだったらここからすぐに逃げるんだ。奴らはお前のことを狙っているんだぜ」

オレの声にいささか反応を示した彼は、わずかだが頭を縦に振った。——よし。頷いて、中庭の方角に体を向ける。ここを抜けるには、テラスを飛び越えて一階に降り立った後、走って脱出するしかない。城内からテラスに通じる扉が閉まっている以上、城を歩き回って逃げる方法はできないからだ。

「メディオン、オレの声に合図したら飛ぶんだ、いいな」

言い放って、彼の返事を待たずにオレは駆け出した。

「え……？」

メディオンの当惑した声が耳に届いたが、この煙がいつまでもつか分からない以上、一刻も早くここから逃げた方が賢明だ。オレは走ってテラスにある、申し訳程度に置かれてある手すりに足をかけた。

「メディオン！ 飛ぶんだ!!」

その合図に彼が手すりを越えて宙に浮かんだ瞬間、テラスを包んだ煙の有効範囲内から先に飛んでいたオレは脱出していた。着地する場所は軍関係者らが配置されていた場所のようだ。正装をした、將軍らしき人影があちこちに窺える。そして、彼らの焦点は、いきなりテラスから落ちてくるオレ達に向けられていた。

幸い、椅子と椅子の間に割り込むような形で地面に着地したオレは、手を引いた後から、着地の態勢をまるで取っていないメディオンを抱えるようにして受け止める。ずしっと足に痛みが走ったが、気にする余裕はなかった。彼の足を地面に着かせ、オレは再び手を握る。

「ジュリアン……君が、何故ここに？」

オレを真剣な表情で見据えたメディオンが、たどたどしい言い方で話し掛けてきた。——今頃そんなことを言われても困る。ショックで気が動転しているのかもしれない。

「話は後だ。今は逃げるぞ」

そう言って、オレは再び駆け出した。メディオンも遅れじと手を握られたまま、オレの後をついてくる。

「……メディオン様！」

どこからか誰かが、メディオンを呼ぶ声がしたが、反応している時間はない。一刻も早く、彼をここからなるべく引き離さなければ。

メディオンはその声が聞こえたかどうか分からなかったが、彼は立ち止まろうとはせず、走る速度を落とす事はなかった。

オレとメディオンは、逃げようと必死になって入り口で押し問答している民衆達に紛れ込むような形で中庭から出た。気を緩める暇もなく、城内を飛び出してそのまま帝都に向かう。中庭から押し寄せてきた民衆の姿を止めようともせず、城門を守っていた先程と同じ兵士二人は、何があったんだろう、と思っているのか顔を見合わせていた。

賑やかな帝都に入っても、オレの心は緊張していた。

なるべく早く、ここから離れた方がいい。帝都にいては、メディオンの顔を知っている者も多いだろう。居続けたらいずれ彼を追ってくる奴らに見つかってしまう可能性もある。とはいえ、多少離れた港町まで行ったとしても同様だ。帝国領域内でもここからは多少離れた町か村に行かないと安心できない。となると——

「……メディオン。帝都を抜けてバルサモに向かうぞ。あそこなら追手はそう来ないだろう」

オレは彼の方を振り向かずにそう言った。バルサモまで行けば、追手もそこまでオレ達が逃げたとは思うまい。そうすれば逃げ切れる時間が稼げると踏んだからだ。

返事が来ない。慌てて彼の方を見れば、メディオンは目を閉じたまま、オレの手に引かれて歩いていた。それはまるで今起きた、自分が狙われているという事実から目を背けようとしているように、オレには見えた。

「メディオン？」

「……ええ。そうしましょうか」

問い返した彼に、慌てて彼は、軽やかな口調で返事をしたが、感情は一切こもっていなかった。

オレはメディオンの手を引いたまま、帝都の門をくぐってバルサモへと向かう街道を歩いていく。

——手を引かれている彼は終始無言だった。

その手から感じる彼の温もりは、オレの心を更に揺さぶらせていった。

抑える事のできない感情。

あの時一瞬、素直に自分の気持ちを認めたように。

“——愛してるって、こういうことなのか。”

「……一体どういうことなんだ？」

部屋に入ってきた男が放った第一声はそれだった。やや顔を紅潮させており、頭に血が上っているのは一目見たら誰だつて分かるだろう。話を振られた、部屋で報告を待っていたもう一人の男は、額に汗を浮かべながらも部屋に入ってきたほうの男を説得しようと、頭にいくつか詫びめいた言葉が浮かんだが、言った所で通じないのは分かっていた。

その後の式典は滅茶苦茶だった。メディオンを殺そうとした目論見は一瞬にして敗れ去り、それに恐怖した民衆や貴族はこぞって中庭から逃げ出す始末で、城内は瞬時にして地獄となり、華やかな祝賀祭は一変して混乱の渦中に陥ってしまったのだ。それを抑える事は軍でさえできなかった。

皇帝も第一王子も、混乱に巻き込まれることなく無事ではあったが、何が起きたのか分からないようではあった。おそらく二人とも、内心こう思っているのだろう……。

『何故現皇帝ではなく、第三王子を狙ったのだ？』と。

——その第三王子は今、いきなり計画を阻止した闖入者と共に逃亡を図ってしまい、今現在何処に居るのかはまだ分からない。

その闖入者の素性がまるで分からないからだ。瞬時にして現れて、殺すべきメディオンを救える人物など、そうそう当て嵌まる輩は居ないはずなのだ

が、何分突然のことだったのと、相手の顔はどちらも見れなかったのが災いしていた。

そして、何故計画の事を、その者が知っていたか——

部屋にいた男は頭の中でしきりにそう呟いていた。

「……どういうこと、と申されますと？」

うそぶいても仕方がないが、こう返答を返すのが精一杯だった。

「どうもこうもない。計画は破綻され、挙げ句に狙った獲物は逃亡を図りおった。この始末をどうしてくれるつもりだ、ロンメル隊長」

ロンメルと呼ばれた、最初部屋にいた男は、今入ってきた男から遠ざかろうと、一步後ろに下がった。目の前の男に威圧感を感じ、思わず冷汗がにじんでくる。

「今配下がメディオン捜索に出ております故、今暫くお待ちいただければ、彼の者の居場所を突き止めて、その場で血祭りにあげてご覧に入れましょうぞ」

やや作り物の笑顔で答えたロンメルだが、その顔は頬がひきつって、不自然なことこの上ない。

男はそれに対して別段気にした様子はなかったが、後ろ手で扉を閉めると、わずかに首を横に振った。そして、

「分かっているいな……」ぽつりと呟く。

「は？」

ロンメルは拍子抜けをしたような声を出した。

「計画が失敗に終わった事を、一方的にお前のせいにしてる訳ではない。私がお前に聞きたいことは只一つ。——メディオンを救いに来た男は、一体どこでこの計画を知ったのか、それなのだ」

もしかしたら、あの書類を盗んだ、フィートという男と接触した人物がいるのではないのか？

男はそう、心の中で付け足した。

ロンメルは、男からの問いに一瞬考え込んでいるような仕草を見せた後、額に手をあてたまま、

「……やはり、あなた様もそう思っておられましたか。——書類を盗んだ奴と、最初に接触を持った仲間はそいつに殺されてしまったので盗んだ奴と接触を持っていたい人物が居るかは分かりかねますが……」

申し訳なさそうに首をうな垂れて答える。

「盗んだ奴が最後にいた場所は？」

間髪を入れずに男が問い返す。

「……ここからかなり西にある、カシナート国の交易都市リユーンにいたと報告されておりますが」

——リユーンで接触を持った人間がたとえここまで来ようとしても無理だったはずだ。何故なら、リユーンから書類を携えて戻ってきた者達が、通り過ぎた後に、西の街道を土砂崩れを発生させて封鎖したのだから。

その理由は万一、我々の仲間が書類を奪還するという理由で、西に出向いていたことが第三者にばれそうになった時

の為の、保険のようなもので仕組んだ事だった。

書類を取り戻すためにロンメルが向かわせた仲間は6人居た。6人は同じ使命を担って西に出向くという手筈を取らせて送ったのだ。だが、書類が今、何処にいるかわからない男を探し出して奪還するのが目的のため、幾日かかって戻ってこられるのか皆目見当がつかなかった。日がかかりすぎては余りにも帰りが遅い事を誰かが咎めるのではないかと、と思い、土砂崩れが起きた峠を越す事ができなかったから遠回りをして遅くなった、という理由をこじつけたのだ。峠を越せば他国領へ入るその街道は、西大陸を歩き来するにはデストニアにとって一番の近道として利用されている。それ以外に街道は何箇所かあることはあるのだが、利用していると遠回りになってしまい、デストニアに着くのが幾日か遅れてしまう。その日数を逆に利用したのだった。崖崩れという名目を立てて。

「リューンから来たとすれば.....書類奪還をした日から数えて七日で着いたと言うのか？ いくら何でも無理があるのではないかな？」

「無理でしょう。第一、崖崩れがあったのですよ？ よもや、我々の仲間より先に帝都に着いていた筈は在り得ませんし.....」

その通り。もし、書類奪還した者達より早く帝都に着いているのならば、メディオンを前日までに城から逃げさせる行動に及んだだろう。敵を知ることも肝心だが、狙われている者を救うのが先決だと誰しも思うはずだ。

「だとしたら、一体誰なのだ？ まさかとは思いますが、アスピニアのシンビオスではあるまいな？」

シンビオスは今、フラガルド次期領主という重荷のためにそうそう出歩く事はできないと耳にしていたが.....。

「違いますよ。我々の仲間から確認させましたが、アスピニアのシンビオスは一步も共和国を出た形跡はないとのことですし、彼を見たという情報は入ってきておりません」

それなら.....。

男はふと、もう一人、メディオンの仲間が居たような気がしたが、それが誰なのか思い出せなかった。

何故だろう？ シンビオスの他にもう一人誰か居たはずだったと思うのだが、どうして覚えていないのだ？ 気にかかるに値しないような人物だったのだろうか？

男が考え込んでいる時に、部屋の窓をこつこつと、わずかに叩く音がした。ロンメルが素早く立って窓を開ければ、窓のへりに鳥が一羽とまっている。足元には紙切れがくくりつけられていた。伝書鳩だ。

彼はそれを鳥の足から外して、鳥を外へ飛ばしつつ中身を改めてから、窓を閉めて男の方へと向き直った。

「駄目ですね。第三王子の姿は港町や帝都にはいないようです。——おそらく、救いに来た男と遠くへ逃げてしまったようです」

やや失望した言い方だった。しかし、男は希望を捨てていない。

「今から人足で歩いたとしても、そうそう遠くへは行けまい。帝都の周りにある町や村、片っ端から探し出してその場で抹殺すればいい。帝国外へは絶対に脱出させるな。いいな」

最後まで諦めようとしないうちの男の姿勢を見て、ロンメルは深く頭を下げた。私は絶対、この方についていくのだ——そう決心しながら。

「仰せのとおり。——それにつきましては、皇帝やキャンベル殿の方、どうぞよろしく願いいたします」

彼が言った言葉に、男は当惑した素振りを見せた。

「皇帝はいいとしても、キャンベルの方がどういうか.....」

キャンベルはもう今にでも、帝都を出てメディオンの後を追いたいと言っているのだが、彼がメディオンの側にいると後々厄介になりかねない。多少足止めを食らわせているうちに殺せば事足りるだろう。素性の知れない闖入者のほうが、我々の素性がばれにくいからだ。

「.....できうる限りの処置をしておくことにしよう」

「はい。——それでは私も、この辺で行かせて頂きます故、失礼いたします」

「ロンメル隊長も行くのかね？」

男はやや驚いた様子で言った。目の前の男は仲間を総括してばかりで、今まで一辺も行動した事がないからだ。

「はい。自らの汚点を果たさなければ、再び帝都の地を踏む事はできませんから」

この男が忠義心に厚いのは、計画を共に進めていくうちによく分かっていた。だから、

「——そうか。よい知らせを待っているぞ」

と男は言った。ロンメルはそれに対し再び深々と頭を下げ、

「一命に代えましても」

そう言い残して彼は部屋から辞した。

晴れていた空が、いつの間にか灰色の雲で覆われ始めてきた頃だった。

「……………」

帝都を出て、どれくらいの時間が経った頃であろうか。

空はいつしか、灰色の雲で覆われていて、夕日の光も照らさない、平地に伸びた街道を、オレとメディオンは歩いていた。

……いや、正確に言うとオレ一人歩いていた後を追うように、メディオンがついてきている、と言った方がいいかもしれない。

帝都を抜けた後も、こうしてバルサモに向けて歩いていても……彼は、何も答えない。喋らない。だんまりを続けたままで、いい加減うんざりしたオレは、つないでいた彼の手を引き離すようにしてほどいてしまった位だ。

「メディオン、一体どうしちゃったんだ？ 一年前のあんたはそんなにむっつりな性格じゃなかったと思うぜ」

精一杯の皮肉を言ったつもりだった。

しかし。彼は何も言わなかった。ただ、首を左右に振っただけで……。

「そんなにショックが強かったのか？ おい、答えろよ」

それでも、彼は首を左右に振っただけだった。何を表しているのか全く分からない。いい加減こっちはうんざりしてきていた。

「何で喋らないんだ、何か言ったらどうなんだよ！」

詰まっていたものが一気に流れ出す。

オレはこんな奴を救いにここまで来たのか？ 数々の犠牲を払ってまで助けた代償はこれっぽっちなのか？ そして——オレは、こんな奴を……。

胸が詰まる。数々の想いが交錯する、わずかな時間。

結局メディオンは、何も答えようとしなかった。そして——オレが話しているときも、決して瞳を合わせようとはしない仕草に、心は次第に冷めていく。

「……好きにしろ」

ぶいと前に向き直り、すたすとオレは早足で歩き始めた。彼は一応ついていくか、と思っているのか、少し遅れてオレの後をついてきている。早足で歩いているオレとの間隔が、少しずつ離れていった。……そして、今に至る訳だ。

やがて辺りは、夕陽の紅い光が照らされることなく闇に包まれていく。雲は夜になっても空を包んでいるようで、月の光を当てにすることはどうやら無理のようだ。

オレは荷物からランプを取り出した。以前使っていたランプは崖崩れの際に失くしてしまったが、メディオンを連れて帝都に戻った時に慌てて購入したものだった。備えあれば憂い無しとはよく言ったものだ。

オレは歩いていた足を止め、地面に腰を落としてランプの芯に火を点けた。瞬時にしてランプの周囲が明かりで灯され、視界が広がっていく。

片手にそれを持って立ち、オレは通ってきた街道の方を振り向いた。

何だかんだ言っても、メディオンを気にしている自分に呆れつつも、

「……メディオン？」

やや抑えた声で呼ぶ。

しかし、彼の姿はおろか、返事すら——喋らないからこれには期待していなかったが——返ってこない。ふと、不安が頭をよぎった。明かりが効いている範囲の外は真っ暗でもはや何も見えないのだ、こんな時にメディオンの身にもしものことが起こったら——そう思えば、オレはもう走り出していた。

「メディオン！」

叫びながら歩いてきた道を引き返せば、ちらっ、と闇の中にランプの光を反射するのが見えた。慌てて走ってきた足を止める。——それは、メディオンの金色の髪が、ランプの光に反射した、淡い光だった。

彼は全体的に黒ずんだ鎧を身に着けていたので、今は闇と同化していて見分けが殆どつきにくかったが、彼の髪だけは違っていた。光を宿したその髪は、闇の中で唯一、彼の存在を示すものだった。

メディオンはオレからかなり離れて歩いていた。それでも街道筋からずれていないところを見ると、もはや闇に目が慣れてしまったのだろう。とぼとぼと頼りない歩き方で、オレの後をついてきていたのだ。

ほっと胸をなでおろす。

「こんな所にいたのか？……まったく、心配かけさせんなよ」

彼の顔をよく見ようと、ランプをやや上手に上げれば、やや伏し目がちな表情でオレの方を見ている。光に眩しそうに目を細めている訳ではなかった。

「ほら。——行くぞ」

そう言って、再び手を握る。……まったく、ついていけねえぜ。

と心の中で悪態ついた時だった。

「……来てくれると思っていたよ。ジュリアン……」

ぼそりと、耳を傾けていなければ聞こえないほどかすれた声で、メディオンはようやく声を出した。そして——握っているオレの手を強く握り返してくる。

いきなりのメディオンの行動に、オレの心は激しく高鳴る。

彼の眩いた言葉に、気付かないような素振りをするのが精一杯だった。

と、その時。

今まで平気だったオレの右足に、急に激痛が走った。その痛みに一瞬感覚が麻痺してしまい、足がもつれる。

「っ……！」

走ったせいでどうやら今になって、無理しつづけてきた足が悲鳴を上げ始めたようだ。テラスから降り立った時、落ちてきたメディオンを抱きかかえた、その時ずしっと走った足の痛みが再発してきたのだろう。

手を引っ張って、先を歩いていたオレがよたついたのを、メディオンが見て咎めないはずはなかった。

「ジュリアン……？」

何だ。——ようやく今になって口を開こうって気になったのか。

と心の中で呟く。今は悟られてはいけない。

「な、何だ、メディオン。ようやくオレの名を呼んでくれたな。何があったのか知らんが、口を割る気になったのかい……」

激痛で頭がくらくらする。しかし、ここで倒れている場合じゃない。

こいつを守るって決めたんだ。——やっと分かった自分の気持ちに、もう嘘をつくことは無意味だから……。

「だ、だって……きみが何だか歩いていてふらふらしているから、何かあったんじゃないか、って思って……」

しどろもどろにメディオンが答える。——一年ぶりの再会があんなだったから、声をかけ難いのかも知れない。

「どこがふらついてるってんだよ。お前の頭がふらついてそう見えるんじゃないのか？」

後ろを振り向きながら、悟られないよう彼に笑顔を見せたが、痛みには耐えられず、やや苦痛に顔を歪ませてしまった。案の定、メディオンは気になる様子でオレの隣に並ぶと、よたついているオレの右足を見て、

「ジュリアン……足が、痛いのかい？」

心配そうな表情を向ける。

「足なんて痛くないさ。気にし過ぎだぜ」

この状態で何を言っても無駄だと思っていたが、こいつにだけは知られたくなかった。何としてもバルサモには着かなければ。いつ何時、追っ手がやってくるか知れないのだ。

「そんなに足引きずっているのはおかしいとは思わない、なんて思っただろうね？……足を見せてくれ。ジュリアン。少し足を止めて」

「嫌だね」

間をあげずにオレは答えた。こんな所で足止めされてたまるか。

「どうしてだい？」

並んで歩くオレの顔を窺うように彼は言った。真剣な眼差しはオレの瞳を捕らえて離さずに、しばしオレとメディオンは見つめあいながら歩いていた。

——やりきれずに、オレは彼の視線から目を逸らし、

「……こんな所で時間食ってたら、バルサモに着く時間が遅れちゃうからさ」

やや頬が赤くなっている自分に自覚しつつ、オレは顔をメディオンから背けた格好で言った。

「しかしだね……」

「余計なお世話だ」

喋ろうとしたメディオンの声に重なるようにして、オレは言い放った。

やや突っぱねた言い方に憤慨したのか、それ以上メディオンは何も言おうとしなかった。ただ、オレが右手に持っていたランプを、やや奪うようにして取ると、

「落としそうですからね。私が持ちましょう」

と言い、片手にランプを持った。もう片方の手はオレの片手に使われている。

「.....ああ」

もはや言い返すこともままならない位に、激痛に悩まされていたオレは、それだけ言って歩く事だけに専念する。隣で歩くメディオンは、しばしオレの顔を見て、様子を案じていたようだったが、やがてふと、前方の方角を見て、

「.....余計なお世話、か」

——見れば、悲しげな表情を浮かべて、そう呟いていた。

やがて遠巻きに、町の明かりが平地の彼方に、ぼんやりと浮かび上がってきていた。どうやらバルサモの町が見えてきたようだ。

気力を振り絞り、オレはメディオンの手を引いて一步一步街道を進んでいく。右足はとうに麻痺していた。左足に重心をかけて歩き、攀ったみたいに全く動かない右足を引きずるようにして進むという、無茶も甚だしい歩き方だったが、町を目前にして行き倒れにはなりたくなかった。

そして、何よりも——、オレの隣で、ちらちらとこちらを窺っては、オレのことを案じているような目つきで見ているメディオンの身を守るという使命を担わされた以上、途中で放り出すなぞオレ自身が許さない。

苦心しながらも、ここまで辿り着き、無事救出することまではできたんだ、後はこいつを安全な場所へ送り届けなければならない。.....安全な場所、てのはやはりアスピニアか？

「.....メ、メディオン...」

「何です？」

呼ばれてすぐに彼はオレの方へ顔を向けた。

「お前が、帰る場所はアスピニア.....だよな？」

今度はすぐには反応しなかった。

「え.....」

当惑したような声を洩らした後、メディオンは口を閉ざしてしまう。

肩がわずかに震えている。肩当て(ショルダーガード)を通して分かるくらいの身震いをしている彼に、思わずこちらが戸惑ってしまった。

——泣いているのか？

と思い、彼の顔を覗き込もうとした時、体勢をずらしてしまったせいで重心がずれて無理な力が左足にかかってしまう。慌てて身を起こそうとした矢先、麻痺した右足の足首をひねるようにして曲げてしまった。

途端、麻痺して感覚がないにもかかわらず、右足から全身に行き渡るような鋭い痛みが走る。

「ああ.....っ！」

呻いたような声を突然出したオレに、隣で肩を震わせていたメディオンは何事かこちらを振り向いた。

オレは左足に重心を戻そうと努めたが、無理だったようだ。

倒れる間際、彼を巻き込まないよう手を離して、オレは地面に前かがみで倒れていく。

「ジュリアン！」

メディオンは、叫ぶようにオレの名を呼ぶと、かがんでオレの顔を覗き込んできた。

「.....大丈夫ですか？」

おろおろしている風でもなく、落ち着き払った言い方だった。しかし、本当に驚いたらしく、片手を胸に当てて呼吸を整えようとしている。

オレは苦笑を浮かべて、

「.....当り前だ。こんな所でくたばってたまるか」

精一杯の強がりを吐き、左足に力を込め何度かよろめいたものの立ち上がることができた。そしてまた歩き出す。目的地であるバルサモの町は、もはや目の前にあった。町から溢れる光がまばゆく感じられる程まで近づいていた。もは

や足は棒のようだ。

すると突然、隣で歩いていたメディオンが先頭に立ったと思いきや、

「私、先に町に行って、泊まる部屋確保してきますね」

と言って走り出した。……おいおい。お前自分の立場分かって言ってるのかよ…。

「メディオン！ 今のあるたの置かれている状況を知っていて言ってる訳じゃないだろうな？」

「分かっているつもりです。あなたは倒れないように、足を気遣いながら町まで来てくださいね」

そう言い残して、彼は先にバルサモへ行ってしまった。——冗談じゃない、ここで目を離した隙に、奴らに見つかって殺されてしまったら、オレの立場はどうなるんだ！

彼が言った言葉を完全に無視し、足に負担をかけている事を自覚しつつも早足で歩いたオレが、彼が町に入って15分は経ったであろうか、という頃に遅らばせながらもようやく、バルサモに到着する事ができた。

バルサモの町に入るのは初めてだったが、何分、着いた時間が時間だけに、周りに置かれてある住居は全て戸が閉まり、家の中のみを照らしているぼんやりとした明かりが灯っているだけで、町の外観は分かりにくい。木製で建てられた町の外壁は頑丈そうではあるが、決して多勢に耐えられるほどの防御力を備えている訳ではないだろう。

向こう側から、わだかまった建物の屋根を通してかすかに光が見える。おそらく宿屋か酒場だろう、そう判断したオレは、右足をひきずりながら痛みをこらえて歩いた。

町の中ほどまで歩いた時、ふと周りが開けたと思えば、町の一角が広場のようになっている。中心には何か儀式を行うための祭壇が設けられていた。周りに煤けた木炭の破片が散らばっているのを見ると、護摩を焚く祭壇のようだ。

「ジュリアン」

歩く方向左側に目を向けていたオレは、突然名を呼ばれて振り向いた。

メディオンが、町の一番右端に置かれてある建物の前に立っている。どうやらそこが宿屋のようだ。

「メ……」

振り向きざまに、足を彼の立っている方向へずらそうとした途端に、左足の力が失われ、気がついたら地面に転んでいた。——宿に着いたと思っただけで、今まで保っていた気力が吹っ飛んでしまったようだった。

「大丈夫ですか？」

慌てて走って、オレに駆け寄ったメディオンは、オレの肩を抱くようにして体を引き上げてくれた。右足はともかく、左足すら感覚がない。まるで酔っ払った人間のようだ。

「……すまん」

ぼそっと口にしたお礼の言葉を彼に聞こえたかどうかは分からなかったが、彼はオレを担いだまま、宿の入り口の扉を開けた。そののすぐ横の壁にはプレートが埋め込まれてある。隣に設けてあるランプの明かりで見ることができるそれには、「あなぐら亭」と書かれてあった。

「二階の一番右端の部屋をとっておきましたから」

宿の一階は薄暗くて殆ど中を知ることはできないが、カウンターの前には明かりがついている。窺い知ることはできないが、おそらく宿の主人が起きているのだろう。

「……もう大丈夫だ。すまないな、メディオン」

オレを担いだまま階段を上がるのは難しいと思い、再び気力を振り絞って左足に力を込め、彼の肩から離れる。どうにかこうにか立つことは出来たが長くは持たないだろう。

オレとメディオンは階段を上って二階に着いた。休みたい、とはやる心を制しながら右端の部屋の前に着く。

扉の鍵を彼から受け取り、鍵を鍵穴に差し込もうとした時だった。

メディオンは控えめな笑顔でオレに向け、

「……それじゃあ、ゆっくり休んでくださいね」

と言った。

ああ、と言おうとした口が、何故か寸前で止まる。

「お前の借りた部屋は隣なのか？」

——当り前の事なのだが、聞いておこうと思っただけだ。他意はない。しかし、彼は首を振った。

「いえ」

「……じゃあ、一緒の部屋なのか？」

どうしてか、その問いに動悸が早くなる。

「そこは、ジュリアンの借りた部屋ですから」

オレの問いをまるっきり無視して、彼は笑顔のままそう言った。

「.....どういうことだ？」

心なしか、声に冷たさがこもってしまった。嫌な予感がする。

オレの目の前に立っているメディオンは、表情ひとつ変えないままこう言った。

「あなたは、ここで休んでいてください。——私はこれから帝都に戻ります」

「何だって？」

.....今、何て言った？

声を震わせながら言った、オレの表情はメディオンに対してそう訴えているのに、彼は笑みをたやさないままさらりと、

「私は帝都に戻ると言ったんです」

言っただけだ。——一瞬自分の頭がまっしろになる。何を言っているんだこいつは、と思えば、怒りが胸の奥から込み上げてくる。

「.....本気で言ってるのか」

「はい」

顔色一つ変えずににべもなくそう言ったメディオンを、オレは静かに見つめ返し、

「.....そうか」

鍵穴に差し込んだままの鍵をくるりと回して、扉を開けた。

——そして、空けた途端にオレは渾身の力を込めて、メディオン腕を取ったかみなかで、彼をドアの開いた部屋の中へと放り投げた。

「.....っなっ.....！ ジュ、ジュリアン?!」

おそらく——メディオンは、オレがこうするなど予想していなかっただろう。

不意をつかれた彼の体を、思いきりよく投げ飛ばしたせいで、体の軽いメディオンは勢いよく吹っ飛び、部屋の中央、古びたテーブルがある手前の床に手をつけて倒れた。オレはその隙に中へと滑り込み、後ろ手に扉を閉め、扉についてある掛け金を入れる。

パチン、と掛け金を下ろす音がするのとほぼ同時に、耐久力を失った左足がもつれ、オレは閉じた扉に凭れかかったまま崩れ落ちた。

「何をします、ジュリアン！」

顔を上げたメディオンは怒っているのか、オレのことを睨んだまま怒鳴ってきた。怒鳴りたいのはこっちだ！

「.....戻ってどうするんだ？　すごすご引き返して自分の命粗末にするのか？」

怒りを抑えて、やや低音の声でオレは言った。メディオンはオレを睨んだまま、

「あんな事になってしまったのは、私の責任です。——父上に謝らなければいけませんし、それに.....私は逃げたくなんかない」

「何甘い事言ってるんだよ!!」

ついに我慢の糸が切れたオレは怒鳴った後に、動かない足を引きずって彼に近いて、

「逃げたくないだと？.....だから、あの時逃げなかったのか？　オレがお前を助けようとテラスに飛び込んだ時も、あなたは逃げようとしなかった、それは自分が犠牲になれば、なんて考えていたっていうのか？」

声をやや震わせながら、オレはメディオンに言った。そう思っていて欲しくない、とどこか心の中で念じていた。

しかし、——彼は首を縦に振った。

「そうです。」

そう言った彼は俯き、やがて立ち上がり、

「.....だからこそ、私が戻ってこの一連の事件に終止符を打たないといけないんです。——行かせてくれませんか、ジュリアン」

彼の声はオレの耳に届いてなぞいなかった。助けた奴からこんな言葉が出てくるなんて、全く予想していなかった。

脱力感に襲われ、何もかも嫌気が差してくる。

——しかし。

「お前さん一人で何ができるっていうんだ」

「私にしかできません」

きっぱりと言い捨てたメディオンの前に、オレはふらつきながらも再び立ち上がり、彼の顔に指を差して怒鳴るような大声を出した。

「自分ひとりで何でも解決できるって思っていたら大きな勘違いだぞ！ 誰があんたを助けようとしてここまで来たって言うんだ、俺の立場をまるっきり無視してそれで死なれたら、俺がここに居る理由は何なんだよ、え？ お前を俺に託して死んでいった奴をあんたは足蹴にするのか？」

「.....“死んでいった奴”？」

言葉に反応して、メディオンの表情が変わった。

足の苦痛に顔を歪めながら、オレは荷物からフィートの形見となった所属承認証をメディオンの目前に突き出した。

「.....こいつがな、俺にあんたを守ってくれと頼んで、あんたを殺そうとしている奴らに殺されたんだ。この暗殺計画を阻止しようと、計画書盗んで、自分の立場蹴ってまで遠くまで逃げ延びて、実行させまいと必死で守り通したんだ。あんたはこいつのした事を無駄にさせようとしてるんだってまだ分からないのか.....っ」

最後の部分は足の激痛によって遮られた。あまりの痛さにオレの頭がぼうっとする。

「.....っててて」

部屋に入った事すら忘れていたオレは、足を引っ張るような形で靴を脱いだ。案の定とかややはり、オレの両足のふくらはぎは脹れあがっている。ことに先程から痛みを訴えていた右足の足首は真っ赤に膨らんでいて、冷やさなければ明日歩く事ができなくなるだろう。

オレは俯いたまま立ち尽くしているメディオンを一旦放っぽつといて、部屋に備え付けのタオルを冷水に浸して足首に巻きつける。そして、以前にもやった、荷物から薬草を取り出してそれを噛み砕き、患部にあてがい布を巻いた。一つしかないベッドに腰をおろして、ようやく足の負担を開放させる。

「.....それで、ジュリアンはここまで戻ってきたと」

オレが怒鳴り散らして数分後に、メディオンは口を開いた。放心したような、いささかかすれた声だった。

「そうだよ、約束された以上、通さなければならぬいな。——しかしまさか、あんたの口から助けてくれなけりゃよかった、なんて言われるとは心外だった。.....俺のしてきたことは何だったんだ？ こんなに足を痛めてまでも、助ける価値なんてなかったのかもな」

メディオンはオレの皮肉にも食って掛かってこようとはせず、相変わらず俯いたまま、

「.....助けて欲しいなんて訴えていなかった」

ぼそりと言い捨てたメディオンの方にオレは振り向いた。足が悲鳴を上げるのを無視して立ち上がり、彼に近づくと有無を言わせる間もなくオレは、彼の頬を平手でぶっ叩いていた。叩かれたメディオンは打たれた頬を手でさすりながらも、先程のように睨みつけてはこない。

「なんて言い草だ.....何でもっと自分を大切にしようとしななんだ！」

複雑な感情が互い違いに入れ交い、オレは溢れる感情を押さえつける事がもはや無理だと感じていた。

目の前に立って、頬をさすっている男を愛している事実と、この男を見捨ててもいいと思っている事実——。その二つはオレの頭を混乱させていた。

オレはメディオンの両肩に手を置いて、彼を真正面から見据え、

「なあ、何でもっと自分を大切にしないんだ？.....あんたが死んで悲しむ奴だって沢山いるんだぞ？ 自分ひとりの体じゃないんだ、勝手に死んでもいいなんて思うな！ 残された奴らのことまで考えてから判断しろ!!」肩に置いた手から、微かに震えているのが感じられる。

「.....そして、あんたを守ろうとして果てた、フィートの命を無駄にさせるな。.....それとも、そんなことは関係ない、なんて突っぱねる性格が変わっちゃったのかよ！ 一年会わなかっただけで随分と.....」

オレの言葉は止めるべきでない所で止まった。

顔を上げたメディオンの片方の瞳から、涙が一筋こぼれていたのだ。

もう片方の瞳は表面張力のように目に溜まっていて、今にもこぼれ落ちそうだった。——オレはうろたえた。

まさか泣くとは思っていなかったのと、……メディオンの顔を見た瞬間、いみじくも彼に対する想いが溢れてしまったせいでもあった。

ふっ……と、急に足の力が失せて、慌ててオレは再びベッドに腰をかけた。メディオンはとぼとぼ歩いてきて、オレの隣に腰を下ろすと、「……じゃあ、私はどうなるのです？ 私の居場所はもう何処にもないじゃないですか。こんなことになるのならいっそ、自分の命を粗末にしてもよかった。そう……ここまでの道すがら、考えていたのです」

彼は彼で思いつめていたのか？
「さっき、ジュリアン私に対して言いましたね、余計なお世話、だと。……正直、私を助けるなんて余計なお世話なのです。自分の国の者に殺されるならそれでもいいと思った。元々亡命した私に、式典の招待がかかるなんて考えもしなかったから、手紙が来た時には自分に対する報復を今こそ行うのだらうと、薄々感じていた。——そしてそれは、案の定やってきたんだ。無駄に抵抗するまでもないと諦めていたのに、救いの手が差し延べられ、それはよかったとしても、私はこれからどうすればいいのですか？ 自分の故郷を追われてでも、生きる意味があるのですか？」

「……あるよ」
きっぱりと言い捨てたオレの顔を、虚ろな瞳で見返したメディオンは、「……私は、ジュリアンのように割り切って考えられませんよ。たとえ故郷を捨てたとしても、故郷で私を憎む輩が居るという事実がある以上、誰が私を憎んでいるのか知らないまま生きていくのは耐えられません。誰も彼も疑うなんて、私はしたくない」

「だから死んでお詫びを致しましょう、なんて考えていたってのか？ 馬鹿馬鹿しい。——逃げるのが負けただなんて思うな。逃げて奴らを知る機会を得るんだよ。そうすればあんたは国を追われることはない」

「私は誰が犯人だかなんて知りたくはない……知らないままでいたかっただけです」
そうやって無駄に命を落とすのが本望だっていうのか、メディオン……。オレは体ごとメディオンの方へとずらして、説き伏せるように、

「……何でも自分ひとりで解決できるなんて思うんじゃないか。さっきも言ったろ。あんたが死んで悲しむ人間だっているんだ、と。故郷を追われようが王子の身分が失くならうが、あんたを慕う奴が消えたりはしないだろ。むしろ、そんなんであんたを見捨てる奴は、心からあんたを心配なんかしてはいないのさ。身分や肩書きに惚れこんでいるだけだよ」

「だからこそ、私を殺そうとした犯人が、自分の知っている方だったりしたら……私は裏切られたということになるのでしょうか？ 真実を知ることがどれほど怖いか、ジュリアンには分からないのですよ」

表面張力で保っていた、彼のもう片方の瞳に溜まっていた涙が頬を伝った。
オレは彼の瞳からこぼれた涙の跡を、自分の指でそっと拭きながら、「事実を受け止めるのがどんなに辛いかなんて言われなくても分かるさ。——父さんが殺されて死んだと聞いた時だってそうだった」

メディオンははっとした表情で、オレの顔をまっすぐ見つめ、やがて呟くような声を発した。
「……私は……」
「俺のように割り切れないってまた言うのか。そうやって事実から逃げるだけの人間に成り下がっちゃったのか、あんたは？ 事の真相を知る前に死のうとする位なら、少しでも真実を暴いて身を落とそうと思ったほうがまだましだとか考えないのか？ いい加減本心を出せ。以前俺に言ったよな？ 虚飾にまみれた自分を唯一流せるのは雨だと。雨はなくても俺にくらい本心を出してくれよ。少なくとも、俺はあんたを守りたいんだ。約束がどうこうじゃなく、本心からあんたを助けたいと思ってる。俺だけじゃない、お前の周りに居る奴らだって、この事を知ったらあんたを助けたいと駆けつけてくるはずだ。もっと周りにいる奴らを頼ってもいいんだぜ」

「頼れませんよ……」
脆弱な声を出したメディオンは、額に両手を当ててうな垂れた。
オレは彼の片腕を握って、やや強めに額から離させた。驚いた表情を浮かべた彼に、オレは顔を近づける。「なんで頼れないんだ。自分の為に命を投げ出すなんてして欲しくないなどと考えてるのか？ だったらその考えを訂正する必要があるな。お前の周りにいる、お前を慕い信頼している奴らは皆、誰の命令でもなく自分の意志でそこにいるんだ。メディオンという人物に惹かれているからこそ、あんたを守りたいと思えるんだよ。聞くけどな、一度だってあ

んたの周りに誰も居ない、なんてことはなかったはずだ。それはあんたの人望なんだよ」

「ジュリアン……」

胸が詰まったような仕草をしながら、彼はオレから顔を逸らして正面を向いた。半分目を細め、眩しそうに何かを見つめている。やがて、

「私は、逃げなければ、と思っている自分の感情を殺して、帝都に戻ると言ってしまったんです。逃げてみずれば殺されてしまうのだと、そう思ったら、無駄な抵抗などしない方がいいと思ってしまったのです……。ジュリアンに迷惑をかけたのも私にとっては苦痛でした。帝都の方にも、父上にも……。けれど、それは自分の意固地を正当化させるための材料にすぎなかったのですね。テラスにいた時逃げなかったのも、目標が私なら殺してしまってもいいのだと……。けど、ジュリアンは言いましたね、残された者の気持ちも汲んでから死ぬか死なないか考えろと。今思えば、式典に行くのを止めようとしたキャンベルも、私を心配していたからこそなのですね。書類を盗んでまでして、私を守ってくれたフィートさんも……。そして、ジュリアンも」

ああそうだよ。

「そんなに足がおかしくなってまで、私を逃がそうとしてくれたジュリアンを、私は自分の意固地にこだわって全く気遣ってやれませんでした。誰の助けも要らない、自分ひとりで解決させると、自棄になって、私は私を助けてくれた多くの人の努力を無意味にさせようとしていたのですね……」

ようやく本心をあらわにしたメディオンを、これ以上苦しめたくはなかった。オレは彼の肩に片手を置き、正面を向いている彼の顔をこちらに向かせた。虚ろな瞳のままのメディオンは、今にも消えてしまいそうなほど儂げで、思わずオレは、彼の肩に置いた手に力を込めた。

「……もういい、それ以上自分を責めるな。メディオン……」

泣いてこそいなかったが、オレは再び彼の脛に手をやって、涙を拭う仕草をした。——言葉はもう要らなかった。

オレは脛に当てた手を、メディオンの顎へとそとずらして、彼の顔を少しだけ上げた。肩に置いた手も、彼の後頭部へとあてがい、メディオンの顔をくいと引き寄せる。

メディオンは戸惑いも、抵抗も見せなかった。

お互いわずかに見つめあった後に、オレとメディオンは引き寄せられるようにして互いの唇に触れた。やがてそれは続けていくうちに重なり合っていく。今まで抑えの効いていた想いが瞬時にして溢れ出してくる。

胸が熱い。顎に置いていた手は彼の背中へと移動して、いつのまにかオレはメディオンの体を引き寄せていた。彼の腕も同じようにして、オレの背中に回されていた。

……好きだ。

合間にそう呟いて、オレとメディオンは腰をかけていたベッドに同時に倒れこんでいった。

終日空を覆っていた灰色の雲は、太陽を覗かせることも許さないのか、日の光を地上に落とすことなく夜へと変えてしまった。とはいえ、夜になっても雲は一向に空から移動することなく、月の光は全く見えない。

そんな星ひとつ瞬かない空を窓から見上げていたシンビオスは、溜め息を一つついて窓から離れた。明日もこんなどんよりとした日が続くのかと思うと、嫌気が差してくる。今朝方まで晴れていた天気は朝焼けだけで終わってしまい、昼間はすでに雲に覆われていたのだから無理もないが。

「.....今日の式典は無事に終わっただろうか。」

気にかかっていた事を頭の中でゆっくりと転がす。昨日の午前中にストリッチで別れた後に起きたごたごたは、キャンベルがメディオンに裏をかかれて置いてきぼりにされたせいだと、昨日ダンタレスの口から聞いていた。その後、キャンベルは何かメディオンと会うことができたらしいが、だからといって、全ての不安が拭い去られた訳ではない。今日の式典が終われば数日後には帰ってくるはずだと認識しているにも.....。

彼は窓のすぐ後ろに置かれてある執務机の椅子に座り、羽根ペンを手にとった。机に山積みになってある書類に目を通し、サインを書こうにも気が滅入っていてやる気が起きない。——そして、自分の心の奥底から、何かが訴えかけている気がしてならなかった。何だか嫌な予感がする。

「.....これは一体.....？」

思わず独り言を呟くとシンビオスは、自分何か思い悩んでいることがあったらどうかと、頭を悩ませ始めた。

しかし、その意味はこの後すぐに判明した。

扉の向こうから、何かが慌てて駆けてくるような慌ただしい音がシンビオスの耳に入ったかみなかで、彼のいる部屋の扉がけたたましく開いたかと思えば、額に汗を浮かべたダンタレスが入ってきた。表情はいつもと違って冷静を絵に描いたようではなく、取り乱していて、普段とは明らかに違った様子で慌てふためいている。

思わずシンビオスは首をかしげた。

「どうしたんだい？ ダンタレス、こんな時間に」

日は完全に落ちている。夜更けに——とは言ってもまだ宵の口だが——にダンタレスがこの部屋を訪ねてくることなど殆どないからだ。シンビオスとて、夜遅くまで執務室にいる訳じゃないから、自室に戻ってしまえば会うことなど、余程でない限り有り得ないのだが.....。

「.....まだ部屋に戻っていないと聞きました」

「何か、あったんですか」

ダンタレスの尋常じゃない慌てぶりに、シンビオスは表情をこわばらせた。ダンタレスはその問いに何度も頷くと、「ええ。.....帝国で行われた今日の式典で、とんでもないことが起こったようです。驚かないで聞いてくださいよ、シンビオス様。——メディオン殿が命を狙われかけたらしいのです」

「何だって？」

シンビオスは素っ頓狂な声をあげた。ダンタレスが今言った言葉を、頭の中で反芻する。やがて、

「.....メディオン王子が、殺されたんですか！ ダンタレス!!」

食って掛かる勢いでダンタレスに攻め寄ったシンビオスの顔は真っ青だった。汗をかきつつダンタレスは慌てて言葉を付け足す。

「い、いえ、殺されてはいないみたいなのですが、メディオン様は城から逃げてしまったみたいで、今現在何処にいるのか全く行方知れずらしいのですよ」

その時ようやく、シンビオスはさっきから自分を悩ませていた、胸の奥から何かが訴えていた真意を悟った。あれは、メディオン殿の危機を知らせていたのではないだろうか.....？ そう思えば理屈が通る。嫌な予感がしたのも、何かが訴えていた意味も。——シンビオスはしばし考える仕草を見せた後、すぐに顔を上げてダンタレスを正面から見据え、

「メディオン殿お一人で逃げたのですか？」

「い、いえ、それがですね.....」

その問いに、ダンタレスは何故か口ごもった。

「それが何なんだい？」

急かすようにシンビオスが問いただすと、汗を拭きながらダンタレスは話し始めた。

「それがですね、キャンベルから伝書鳩が届いた話では、メディオン様は誰かと一緒に逃げたらしいのですよ。その誰かとは、あまりよく見る事ができなかったらしいのです。いきなりメディオン様のいる場所に飛んできて、彼の手を引いて城から出て行ったのをキャンベルは目撃しているらしいのですが、その人物を見るより、逃げるメディオン様に目が行ってしまったと伝えてありますから」

そんな証言じゃ役に立たないではないか。

シンビオスは勢い込んでいた力が抜けるような溜め息をついた。……もし、もしもだ、メディオンが彼の命を狙う者に、騙されて手を引かれて一緒に逃げてしまっていたら……。

それこそどこか目の届かない場所で殺されてしまうかもしれない。

シンビオスの心は焦った。メディオンを捜さないと……。そう思えば答えはひとつだった。

「ダンタレス。私はメディオン王子の行方を追います。万一、彼を逃がした人物が暗殺する一味の人間だったとしたら、メディオン殿の命が危ない。今すぐ出発するから、すみませんが用意をお願いできませんか？」

などと突拍子もないことを口に出したシンビオスを、ダンタレスは目を丸くして両手をぶんぶんと振り回して止めようとした。

「……今からじゃあシンビオス様とて危険ですよ！ もう夜ですし、明日の朝からにすれば……って、シンビオス様！ 貴方様はそうそう出られる身分じゃないのですよ。もう一隊長ではなくて次期領主なのですから、過大な行動は控えてください……」

などと最初は意気込んで話していたダンタレスの声が、最後にはしぼんでいく風船のように小さくなっていった。それは、シンビオスがダンタレスに対峙するような瞳を、見上げるようにして向けてきたからだだった。有無を言い返すこともできないくらいの威圧感に、ややダンタレスは畏怖してしまったのだ。

「止めないで下さい、ダンタレス。私もメディオン殿も、もとは同じ志を手にして戦った大切な方です。命を狙われたという緊急事態に、黙ってここで見過ごす訳にはいかないでしょう。——それに、彼を助けたとキャンベル殿が言っていた人も気にかかりますし」

だからといって、もしその人物が暗殺に加担している者だったら、もはやメディオンはこの世にはいないだろう。シンビオスはそれが暗殺者でない事を祈るだけしかできなかった。

と、ふいに開け放たれた扉から、わずかに人が歩く音が聞こえてきた。それはまっすぐこの部屋に向かってきている。執務室の近辺にある部屋の殆どは鍵がかかっていて開くことは滅多にない。その部屋の多くは資料や本などを整理する書庫みたいに使われている。そして、その書庫の鍵はシンビオスの座っている机の引出しの中にあるのだ。

誰だか分からないが、今はそれどころじゃないシンビオスは、自分の目前でうろたえているケンタウロスに向かって

「ダンタレス、先程も言いましたが用意をお願いできませんか？ 一刻も早く行かないと、メディオン殿の身が危険ですから」

「その危険はないですよ」

その声はダンタレスが発したものではなかった。

「え？」

扉の向こう——通路側から聞こえたそれは、歩きながらゆっくりと近づいてくる。時折、歩く足に並ぶようにこつ、こつと床を何かで叩く音が響いてきた。そして、開けっ放しの扉から、ひょい、とその姿を二人に現した。

上背は少し高くなってはいたものの、顔の幼さはまだ一年の間じゃ抜けきっていない。銀色の髪は後ろで一つにしばってあり、そこから無造作に背中に回されてある。そして、片手には見慣れない、自分の身長よりも長い杖を手にしていた

その人物は二人の視界に入っただけで軽く会釈をすると、シンビオスの側まで近づいた。ややあって、二人は笑みを交わす。

「グラシア様……どうしてここに？」

そう。シンビオスの隣に居る人物こそ、千年王国発祥に加担したと言われているスピリットを受け継ぎ、代タイノベータとして子孫を残してきた、現エルベゼム教の最高指導者、グラシアその人だったのだ。

「メディオン殿が狙われたという話を、帝都にいる何人かの信仰者から聞きましてね。——こちら側も、何人か使いを

出していたので、情報を手に入れることはたやすい事でした」

すぐ表情を戻してグラシアはシンビオスにそう伝えた。……しかし、彼が言うことはそれだけじゃなかった。

「使いを出していた、ということは、ドミネート皇帝の動向ですか……」

シンビオスが言ったことは、確かにグラシアにとっては重要なことだった。それは皇帝によって自分もかつては狙われたこと。にもかかわらず敵陣へ向かい、ブルザムの兵器ワルキューレの襲撃から帝都を守ったことは記憶に新しい。

自分が動けば、皇帝も何かしかな動きを見せるのは目に見えていた。……だから、グラシアが聖地エルベゼムを離れてここまで来るのはシンビオスにとっても、他の者にとっても以外だったのだ。一年前の遠征以来、こちらに選んできた後、彼は聖地を出ることはなかったらしいから。

シンビオスの問いに、グラシアは悲しげに目を伏せて頷いた。しかし、すぐに顔を上げて、

「それよりも、メディオン殿のことです。聞いたところによれば、メディオン殿を救った人物は、顔こそ見てないものの髪は山吹色で、黒っぽい鎧を身につけていたと聞きました。——心当たり、ありますよね」

……シンビオスは、グラシアがメディオンと共に逃げた人物の特徴を言い始めてすぐに、何と言えればいいか、言葉で言い表せない何かによって、気付いた。——かつては自分と共に戦い、全てが終わった後に、北へ旅立ってしまった無骨な傭兵。

「……ジュリアン……？」

その名前を口にすることは一年ぶりだった。

それは、彼と共に戦った日々を少しづつでも忘れていこうと、シンビオス自身で決めたからだった。口にする度に思い出しては、彼を頼っているのと同じだと。

シンビオスの言葉に、グラシアは深く頷いた。

「そうです。おそらく、ジュリアンでしょう。どこでメディオン殿が狙われていると聞いたのかは分かりませんが、会えばその理由も確かめられますでしょう」

グラシアは、シンビオスの後ろにある窓の向こうを見つめるような、遠い目をしながらそう言った。それは、かつてジュリアンと共に戦った日のことを思い出しているように、シンビオスには見えた。

やがて、シンビオスは決心したように一人頷いて、

「いずれにせよ、メディオン殿が帝国内にいる以上、いつまた命が狙われるか、分かったものではないでしょう。——さっきダンタレスにも話していたとおり、私は帝国に向かいます。黙って見過ごしている訳にはいきませんからね。——グラシア様も同じ考えでしょう？」

シンビオスの問いに、グラシアは隠し立てをする必要もない、といった様子で頷いた。

「はい。ジュリアンがメディオン殿を救ってくれたと確信したときから、私は帝国へ向かおうとしました。……しかし、カーンやヘラ達から一人じゃ危険だと猛反対を受けましてね。こうしてシンビオス殿の所までやってきたのです。私が同行しても構いませんか？」

「もちろんですよ。私も同行者は、なんて言われていられる状況ではなかったもので、助かります」

言ってシンビオスは再び笑顔を向けた。グラシアは頭を下げて、

「そう言ってもらえると嬉しいです。一年前のようにベゼムの杖はありませんが、それがなくても対応できるようには努力しましたから。杖が無くとも大丈夫ですよ」

杖と聞いて、見覚えのない杖だと思っていたそれにシンビオスは目を移動した。その杖は全体的に淡い金色でまとめであり、中心に逆三角形のような形をした紅玉が埋め込まれてある。その両端から淡い金色の羽根が伸びていて、見た限りではベゼムの杖と似た感じを覚える。

シンビオスの視線が杖に向けているのを察したグラシアは、

「ヘルメスの杖と呼ぶのですよ。エルベゼム神殿の宝物庫から見つけたものなのですが、別に古代遺産とかではないらしいです」

と、グラシアは解説してくれた。さすがは聞きしにまさる神殿だけあるな、とシンビオスはぼんやりと思った。ふと見ると、傍らにいたダンタレスの姿がいつの間にか消えている。あれ、と思ったかみたかで、ダンタレスの声が背中側から聞こえた。

「シンビオス様」

振り返ってみれば、ダンタレスは荷袋を片手に持っていた。見た目そんなに重そうでないそれを、彼はシンビオスの

手に持たせて、

「あまり無茶してはいけませんよ、シンビオス様」

そう一言つけて、ダンタレスはシンビオスの空いているもう片方の手を握った。

「.....いいのかい？ ダンタレス」

「止めても無駄な努力をするだけですからね」

笑いながらも、内心不安なのだろうと、彼の気持ちを察したシンビオスはダンタレスに向かって深く頭を下げてから

、

「すぐ戻ってきますから、それまで留守番をお願いします」

「承知しました」

ダンタレスの即答に、シンビオスは頭を上げてからありがとうと付け足した。そしてグラシアの方に体を向けて、

「.....グラシア様、用意は整いました。今すぐにでも出発しましょう」

意気込んで言うと、グラシアも応えるように頷き、

「はい。それじゃ参りましょうか。ダンタレス殿、後をお願いします」

そして二人は揃って、空いたままの扉から部屋を辞した。

フラガルド城を出てすぐ、今まで空を覆っていた雲が急に取り払われたかのように消え去った。——そして、去った後に残った満天の星と、その間にまばゆく輝く月だけが、彼ら二人の道を指し示すかのように、夜の帳が落ちた大地を煌々と照らしつづけていた。

再び太陽が大地を照らし、闇を遠ざけろうとしていた頃――。

オレは閉じていた瞼を開けた。寝ていた訳じゃなく、閉じたまま考え事をしていただけだ。ややあって、瞳を横にずらせば、オレの隣には静かに寝息を立てている男がいる。そう、メディオンだ。

彼はまるでしがみつこうようにしてオレの隣で眠っていた。一つ溜め息をついてから、オレはこの規則的な寝息を立てている彼の肩を揺さぶって起こそうとする、が、完全に熟睡しているのか全く目を覚まそうとしない。

まあ無理もないだろう。昨日あった事を思えば、疲れが出てしまったのも頷けるが、だからといってこんな所で時間を潰しているのは、お世辞にも賢いとは言えない。追っ手がいつ来るかも知れない状況なのだから。

オレは、自分にしがみついているような形で寝ているメディオンに顔を近づけ、腕をまわして彼の頭にそっと手を乗せた。そして耳元で囁くように、

「メディオン、そんなにくつつかれたら.....襲っちまうぜ？」

と言ったかみなかで、肩を揺さぶっても起きる気配をまったく見せなかったメディオンの瞳が瞬時に開いた。

なでるようにして頭に触れていた手を、離すほどの勢いで彼は飛び起きると、起き掛けで頭が働かないのか、

「な、な、な、何を言っているんですか、ジュリアン！」

半分どもりながら声を出した。頬はやや朱が差している。どうやらこいつは冗談が通じない性格のようだな。と思わず納得してしまった。

「肩を揺らしても起きないからな、こう言えば起きるんじゃないか、って思っただけさ。他意はねえよ」

にやにやしなながらオレが答えても、彼は信じていないのか寝台から無言で起き上がって、テーブルに置いといた鎧に手を伸ばして、それを身につけた。

やれやれ、世話のかかる王子様だぜ。さっきまではオレにしがみつकिながら寝ていたのによ。

と悪態ついてから、オレは肩をすくめてから起き上がり装備を整えた。朝日は完全に上がっていて、窓から差し込む光がまぶしい。

ふと視線を感じれば、メディオンがオレをじっと見つめていた。何か言いたいのか、と思ってすぐに彼は口を開いた

。「.....私は、アスピニアに戻ります。こんなことがあったということは、おそらくもうシンビオスの耳に入ってしまったでしょうし。戻っても向こうに迷惑がかかると思うといい気はしませんが.....」

半分目を伏せて言った言葉は、最後の方はややかすれていた。

「.....なら、迷惑がかかる前に始末すればいいことじゃねえか」

とオレが答えると、彼は力なく笑った。そして、

「そうですね、ジュリアンが言ってくれると何だか元気が出てきそうですね。.....まだ敵の正体こそ分かりませんが、まさか何も起きないまま共和国へ逃がすなんてことはしないでしょね」

当たり前だ。他国領内で暗殺ができるのなら亡命した時点で、彼は四六時中命を狙われていたはずだから。

オレは頷いた。

「ようやく決心を固めたか、メディオン」

昨晩のような気弱な態度はもう一切表していない彼は、一年前共に戦った時と何ら変わってはいない。

「はい。昨晩あなたには散々怒鳴られましたからね。.....私は愚かでした。遠い所から私を救う一心で来てくれたジュリアンの気持ちを踏みにじってしまったのも同然でした。――嬉しかったです」

「分かってくれたらそれでいいんだよ。謝る必要なんかもうない」

しかし彼は首を横に振った。

「いいえ。――私は願っていたのです。この式典の招待状が届いた時.....いえ、もっと前からずっと、ジュリアンが居てくれたら、と私は何度もあなたの名前を呼んでいました。ずっと待っていたのです。再び私の目の前に現れることを」

「え？」

思わず聞き返してしまった。.....だとすると、まさか、あの時の.....。

「.....じゃああなたは、オレをずっと呼んでいたのか？」

「——そういうことになりますか……？」

窺うような目つきで答えるメディオンを見て、ようやくオレは確信が持てた。あの日……くしゃみをした時に、メディオンのことを思い出してからというもの、彼のことを口にしてしまったその原因は、彼がオレを呼んでいたからなのだ、と。

思わず声を出して笑ってしまった。メディオンはきよんとした目つきでオレを見ている。

「いやなに、違うと思っていたことが的を射ていたとは思っていなかったんでな。……あんたが呼んでいた声はオレに届いていたんだ。そのせいで、オレはあんたのことばかりを気にするようになり、気がついたら好きになっていた、おかしなもんだな」

と言うと、彼は驚いた表情を浮かべた。それはすぐに笑顔と変わり、

「そうですか、私の声が届いていたから、ジュリアンが私の前に現れてくれたのですね。呼んだ当人が突っぱねるなんて、私は酷いことをあなたにしてしまったのかもしれない」

また落ち込みそうだったので、オレは片手を振って違うと仕草で表した。

「気にしてねえからもうそれ以上言うな。……それより、共和国へ逃げるんだらう？ オレはあんたを安全な場所へ送らなければならないからな。バーランド経由で共和国へ向かう事になるが、それで構わないか？」

そのルートは、かつてシンビオスの軍に居た時に使った経路だった。列車で移動できれば事なきを得られるが、そんな大金をオレは所持していないし、もちろん、メディオンも同じだろう。だとすればあとは徒歩で逃げ切るしか手はないのだ。

「はい。ジュリアンがそう言ってくれるのなら私はそれに応じます」

ならば話は早い。オレは素早く荷物をまとめた。メディオンは荷物といえるような物は一切持ってきていないからやや手持ち無沙汰のようで、突っ立ったままオレの動きを見ているだけだった。

「……朝飯食ってからバルサモを離れて、なるべく早く帝都周辺から離れていかないとな、そろそろこっちにも捜索の手が伸びてくるはずだ」

返答はしないで彼は頷いただけだった。鍵を手にして部屋から出て、扉を閉めようとした時に、彼はオレの手から鍵を取り、「ジュリアンは荷物がありませんから、私が閉めますよ」と言って鍵を閉めた。昨日のような、どことなく余所余所しい感じはもう全く見受けられない。胸中を告白したのが功を奏したのかな、などと勝手な考えを立ててしまう。

二階から一階に降りる時も、もう両足は悲鳴を上げることはなかった。教会へ行くまでなく済んだのは幸いだっただろう。先程、着替えの最中に足に巻いたタオルを取り払って様子を見た時点でも、真っ赤に膨れ上がっていた右足首は、まだ多少腫れてはいるものの歩けない程ではなかった。両足のふくらはぎの脹れも元の通りに戻っている。靴を履いた後も、足が拒絶をすることなくすんなりと歩く事ができた。

やがて一階に降り立ったオレとメディオンは、カウンターに程近いテーブルに腰を下ろして、近づいてきた宿の主人に注文を頼んだ。昨晚目にかかれなかった主人は、どこにでも居そうな酒場の主人らしく威勢がよくて見るからに気さくそうだ。

ふとオレは、リューンの冒険者の宿で会った宿の主人の事を思い出してしまった。逃げるようにして出て行ったオレのことを、主人は今どう思っているだろうか。

「何を考えているのです？」

ふいにメディオンが話し掛けてきた。オレがぼけっと考え事をしていた間、オレの事をずっと見ていたようだ。

「……いやなに、リューンの事をちょっと思い出しただけさ」

カシナートのこと、リューンでの一連の出来事は全て昨晚のうちにメディオンに聞かせている。他国の文化にメディオンは羨ましそうに、「体の自由が利くジュリアンはいいいですね」と言ったのだ。——たとえ亡命したとはいえ以前と生活がなんら変わった訳ではなさそうだった。無理もないが。

ひがむような言い方にうんざりしたオレは、今が何にも束縛されない自由な身じゃないか、と言ってやったら、ああ、言われてみたらそうですねと気付いたように笑ったのだ。——自分の事には疎いメディオンを、呆れるより先にいとおしいと思ったオレもオレだが。

「ああ、昨日言っていた宿のことですか。何か心残りでもあるのですか？」

やんわりとした口調で彼は言う。好奇心ではなく、単にオレが何を考えているのかが知りたいのだ、とその目が訴えていた。

「夜逃げ同然で飛び出してきたからな、一回も依頼を達成することなく姿が消えたから、もしかしたら宿のアルバムにもう載ってるかも、って思っただけさ」

もし載っていたなら、アルバムを見た冒険者達はオレの項目を見てどう思うだろう。ひ弱な奴だな、とせせら笑っているかもしれない。当分あの地に足を踏み入れる事は勘弁したいものだ。

やがて主人が盆に頼んだ料理を乗っけてテーブルに運んできた。話もそこそこに打ち切って、オレとメディオンは食事を摂る。昨日の昼に、彼を救った後帝都で軽い食事を口にただけでそれから何も口にしていなかったせい、皿に盛られた料理は、お互いものの数分でかたづけてしまった。

ふう、と腹がふくれて一息ついた時だった。

食欲が満たされて頭の回転が効き出したのか、ぼやけていた思考がはっきりとしてきたのだ。——彼に問いただそうとして、あんなことがあったせいですっかり忘れていた、解決に繋がる一つの手がかり……。

「……メディオン」

「はい？」

彼はグラスに入っている水をちびちびと飲んでいるところだった。

「忘れていたことがあったんだ」

オレが真剣な表情を見て、彼はグラスをテーブルに置くと、

「何です？」

と話を促す。オレは頷いた後に、できるだけ声を小さくしようと努めながら、

「……あの時、光が差さなかったか？」

あの時だけじゃ分からなかったのか、メディオンは首を傾げると、

「いつですか？」

当然の疑問を口にした。

「覚えていないんだったら仕方がないが……、皇帝が謝辞を言う場面に差し掛かったとき、中庭にいた全員が起立しただろう？」

「ええ。しましたよ。それに何か関係があるのですか」

彼も、オレに倣っているかのようにか細い声で答えていた。再びオレは頷いて、

「大ありなんだ。——ここからはオレの言うことを、遭った事と重ねて思い出してくれよ。……立って数秒後に、着席と言われて全員椅子に座りなおしたよな？ その時に一瞬、全員が座ることに意識している間に、光が差さなかったか？」

鏡を反射させたような光が」

声を潜めてゆっくりとオレが言ったことを、彼は何度も頭の中で転がしているのか、手を口に当てて思案するような態度をとっていた。

やがて整理がついたのか、彼はオレと目を合わせて、かすかに頷いた。

「……ありました。光が差したような感じはしたと思います。方向は、自分が座っていたテラスの右側の下……一階からでした。そのやや中央から逸れた部分から差したと思います。ちらっと、下のほうで何かが輝いたのは覚えているのですが、それが何だかとはまでは考え付きませんでした。誰も咎めませんでしたし、その後起こったことで頭が一杯になってしまいましたからね。——役に立ちましたか？」

やっぱりだ。

オレの考えていた通りだった。メディオンの居る右側から発せられた光だからこそ、オレが部屋の中から見ることもできたのだ。そしてそれはおそらく、いや絶対、メディオンを殺す時の合図として使用したのだろう。

ん？ 待てよ、今メディオンは一階の中央から逸れた場所(……)、って言ったよな？……と、いうことは、まさか……。

嫌な予感がオレの頭に浮かんだ途端、その予感を的中させるかのように、宿の扉がけたたましく開いて外から慌てた様子の男が入ってきた。

「どうしたんだい？」

知り合いなのだろう、主人が気軽にその人物に話し掛けると、息せき切ったその男は、息を静めた後に慌てた口調でこう言った。

「どうもこうもないよ、町の門に何人かの兵士が来て、訳の分からない事をまくしたててるんだ。今町長と話を付けてい

る様子だけど、どうやら兵士達は町の中を捜索させてくれって言っているらしい、おかしいこともあるもんだよな。何かあったのかって町じゅうの噂だぜ」

何だって?!

まさか、とオレが口にする前に、メディオンはもう重苦しい表情で頷いていた。——畜生、もう手が伸びてきたか。町を出る前に捜索されちゃかなわない。……しかし、どうする？ 町門の前に兵士が居る以上、ここから逃げ出す方法はない。町の中に入ってきた時にこっそりと抜け出すか？ いや、そんなことしたら町の人間に訝しがられてしまう。メディオンが普通に宿を取れたり、ここで食事をしていても彼に話し掛けてくることがないから、おそらく彼が第三王子だと主人らは気付いていないのだろうが、町の外に出たらどうだか分かるものか。

額から冷汗が流れて頬を伝った。

打ち出された選択肢は二つ。——戦うか、強行して逃げるか。

しかし、不安げな色を濃くして伏せ目がちなメディオンを見て瞬時に、オレの決心は固まった。

こいつを守ることができるのはオレだけだ。

そう思えば、オレの心に巣食っていた不安は、風に飛ばされるように吹き飛んだ。守りたいという気持ちが、霞んでいた目を覚ましていく。

しかし、共和国への道のりはまだ果てしなく長かったのだった——。

狩人は都を駆ける（前編）

<http://p.booklog.jp/book/104404>

著者：ジュリアン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/9412jms/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104404>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104404>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ